

# 10周年記念誌

北海道高等学校教育研究会

## 目 次

祝刊の辞	北海道高等学校教育研究会会长	磯貝芳司	1
祝　　辞	北海道教育委員会教育長	山本武	2
祝　　辞	札幌市教育委員会教育長	高橋喜敬	3
祝　　辞	北海道高等学校長協会会长	川田正徳	4
高校教育研究会の思い出	初代会長	梶浦善次	5
10周年に思う	2代会長	瀬米藏	8
一高校長と高教研	現会長	磯貝芳司	11
高教研の歴史と運営		編集部	15
地区支部10年の歩み			28
教科部会10年の歩み			39
10周年座談会・回顧と展望			53
研究成果一覧			62
研究紀要研究調査一覧			78
歴代役員名簿			83
本部事務局			94
庶務部			94
研究部			97
編集部			98
組織部			102
会計部			102
年　　表			103
編集後記			109



# 発刊の辞

北海道高等学校教育研究会長

会長 磯貝芳司

わたしたちの北海道高等学校教育研究会も、本年は10周年を迎えるに至りました。はじめの頃は、「旭丘教研」とか「校長教研」とか呼ばれ、いろいろな誤解や反対があり、「育つだろうか」と危ぶまれました。しかし今日は会員も本道高等学校教員の過半数以上の6千名をこえ、「みんなの高教研」としてどっしりと現場に定着いたしました。これも偏見に關係各位のご援助の賜物であり、さらにまた会員各位が、「各教科の立場から本道高校教育を前進させたい」という願いをこめ、「あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる場」を確保したいと努力した結果であると信じます。

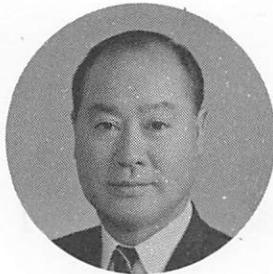
今私の校長室のガラスケースに、本研究会の研究紀要が、昭和39年3月の創刊号から第9号まで整然と飾られています。この研究紀要是、とりもなおさず本研究会の研究成果であり、また本研究会のたしかな足跡でもありますて、これに研究論文を寄せられた多くの会員の先生方の力強い息吹をひしひしと感じています。

昭和38年5月25日、札幌南高校において本研究会の設立総会が開かれてスタートし、翌昭和39年2月1日に第1回研究大会が札幌旭丘高校で開催されて本年は第10回の記念大会を開くに至りました。

この記念誌は、この第10回記念大会をトして、第1に草創の精神をさぐる。第2に研究会としての業績をまとめる。第3に今後の展望を考えることを意図して編集いたしました。

「古きを温めて新しきを知る」という言葉がありますが、本研究会を育てて下さった関係各位のご努力の跡をたどり、新しき10年への飛躍の礎石として本記念誌が活用されることを願ってやみません。

この編集に当り、執筆に当られた関係各位に厚くお礼を申し上げまして発刊の辞といたします



# 祝辭

北海道教育委員会

教育長 山本 武

北海道高等学校教育研究会が設立されましてから本年で10周年を迎えましたことは、誠に喜ばしく心からお祝い申し上げます。

本研究会は、昭和38年5月、札幌南高校で設立総会がもたれましたが、時あたかも戦後のベビーブームによる高校生の急増期にあたり、所得倍増計画が軌道に乗って経済の著しい発展と相俟って高校進学率が急上昇の時期がありました。このような社会情勢の急激な変化の中にあって、高等学校教育はこの変化に対応すべく、その内容と体質の改善が問われているときであったのであります。

翌、昭和39年2月第1回の研究大会が札幌旭丘高校を会場として開催されましたときは、参加会員350名であったものが、現在会員数6,000名を越え、本道の高等学校における総合的な教科研究会として最大の規模を持ち、高等学校関係教員の過半数を擁するまでに発展をみたのであります。

本研究会がこのように隆盛発展をみましたのは、高等学校教育の内容と体質の改善という時代の要請に応えるべく、「各教科の立場から本道高校教育の前進を願い、あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる」ことを目標として発足されたこととともに、この目標実現のために幾多の障害を乗り越えて、本会の運営と発展の為に尽された歴代会長をはじめとする役員の方々のご努力と、本会を自主的な研究の場として守り育てようとする会員各位の熱意によるものであります。ここに深く敬意を表する次第であります。

近年、高等学校の教育は大きく転換されようとしております。その理由として、高等学校への進学率の急速な増大があげられます。昭和46年度の我国の高校進学率は85%を突破し、北海道においても78.2%に達し、さらに急速な上昇が予想されているのであります。このことは、高等学校が後期中等教育段階の青少年の大部分を教育する機関となっており、生徒の能力・適性・進路などが著しく多様、多層のものとなってきたことを示すものであります。

また、最近の科学、技術の高度な発達と経済、社会、文化の急激な進展による知識・情報量の飛躍的な増大であります。そして、これらの増大が単に固定し、蓄積されるだけでなく、流動変化も急速の度を増しているのであります。このことは高等学校が従来の知識偏重の教育に反省を加えなければならぬことを示すものであります。

このような高等学校教育をめぐる情勢の変化に対して、現在緊急の問題は、教育の内容と教育方法の改善であります。このような時期に「学習指導の現代化」を共通のテーマとして、各教科の立場から本道の高校教育を前進させたいと願う本研究の使命は極めて大きく、会員各位の研究に寄せる期待もはかり知れないものがあります。

この機会に本研究会が果してきた役割を思いおこし、さらに、本道高等学校教育の向上に今後一層のご研鑽を重ねられんことを念願してやみません。



# 祝辭

札幌市教育委員会

教育長 高橋 喜敬

北海道高等学校教育研究会が昭和38年に発足し、後期中等教育の現代化をめざして各教科が自主的な研究活動を開始してから既に10年が経過しました。その間、各会員におかれましては、本会の発展充実のため日常の教育実践を通じ貴重な研究成果をあげられたご努力に対し、心から敬意を表すとともに、これまでの研究成果をもとに将来に向っていっそうの飛躍を遂げることを期待して止まないところであります。

昭和45年10月、文部省は高等学校の新学習指導要領を告示し、小学校、中学校に続いて高等学校においても、昭和48年度から新教育課程が学年進行によって実施されようとしております。

義務教育に続く中等教育の最終段階である後期中等教育においては、未来社会に適応しうる思考力、創造力、実践力等の育成が強く要請されております。しかるに、現代社会に見られる、責任感や連帯感の欠如、人間性疎外の傾向など、青少年の健全な育成を阻害する社会現象に思いをいたすとき、生徒指導の重要性を痛感せざるを得ません。加えて、時代の変遷や科学技術の開発にともなって知識量が膨大している現代社会においては、当然指導内容の精選、集約が必須条件となります。そのため高等学校においては、未来社会に適応する能力の伸長を図るために、生徒の能力、適性等に応じ普通教育の最終段階として「何を」、「どのように」教えるかについて的確に判断しなければなりません。新しい時代に生き、より新しい時代をつくりだしていく能力をつちかうための教材を、専門的な視野から選択し効率的に指導することこそ、高等学校の教師に課せられた使命であります。

明治5年に学制が発布されてから既に1世紀が経過しましたが、その間における国民教育の普及、および教育水準の向上には著しいものがあり、世界の先進諸国の中にもあっても、現在わが国の教育は決して遜色なきまでに進歩発展を遂げました。また、近年における日本経済の高度成長と相俟つてわが国が世界の教育、学術、文化の面で果たすべき役割も増大したといえましょう。

文部省においては、これら教育、学術、文化の交流に関し中央教育審議会に諮問し、わが国として今後の方策を検討中であります。いやしくも今日の世界情勢にかんがみ、一国が他国との相互関係を無視して存在することは不可能といえましょう。そのため、次代の日本を背負う青少年が正しい国際性、国際感覚を身につけるための教育もよりいっそう重視されねばならないと考えます。

今後ますます多様化される後期中等教育の質的充実に向って高等学校の諸先生が、いっそうご精進くださるよう衷心よりご期待申しあげ、あいさつのことばといたします。

# 祝　　辞

北海道高等学校長協会

会長 川田正徳



昭和39年3月、北海道高等学校教育研究会の研究論文集としての研究紀要第1号が、いろいろの悪条件を克服して、熱心な会員諸先生の努力によって刊行されてから早や10年、ここに10周年記念誌を発刊されることになりました。誠に喜ばしいことであり、心からお祝いを申し上げるとともに、会員の先生の熱意に深く敬意を表す次第であります。

顧みれば、この10年は実に激動の10年がありました。戦後のベビーブームと進学率の上昇による生徒の急激な増加、大学紛争の波及により、高校生の過激な政治的活動による高校紛争、経済の高度成長、科学技術の急速な進歩、情報化社会といわれる情報の過多、そして公害問題、過疎過密問題など数えられない程の目まぐるしい動きの連続でした。このためにややもすると目前の問題解決に追われて、望ましい高校教育のあり方を考えることを忘れていたのではないかと反省させられる程であります。しかし、幸にも研究心に溢れる会員諸先生の力により、高教研は着実にその組織を固め、その機能を發揮して高校教育の発展に寄与され、その功績は誠に大きなものがありました。

およそどんな仕事でも、その仕事の効果を高めようとするならば、その仕事に対する工夫とか、研究を必要とすることはいうまでもありません。教育という仕事、未来に生きる生徒を対象として、その生徒が持っているあらゆる才能を引き出すという重要な仕事をする先生にとって、研究は怠ることのできないことであるということは今更申し上げる必要もないことであります。この意味において先生は、教育の内容や方法について研究をし、改善をして、義務教育化した多くの生徒、素質も環境も多様な生徒に対して自主的、創造的な思考の十分な開発に努めなければならないと思います。どのような教科であれ、研究を重ねて常に新しい知識を開拓し、新しい技術を生みだすようにして、未来に生きる生徒に対し、先生は未来に対する明確な先見性をもち、勇気をもって実践することが必要であると思います。

この10周年記念誌は会員諸兄の自由な研究発表の集大成であります。

今後は更に高校教育進展のための一つの拠り所として一層の発展を期待してやみません。



## 高校教育研究会の思い出

初代会長 梶浦善次

北海道高校教育研究会が発足してから、本年で10年を迎えたということである。記念誌を発行するので、その思い出を書くようにという事務局からの依頼で、改めて、そんなに経ったのか、と驚いている次第である。

発足の当初は、予定された会員数に達せず、しかも教員組合のしつこい反対のために、学校ごと入会の取消をしてくるところもあり、どうなることかと全くはらはらさせられたものである。

この10年の間に、会員数6,000を越え、毎年の研究会も会場その他大変苦労するほどだという。いわば嬉しい悲鳴であり、まさに隔世の感じがする。

堂々たるその成長と本道の高校教育の上に与えつつある大きな影響力に対して、改めて驚異の目を注ぐとともに、会員諸氏並びに会の運営の衝に当たる方々のご健斗に対して心から敬意を表わすと同時に、この会のますます発展されるよう祈るのである。

※ ※

高校長協会の常任理事会で、1番はじめに研究会のことか話題となったのが、日誌のようなものをつける習慣を早くからなくした私には正確なことは分らない。多分38年の2月か3月ごろであったようだ。研究会ができると、まとまった補助金が得られるということであった。

道教委では、以前から教育研究団体の助成をしていたが、多数の教科毎の研究団体を助成するわずらわしさをやめて、図書館教育とか視聴覚教育といったすべての学校教育にわたるような研究団体を助成する方向に変わって来ていた。

高校教育研究会の結成も、このような方向の転換の流れの中で問題になったようだ。高校教育の全体を含む研究組織ができると、それに応じた助成金が得られるのであり、現場の先生方にプラスになるのではないか、ということでその成立の可能性が

話題にされたのである。

このことが問題になると、教員組合はいち早くこれを知って、常任理事会の席にその代表者が来て、新しい研究団体結成の動きを止めるようにという要求を出したりした。しかし義務教育の諸学校の場合と高校の場合では、その趣きはかなりちがっており、研究組織も教科によってまちまちであり、全国的な団体に加わっている教科もあれば、研究組織の無い教科もあるという状態であった。また地区別の研究会や組合主催の研究会はあったが、一定の会員をもった研究団体ではなかった。いろいろな点を検討した結果、研究会設立の意義を認め、それに踏み切ることとなった。

ところで新しい研究団体は、校長協会とは別個のものではあるが、それが成立発足までは、校長協会が世話をしなければならなかつた。そしてそれは当時札幌支部長をしていた札幌東高校の江口孝校長に委かされた。

江口先生は、責任者として組合から何回か中止するようにという団交を受けたと聞いている。江口校長は、平素寡黙の人であったが断固とした信念と実行の士であり、そうした障害にかかわらず着々準備を進められ、5月の南高校における創立総会まで漕ぎつけたのであった。

この研究会の発足には、高校長協会の理事長であった小野謙次氏及び札幌東高校長の江口孝氏の存在が大きな役割を果たしたのであり、両氏の功績を忘れてはならない。

※ ※

創立総会で、否応なく会長を指名されて、私は全く途方にくれたのであった。今後どう発展するか雲をつかむような有さまであった。

まず何よりも会員を確実に把握して事業計画を立て、道教委に助成を申請することが必要であった。

会員数を確定することは、全道の高校にわたることであり、またはじめにもふれた組合の反対もあって、容易でなかった。幸いなことは、旭丘高校の先生方がほとんど全部が心から協力して、仕事を進めていたことであった。一つの学校だけがどんなに努力しても眞の意味でその教育は高まらない。他の学校も共に高まるので無ければならない。他の学校へ奉仕することは同時に自己への奉仕であり、また自校の生徒への奉仕になる。というのが私の持論であり、先生方はそれに共感されて、かなりに負担の重い今の仕事に当っていただいたと思っている。

7月には、第1回の役員会議を開き、行事の計画を検討して二つの柱を建てた。研究大会の開催と研究紀要の刊行である。

研究会の大きな目標の一つは、先生方に研究発表の機会と場を提供することであり、それによって研究を交流することにある。したがってこの二つは研究会としては当然のことであるが、私はこの二つを通して先生方が負担する会費よりも、より多くのものが還元されているということを示したかった。

いわゆる民間教育団体といわれるものの多くは、毎年大会を開催するだけで、外には余り研究の積み重ねがなされていないのが実状であった。また道内の先生方の中には、会費は出しても、それがどんな風に自分たちに還って来るのか分らないという考え方もあるように聞いていた。

それでとくに研究紀要の刊行に力を入れ、紀要だけでも、会費以上に相当するものを配布すべきだと考えたのであった。これには旭丘高校で研究紀要を刊行していた経験が大きかった。印刷された研究物は、きわめて大きな意義をもつものであることをよく知っていたからである。

秋には事務局の会議を開き、この二つの仕事を進めていった。

翌39年2月のはじめに第1回の研究大会を開催し、新学期となって研究紀要創刊号を配布することができた。これでこの会の運営の骨格ができたといってもいい。

1年を歩んでみて、この会の前途に一筋の光明を認めたのであった。

※ ※

研究会については忘れられないことがいくつかあ

る。一つは第1回の研究大会を1週間ばかり後に控えての、高教組の組合員との話合いである。

1月の下旬に、数名の者が話合いを求めて来た。私は、彼らとの話合いには余り気が進まなかつたが、すでに学校に来て何か打合せをしているということであった。今さら逃げかくれすることもできず、否応なしに会わざるを得なかつた。

事務局長をしていた成田先生（現岩見沢東高校長）に応待を頼んで、私は発言しないで聞くことにしようということで、この席にのぞんだのであった。

彼らは、研究会の会員数とか会費から始めて、会の組織や運営にわたって、まるで検察官でもあるような態度と口吻で、質問したり反論したりした。

そのうちに旭丘高校では会費をどうしているかと質問し、成田先生が、PTAの研究費から支出している旨答えると、PTAにとってそれはおかしいとか筋ちがいであるということを、詰問するような調子で主張した。

ここまで黙って聞いていた私もついにたまりかねてどなったものである。

「一体君たちは、北海道高校教育研究会の会長に会いに来たのか、それとも札幌旭丘高校長に会いに来たのか、どっちなのか。ここで旭丘高校のPTAの運営についてとやかく言うことは何事か。ものごとの区別の分らぬ者との話合いは無用だから話合いは打ち切りたい。」

この発言をきっかけに、その場は完全に私と彼らの話合いとなつた。要するに彼らの言い分は、文部省の助成を受けるこの研究会は、紐つきの研究団体である。研究会を止めろ、というのである。そしていわゆる「池田＝ロバートソン会談」の内容なるものを、手垢のついたノートを開いて読み上げる始末であった。余りにもおとなげない独断的な主張にあきれて、私も若干ませつ返した。

「君の読んだのは何かの訳文のようだが、原文をもってきてもらいたい。」

「いやそんな必要はない。これはニューヨーク・タイムスなどにのったものであり、日本の新聞でも報道されたものだ。」

「君らに必要がなくても僕には必要だ。僕は君らのようにお人よしではないんで、訳文などは信用しないことにしている。文章の調子はいくらでも変わ

るんだ。ノートまで用意する位研究熱心な君たちのことだ、当然原文も手に入るだろう。ぜひもらいたい。」

「先生は社会科学の専門家でありながら、歴史の動向の必然性を知らないのか。」

「僕はその方面の専門家だからこそ、君たちのように単純にはなれないのだ。君たちのいう歴史の必然性なるものを証明してもらいたい。一体君らは『革命の代数学』といわれる唯物史観の公式を知つたからといって、それですべての問題が解決されると考えるのか。代数と算術はちがう。」

この話合いは、最後はこんな禅問答のようなものとなって終った。しかし私はこの話合いで、この研究会は、彼らによって「校長研」というように呼ばれていることをはじめて知ったのであった。この連中は、研究会当日も学校に入りこんで、参加者数を数えたりして示威的な行動をしていたようである。

研究大会では、毎回講師の招へいに苦労した。第1回目は森戸辰男氏、第2回目は高坂正顕氏であった。中教審の大物ばかりであった。

第1回の研究会の講師として役員会で挙げられたのは波多野完治氏であった。「教育の近代化」という観点から波多野氏に交渉することになり10月に上京した。御宅に伺ってお話をしたところ、2月上旬は大学の用務で都合がつかないと断わられ、途方にくれて、民主教育協会の事務局のみやさきひろし氏に相談した。その結果森戸氏にお願いしようということになった。みやさき氏の紹介で育英会の本部に森戸氏を訪ね、ようやく講師の承諾を得たのであった。

第1回目の講師が森戸氏になったので、第2回目は、森戸氏に匹敵するような教育の全体を見通せる学者、思想家というので、自然に高坂氏と定まった。

私は東京文理大の恩師である下村寅太郎先生を訪ねて事情を話し、紹介状をもらい、また電話をかけていただいた。両先生とも西田門下の逸材で、先輩、後輩の関係なので大変好都合であった。

ところで1月9日、高坂氏が来られたその朝に「期待される人間像」が中間草案という前例のない形で発表されたのであった。この人間像の委員会の主査が高坂氏であった。私はその日までそのことを知らなかった。氏はまさに時の人であった。

とも角いろいろと論議的となった「期待される

人間像」の立役者を迎えたことになり、森戸さんといい高坂さんといい、中教審の大物ばかりなので、組合の思うつぱになるだろうと苦笑せざるを得なかつた。

「薄氷をふむ」思いをしたのは第3回のことであった。後期中等教育の整備改善が問題になっていた時であり、講師は自然に国立教育研究所長の平塚益徳氏ということになった。多忙な著名人を講師に迎えるのにはかなり早くから約束しておかなくてはならないというので、7月のはじめに交渉し、9月のはじめには快諾された旨の返事をいただいた。

10月、高校長協会普通部会の会合に出席の折、研究所に氏を訪ねて来道を確かめた。

研究大会は1月10日、一切の準備を完了して正月の休みに入っていた。12月29日、予算編成上の都合のため、所長は大会に行けない。という電話が入ったのである。どこも正月休みであり、どうにも手の打ち方がないのである。3日のあけるのを待って上京し、平塚氏是非他の講師を推せんしてもらいたいと頼みこんだ。この結果沢田慶輔氏のお宅に参上し、窮状を訴えてようやく承諾を得た。4、5日後に迫った研究会の講師を引きうけてもらえるかどうか、全く不安であった。沢田さんは、生徒指導の本質的なことについて話されたと記憶している。私は一しおの感激であった。

## ※ ※

会の運営上1番大きい問題は、何といっても、財政上の問題であった。この研究会の目標は、財政的なパイプとなって、先生方に研究の場をつくることであった。それには助成を多くしなければならない。助成を増すには、会員数の増強が唯一の鍵なのである。

第2年目の助成金割当の会合が、39年の4月の終りに開かれた。この時私は微熱が引き続き、ドック入りのつもりで病院にいた。この会には、旭丘の事務長が出席したが、前年度より5万円ばかり減らした額が示された。補助金が減額されても、会の運営が困難になると訴えたのに対して、「助成をふやしだければ実績をつけて来い」というのが係りの事務官のことばであったと報告された。

私はこれを聞いて心から憤慨した。この会は何回もふれたように、現場の先生方への財政的パイプと

なって研究活動を盛にしたいという考えから生れたものではあるが、他面では複雑な民間教育団体に対する助成の事務のむづかしさやわざらわしさを簡約にするという道教委の方針に協力するものでもあった。その発足の意義を忘れ、またその後の反対斗争の中での努力を無視した冷酷な官僚意識まる出しの暴言としか受けられなかった。会が尻しづみになっていくよりは、補助を返上して道教委の責任を追求するつもりでいた。ただこういう状勢を察してか、12日後に10万円増加するという通知を受けた。

しかし私には下僚の無責任な暴言は許されないと感じ、5月はじめの校長協会の席上、教育委員長及び教育長に対して、研究会発足からの経緯を明らかにし、教育団体助成の基本姿勢について質問することを通知した。こまかることははぶくが、このことが主管の課に知れると、そちらからその質問を取下

げてもらいたいという要請が来た。私は内部の事情を知り、当初の考え方を変えて、簡単な要望に止めることにした。

今にして思えば、私も若かった。憤慨すべきことには、心から憤慨できた。

※ ※

「校長研」と宣伝されたり「旭丘研」と蔭口をたたかれながらも、この研究会は堂々たる存在となつた。今や教育の全体が再検討され再編成さるべき時期になっている。

「先導的試行」というようなことばも耳慣れた教育界の用語となり、カリキュラムの運営にもかなりの巾をもたせるようになるという。こういう時にこそ研究会の意味がいよいよ重くなっていると考える。

研究会の発展、会員諸氏の研究の深まりを期待したい。



## 10周年に思う

2代会長 長瀬米蔵

「本会も今年が10年目になりました」ときかされ、しみじみとした感慨を覚えますと共に、何とも言えない喜びを禁じ得ません。家にたとえれば、子供が生れてもう4年生になっているというわけで、この10年というものは、実は中味の充実した尊い時間だったと思われます。この子供がここまで健康な子に育ったということは、生みの親として当初ご苦労なされた方々の、養育の目的とか、方法とか、愛情とか、そうした要素が見事に融合し、結実をとげたものとして、心から敬意を表する次第です。

この会の誕生が話題となったのは、昭和38年の2月13日でした。新学制が発足して15年目でありました。当時すでに義務教育関係においては、ほとんど全教科について、全道的な連盟組織ができ、大きく活動していたと思います。高等学校の関係としては、

数学、理科、家庭、英語等が目立った活動をしており、また農業、工業、商業、水産等が職業課程独自の特色を生かしながら活躍していたこと、さらに定期制課程もいち早く研修体制を組んで成果を残しつつありました。

なおその他にも種々組織があり、夫々貢献していましたが、科目によっては、切望されていながらも、専任教員の少いことなどから、会としての組織活動にいたらないものもあったようあります。

先にのべられたものは何れも、夫々の教科や課程に関する教員が、自分たちの問題として自発的に取り組んでいたもので、研修の本旨に則したものだったと思うのです。ただ幾つかの教科で、いろいろな困難があって組織的な研修に入れないものがあったということは事実でした。このような時期に本会

の誕生について話し合われたのです。

私にとって、この話題が出たとき一寸突飛な印象もうけました。「昭和38年度教育研究団体体育成強化国庫補助金」という背景があることもきいてました。

すでに活動している団体もあることは前述のとおりです。しかし、研修が義務づけられている教員として、洩れる者のない、そして無理のない姿において取り組むとすれば、この考え方もよいことであると思うようになったのであります。

勿論いろいろな問題はあったわけで、たとえば、補助金をうけるとなると運営に拘束が生じるのではないか、既存の研究団体との関係はどうなるのか、組織が巨大になりすぎて現実の組織運営や会場などどうなるのか、会費の負担がどうなるのか、全体として役員はどこでどうきめられるのか、会員は希望者のみでよいのか、等その他いくらでもあげられたのです。それにもかかわらず、その年5月25日、本会の設立総会が札幌南高校において行なわれ、会則、役員が決定され、会則の定めによる事業計画、組織づくりの推進などがスタートしたのであります。話題がてて百日余りでスタートできたということは、正に驚くべきことですが、何といつてもその主旨がよろしかったこと、懸念された諸問題についても夫々ふかく配慮されたこと、希望者は誰でも会員として自由に研修し発表できること、閉じられていた窓が内外に打ち開かれたという印象と、将来への展望を覚えたこと等があったと思うのです。

私はその頃は小樽にいたので詳らかにしないが、初代会長の梶浦善次先生を中心として、万端の準備に当られた方々のご苦心とご配慮は、並々でなかつたとお察しするのであります。

1粒の雨が池の水面におちて、その水輪がしづかに順序正しく、輪が輪を追うように広がっていく。これは自然必然性です。人間の意志には無関係です。そのようにこの会は1回、2回と順を重ねて成育してきたのです。これは自然現象ではなく、人間の現象ですが、根本は素直な書き意志にあったと思います。

第1回の研究大会は札幌旭丘高校で催され、講演、研究発表、分科会が行われました。新学制発足当時の現職文部大臣であった森戸辰男先生の講演は、動ぜず聴せず諄々と説き来たり説き去り、あきるところのない眞の教育者の生きた姿そのままに映り、深

い感動を覚えたものでした。

第2回は、私は旭川にいたが、梶浦先生からの年賀状に添え書し「参加申込み急増で、にわかに講演会場を静修高校講堂に変更という嬉しい悲鳴をあげている……」とあったことが忘れられません。

この回から期間を2日間とし、初日は講演と研究発表、2日目は旭丘会場で公開授業と分科会が行われたのですが、授業公開ということは、研究と実践の係わりを暗示したもので、本会の本旨に視点を合せたものとして、その後の各教科部会にも影響しているといえます。

昭和41年4月、私は札幌旭丘高校に転任になり、6月14日の役員会で会長に推されました。もとより過ぎたる重荷と思いましたが、要は、敷かれたレールを外すれないように留意しつつ、そのレールを守り延ばすと共に、乗客を沢山おまねきすることが、差当っての役目と心に決め、急がずあわてず、時間をかけて充実していくべきであろうと考えた次第です。

梶浦先生ご苦心の3年間に、本会にあるべき姿が、具体的な形ですでに基礎が固まっているので、それをいくらかでも中味をふやし充実したものとして全道的に安定させていくことが私に課せられているのだと思いました。そうした点からいくつかのポイントをきめることにし、活動の原源となる経済的基盤をまず強化したいと、会費と補助金の増額をとり上げて見ました。

また教科部会の充実と活躍が本会の性格からみて大切な柱になることに留意しました。広域な本道の事情からみて、地区別の活動態勢は極要なものであると考え、還元金増額の方途も講ずべきだと思いましたが、意に任せぬ有様でした。

会員の諸研究が広く読まれるようにという研究紀要については、教科部会に推せんを依頼し、できるだけ多くの人々の成果を集約できるように工夫をつけたことと、創刊以来の執筆者と主題を、毎号の末尾にまとめてのせて、誰にでも当初からの研究の動向と内容をつかみ易いようにしたわけです。

会報を年2回とし、7月に年度の企画を会員に報告し、研究と実践の意欲の支えとし、翌年3月には、研究大会の内容を特に詳しくして、参加できなかつた会員にも概要が正確に伝わるようにし、会員の保

持と増加になる資料といった次第です。

大会の持ち方も色々あるのですが、年1回のことでもあり、全教科にわたるところから、第1日目はもっぱら耳きいて心で考える日として午前・午後にわけ、文科系・理科系のすぐれた講師の話を1人の教員として一堂に会してきくことに更めてみました。第2日目の分科会についても会員の増加により、第5回目大会から、いくつかの学校その他に教科ごとに設定してもらうこととし、教科という柱がいよいよ太く確立するよう協力を願うことになったのです。

人は一生に三つの名をもらうが、第1の名は親からいただいた名、第2の名はニックネーム、第3の名は死後にいただく名声ないし悪名である。と何かでよんだが、本会にもニックネームがあったようです。曰く、梶浦教研、曰く、旭丘教研とのこと。

外から見ると、旭丘高校にある事務局から頻々と連絡やら催促が出ているから、「また来たか」と言って、そうしたニックネームになったのでしょうか、精出して働いている事務局員は、この会は全道の先生たちの会であるから、おろそかにはできないと覚悟の上でやっていたわけです。そこで、第5回以降の大会にそなえて準備段階から、教科の地区代表、地区的事務担当者をきめてもらい、夫々に代表者会議をもち進めることにしてみました。

また、大会の講演会の進行についても、司会者を2名づつとし、各地区から出でもらい、質疑その他お世話を頼うことにしていましたが、これらの配慮は、会員が自らの手によって自分たちの大会を運営しているのであるということを実際に表現したものです。このあたりは、当時の事務局長であった大塚先生の苦心されたところです。

事務局としての毎回の悩みは初日の講演会場でし

た。静修高校では2、3、4回と3年つづいたが、4回の時は平塚益徳先生と札医大の中川先生が講師で、たちまち満員となり、椅子を出すにしても他校のことでの大変な苦労でした。5、6、7回は、札幌市民会館に移り、これで椅子運びがなくて済むかと思えば参加者はふえる一方で、館内の部屋ごとにテレビを取りつけたが、椅子が不足で旭丘高校からトラックで運び、夕方再び学校へもどして翌日の分科会の会場をつくらねばならぬことになったのです。それでも事務局の先生がたは、全道の先生がたの会の為になればと、文字どおり手弁当で奮斗して下さったのであって、唯々感謝あるのみでした。

講師の依頼ということも最大の難関です。教科は夫々お任せして約定してもらうのですが、全体講師となると簡単でなく、あらゆる先生がたが年1回一堂に会し、教科の衣を脱いだ姿で、教員としての教養に資する為ですから、そこが難しいし、この人と思ってもご都合がつかねばだめであるし、毎回2名の講師をきめるにはなかなか苦心があり、それは今後ともつづくことでしょう。

ただ心からうれしく思ったことは「北海道の先生がたが、そのような大きな研究会を組織運営し、かつ、研究と実践の成果を、紀要等に積み重ねつつある誠実さには心から脱帽する」など激励されたりしたことです。

それでも終ってお礼をさし上げる時「寸志ですが……」とお渡しするが、第1回目と同額の内容を知っているだけに、「寸志」は謙遜のひびきがなく、文字通りを下廻る「寸志」なのだから会長として心苦しかったことを白状します。

経済的に苦しいけれど、良いことをするのだから恥とはならないと思っています。

一層のご発展を祈ります。

# 一高校長と高教研

会長 磯貝芳司

高教研は、今年10周年を迎えるに至りました。虚子の句に、「遠山に日の当りたる枯野かな」がありますが、日の当たる遙かなる遠山をめざして蕭条たる枯野をたどった10年が、高教研の歩みでした。そしてこの10年は、私の校長10年でもありますので、これを「一高校長と高教研」として私なりにたどって見たいと思います。

1

高教研の設立総会は、昭和38年5月25日に札幌南高校において行われた。しかし総会に先立って、高校教員全体の研究会設立の機運は盛り上っていたのである。これは小、中学校と違って高校では未組織であってその必要が痛感されていたのと、道教委がまとまった研究団体に補助金を出すことにしたことも与って力があった。

私は昭和36年に道教委から出て奈井江の校長になったが、生徒については高体連や高文連の組織があるが、先生方の教科研究については正に「一匹狼」の状態であるので、先生方に共通の研究の場が与えられることは極めて有意義であると思った。

あたかも校長協会の常任理事会でこのことが取り上げられ、北空知の理事会（校長会）でも組織することになり、校長がすすめて学校ごとに会員をまとめることにした。奈井江では、私が社会科といった具合で全教員が会員となり、たしか会員200円はさしつめPTAから出してもらうことにした。

その後北空知の理事会、道の理事会等で各校の会員状況が明らかとなつたが、地区や学校で多少の差があつたが、相当な数にのぼり、大体設立のメドがついた。

ところが、この組織化に対して組合が猛烈に反対し、不参加の指令を出したのである。理由は、「国や道からの補助金を受ける官制研究会、権力の末端である校長主導の校長教研は、研究の自由がなく、組合教研に対抗するものである」というのが理由のようであった。

これは全くの誤解であったが、このためか各校の会員に多少の脱落者が出了。しかし反面かえって組織を盛り上げる熱意が高まり、昭和39年2月1日に札幌旭丘高校で森戸辰男先生を講師として、第1回の研究大会を開くに至つたのである。この大会に私も参加して、少数精銳の参加者の熱意とこの大会を成功させようとした旭丘高校の努力に深い感銘を覚えたことを忘れることができない。

2

私が昭和43年に市教委から札幌開成の校長に出るとき、高教研会長の長瀬校長から、「開成に行ったら、坂井校長の後を受けて社会科の部長をやってほしい」と言われた。私は社会科だし、別に断るわけには行かないが、何にしても社会科の部会できまり、高教研の役員会で会長から委嘱されるのであるが、まとまりの難しい社会科の部長は重荷であった。

いよいよ部長を引き受けると、この年から部会の事務担当者をきめることになったので、地理の前田先生と日本史の川島先生にお願いすることにした。

お二人は非常によいコンビで、緻密かつ精力的に動いて下さった。1月の全道大会には、部会と講師、助言者、司会者、提案者、記録者等全道からお願いしなければならないし、各校との連絡も考えなければならない。

ところが他教科と違って社会科は全道的な高校のまとめはほとんどなく、どこのだれにお願いするか皆目見当がつかない状態であった。

そこで私は、社会科といつても高校は、地理や日本史などと各科目に分かれているので、各科目ごとに部会を設けることにし、各科目ごとに札幌の先生方を中心として2、3名の運営委員をお願いした。この先生方の手で、講師や司会者をきめていただくことにした。このために数次の運営委員会をあの狭い市民会館食堂の片隅で開いたが、運営委員の先生方は授業の合間にねって集つて熱心に協議して下さった。

私はその司会をしたり、本部や学校から経費を持ち出すことに努めた。この結果は、川島先生のきれいなガリ版で各校に「社会部会報」として送られたのである。

このような準備で44年1月には札幌開成で社会科部会を持つことができたが、各部会とも教室に溢れる参加者があり、活潑な研究協議が行われたので、私は各科目ごとの部会は成功だったと思った。

昭和44年は、東大の安田講堂封鎖で象徴される大学紛争の年で、これが本道の大学および高校にも波及した年である。札幌の各校ではこれが対策と指導に苦慮し、校長会や生徒指導部会がしばしば持たれた。札幌では第2学期はじめの文化祭に始まり、45年の卒業式に半ばし、45年6月の南高校紛争で頂点に達した。

この間にあって、「高校教育と学習指導の近代化一後にはこれを現代化としたが」をめざす高教研は、この紛争解決のためにも、「授業を通しての人間的な触れ合い」を力強く押し出し、現場に地味に定着して行ったことは高く評価されるものであった。

昭和45年の社会科部会は、札幌の中島中学校をお借りして開催した。これは開成高校が遠くて不便、かつ寒いとの理由もあった。このときの社会科の運営は、すでに前年にレールが引かれていたので円滑に行われた。しかし会場が他校で、かつ中学校であったため別な困難が生じ、会場問題は頭の痛い問題となった。

この時の社会科部会の収穫は、年1回の大会では不足であり、夏休に今一度部会を持ちたいとの希望が地方会員から熱心にのべられ、その結果、昭和45年8月に高校世界史研究会が発足し、昭和47年に地理研究会がスタートしたことである。すでに高校の倫社研があるが、これらの研究会は、「授業や教材研究を中心とする実践研究の交流」をめざすもので、従来未組織であった高校社会科が次第に組織化されて来たことは注目すべきである。

### 3

昭和45年に札幌旭丘高校長を命ぜられた私は、必然的に高教研会長を仰せつけられることになった。

「必然的」というのは、旭丘高校長即高教研会長となっているのだそうで、しかも前任の長瀬校長の会長任期がまだ1年残っていたからである。

赴任すると最初に大塚教頭（高教研事務局長）はじめ本部事務局の先生方から、「高教研の脱旭丘」が持ち出された。理由は「もう基礎ができ、ルールが確立したから他校でもできる」、「独占が長い」、「疲れた」などいろいろであったが、この辺で「高教研も会長校を変えて、イメージチエンジを計るべきである」につきる。

私も尤もであると考えた。そこでこれを春の役員会に持ち出したら、その時の高校長協会の村上会長が、「旭丘汝もか」という悲愴な顔で、「旭丘をのぞいて、他のどこの学校が引き受けるか」とつめよった。そこで私は逃れる手として、高教研の会長選任の年が、校長会の他の会長選任の時期と1年ズレているので、これを同じにし、広い立場から適切な会長を選ぶ必要があるとし、規約改正をすることにした。

そこで46年は任期1年、47年から任期2年として他と合わせることにした。しかしこのようにしても旭丘から高教研会長を離すことができず、今日に至り、かくて10周年記念行事と記念大会を行なう破目となつたのである。

会長をお引き受けしたとき、私は次のように考えた。高教研の量的質的な拡充発展こそ私の任務である。量的な発展とは、会員数の増大であり、本部、地区支部および各教科部会の組織強化である。

質的な発展とは、研究内容と指導方法の深化拡充である。これをあくまでも「高校教師の研究会」とし、「教える教師」、「学ぶ生徒」そして媒体としての「教材」の研究を通して、現場の個々の学校、個々の教師の実践に還元させなければならない。

かくして昭和46年の第8回大会第1日は、札幌市民会館で開いたが、3,000名近い参加者に対しては会場は狭く、テレビをもってしても不充分かつ不評判であった。

この時の講師は中国問題の権威者東大の衛藤藩吉教授および朝日の論説委員岸田純之助氏であったが、とくに衛藤教授の明解かつ緻密な中国問題の解説は、わが国の今後が中国問題を避けて通ることができないだけ、大きな感銘を与えた。

この研究会のとき組合の役員が来られ、講師や運営について聞きたい、というので説明し、「あなた方も高教研の実際を見てほしい、何なら来賓として招待したい」と言ったら、「聞いておきます」と言って

帰った。そしてこの回から組合が会場の玄関前でビラなどの配布や不参加の呼びかけをしなかったのは特筆すべきことである。

昭和47年の第9回大会は、札幌冬期オリンピック大会の直前でもあり、記念として作られた札幌厚生年金会館で行なったが、会員が3,000名をこえ、さしも豪華な年金会館もすし詰めの状態であった。

この時の講師は、東大紛争で勇名？をはせた東大文学部長の林健太郎教授と、教育工学による教育革新のチャンピオン矢口新先生であった。

この時は、組合は「積極的に参加して内容的に批判したい」というので、「それは結構である。何物にもとらわれない自由な研究の場としての高教研は、参加者自身が一番よく知っているはず」といって、極めて気持よく折衝を終えた。

#### 4

加藤桃邨の句に、「静かなる力満ち行きばった飛ぶ」がある。遠山の日をめざし、静かなる力と日常実践に培つて来た高教研は、次の10年に何をなすべきであり、どう飛躍すべきであろうか。

このためには、まず高教研は、「何ができる、何ができるないか」を踏まえて、「何をなすべきか」を改めて問い合わせることである。われわれが自らの未来に挑戦する「第3の教育改革」の中で高等学校教育はいかに位置づけられるか、巨視的な考察とともに微視的には、変動進展の社会における教育内容の量的および質的な拡充の必要と、進学率の急激な上昇による「中等教育をすべてに」の要請が強まって来ている。この二つの課題に応えるために、一つは生徒の能力、適性、進路などに応える教育課程の多様化と、二つは生徒の個性に応じた指導法の抜本的な改善に取り組まずしては高校教育の振興は考えられないと思うのである。

このことを前提として、次の10年の飛躍のためには、10年の成果を踏まえて力強い助走と確実な踏切りが必要である。このためには次の課題を解決することによって達成されると思うのである。

その一つは、本会設立の目的である「各教科の立場から、本道の高校教育を前進させること」であり、このためには「あらゆる角度からの研究や発言が自由になされる」ことを堅持すべきことである。これはあくまで日常生徒の指導に当つている現場教師の

立場であり、教科の内容や指導法研究の実践的立場であり、さらには自由かつ弾力的な研究の立場である。

その二つは、本道高校の前進という立場からは、教科以外の分野、たとえばホームルーム・クラブ活動、生徒会活動の指導やカウンセリングなどの生徒指導など、研究分野の拡充ということも課題である。

その三つは、本研究会の基盤である各教科および各地区支部の活動をいかに助長するかである。年1回の研究大会、年1回の研究紀要および単年度の研究調査だけでは、マンネリであり不充分であるとの批判は次第に高まって来ている。

その四つは、このためにも財源の確保と組織強化の課題である。安定した経費と適切な研究組織が各教科、各地区支部で確立されなければならない。各部長、各地区支部長および事務担当者に人を得なければならないことは言うまでもない。このためには、何としても「われわれみんなの高教研」という意識が現場に定着してなければならない。組織強化の点で、本部事務局の強化と、これと各部、各地区支部との連携強化の方策も考究すべきであり、さらにまた役員会についても各部、各地区支部の総意が反映される方図が確立されなければならない。

その五つは、道内小、中学校の研究団体や全国の高等学校教育研究団体との連携の問題である。本道には全体としての小学校、中学校の教育研究団体はない。従つて教科ごとに必要に応じて連携していく必要がある。すでに教学や英語などはあるが…このことは全国についても同じく言えることである。ここで戒めなければならないことは、あくまでも本研究会の主体性を確保するのでなければ、いたづらに他にふり廻される結果となることである。

そして最後に、高教研は教育行政にいかにかかわり、いかに貢献するかである。「教科の枠の中で、瑣末な技術主義に堕している」とは厳しい批判である。しかし高教研の研究成果が文部省の指導要領改正の資料となることも可能であり、校長会の調査研究部や教育研究所の資料となり、道教委の現場指導や教育課程改善の資料ともなり得るのである。要は一片の研究や発表に終らせぬことを、会員各位の努力によって確保することである。

# 高教研の歴史と運営

## ○昭和38年度会員数（1985）

38・5・25 北海道高等学校教育研究会設立総会札幌南高校に全道各地より多数の参加者を得て研究会の誕生をみた。

会長に樋浦善次（札幌旭丘）、副会長に村上正雄（旭川北）、川井信男（札幌工業）の各先生が選ばれ、役員として監事・教科部会長・地区支部長等が選出された。

会則および事業として研究大会の開催。研究紀要の発行が決定し実質的な活動に入る。事務局を会長所在校の札幌旭丘高校におき事務局長の成田勇造先生を中心に市内各校より事務局員が参加し運営に当る。

## 39・2・1 第1回北海道高等学校教育研究大会参加人員（335）

札幌旭丘高校を会場として開催されたか事務局としてはどの程度の会員の参加を得られるか不安のまま当日の朝を待ったが、全体会場にはっていた講堂に定刻前より続々参加者が詰めかけ予備の椅子も全部使用し満員となり、いろいろ意見がわかれ、会の成立が注目されていただけに無事開会に漕ぎつけ、関係者一同前途に確信を深めた。

### ＜全体講演、「高校教育の問題点」

講師 中央教育審議会会长 森戸辰男

約2時間にわたり、終戦後文部大臣として、又広島大学学長として経験された事柄を話題にのせて現今の高等学校教育の諸問題について、特に戦前との対比に於いて、制度面と実践面の特徴を説明しながら新しい人間の育成の視点を明らかにした。

戦後の教育の視点が制度的にも、精神的にも全く優れた点をもちながら必ずしも成果が上っていないことを指摘し、青少年の非行、身体的発達と精神的発達のアンバランスをきたした原因とみなされる戦後教育の精神的空白、財政的基盤の弱さ、教育界に社会の様々な政治的介入をまねいて、教育の政治的中立性が脅かされている点を警告し、人間形成の中で最も重要な高校の新しい人間教育に真剣に取り組むべき、と説く。特に高校教育にたずさわる高校教師としては生徒の進路や特性を生かし得るような多様性に応ずる教育を教科の指導に於いても、その他の教育活動に於いても研究されなければならない。

講演の内容は高校教育全般の教育の精神にわたり教科のわくを越え深い感銘を与えた。

### ＜各部会研究協議

午後は新しく発足した部会の今後の運営方針を各部会

毎に協議し、研究の進め方等が話し合われた。

## 39・5・30 研究紀要第1号発行

最初の計画としては、文科系、理科系の2分冊とするごとであったが、論文の募集は38年12月から始めて、予定締切日には各地より多数の研究成果が集り、160ページを超えるものとなった。

## ○昭和39年度会員数（2228）

## 40・1・12 第2回研究大会参加人員（725）

### 第1日目全体集会（札幌静修高校）

数回の役員会で昨年同様札幌旭丘高校で開催の準備をすすめて大会参加申込みを受けていたところ、12月に入ってから参加者が急激に増加し、旭丘高校の講堂では第1日目全体集会の参加者を収容できないことがわかり、年末の12月29日になって会場を札幌静修高校に移すことになった。これによって会場変更の通知をするという年の暮になつて事務局は嬉しい悲鳴をあげながら大会開催の準備に追われた。

第2回研究大会よりは2日間にわたり第1日目は全体集会、第2日目は教科別集会とした。

### ＜全体講演「日本教育の課題」

講師 東京学芸大学学長 高坂正顕

カント哲学の研究者として高名な先生は、教育の哲学的原理の追求から「人間は教育される動物であり、教育されなければならぬ動物である」というカントの言葉を引用されながら、教育の作用として、世代間の文化を伝達する過去とのかかわり合いと、教育の機能として時代と社会の要求に適合させてゆく現代との関係と、創造的な人間の育成。即ち理想を考え、理想を実現してゆく人間の育成という未来へのかかわり合いとの三つの要素を現代日本教育の課題の中にどのように投影してゆくかを問題にする。世界的に共通した「すべての青年に中等教育を！」という要請に応ずると共に、「質のよい教育を！」という二つの面から中等教育の在り方を考え、それを高めてゆく副広い教育の視野を熱をこめて論じられた。

## 40・1・13 第2日目 教科別集会（札幌旭丘高校）

札幌旭丘高校の各教科の公開授業をもって始まり、各教科部会毎に予定された研究発表者を中心に、熱心な研究討議が行なわれる。社会と理科については科目的関係上、小分科会をもつ。尚、国語部会では模範授業者と

して関良一先生（立教大学教授）を迎へ、芸術部会では、藤野武先生（北海道学芸大学教授）による「芸術教科と人間形成」についての講演を拝聴する。

#### 40・3・31 研究紀要第2号発行

道内の会員、および関係団体のみならず道外の主要図書館にも配布する。

掲載論文23篇、195頁

#### ○昭和40年度会員数（2710）

第1回役員会に於いて役員の改選が行なわれ、会長に梶浦善次（札旭丘）、副会長に村上正雄（札月寒）、大滝与三郎（小清水）、川井信男（札工）、の各氏、監事として安達春二（深川東）、北條忠（和寒）、山崎英哉（由仁）、の各氏がそれぞれ選ばれた。事務局長として成田勇造（札旭丘）氏が從来通り事務局の総括をすることに決る。

#### 41・1・10 第3回研究大会参加人員（1,200名）

##### 第1日目全体集会（札幌静修高校）

札幌地方には年が明けて二度も豪雪に襲われ、全道各地の交通がとだえがちになるのが多いので大会当日の集ま具合が懸念されたが、この日を期待して集った参加者でさすが広い静修高校の体育館もうめつくし補助椅子も全部利用されることになった。ただ当初予定されていた全體講師の国立教育研究所長平塚益徳先生は緊急の所用で来札できなくなり高校教育再編成の気運が高まりつつある昨今その中心的存在である方のご意見を拝聴する機会を失ったことは誠に残念であるが、大会2日前梶浦会長が上京し講師の交渉に当り幸い平塚先生のご推薦でお出での沢田慶輔先生の、さすが静かな調子であるが力のこもった講演に参加者一同心を打たれた。

##### 〈全体講演「考える力をもった人間を育てる教育」

講師 東京大学教授 沢田慶輔

高等学校の教育課程の80パーセント程度を消化出来る生徒が全体の30パーセントにすぎないという具体的な統計を示しながら、現今の高校教育に考える力を育てる教育が充分行なわれていない為に重要な問題が生じつつある。数多くの断片的な知識を羅列的に与えるのではなく、「基本的な事項」を精選してそれらを全体の中で構造化することが大切である。この構造化の中心になるものは基本的事項の中で最も典型的なものを摘出し、それに関する基本概念を正確に理解させ、それら基本的事項の相互関係を主体的に発見的に学習させる方向を各教科毎に行なわなければならない。このような学習指導の場から更に生活指導の場へと進めて、年々学力差が著しくなり非行化する生徒が増加する傾向は、教育課程の編成の有り方にも問題がある。

高校教育に適応出来ない為に種々の問題が生じているという現実から高校教育課程の再編成を考えなければな

らない。つまり生徒の教育課程からの脱落が学校教育からの脱落にならぬよう編成上防がなければならない。

この立場から能力別指導とか、能力別編成とかが単に「差別につながる教育」とする考え方から斥けられるものではなく、抽象的思考力に弱い生徒は、指導内容や指導方法（例えば視聴覚教具の利用など）を変えることによって市民として必要な出来るだけ高い知識を理解させるようにしなければならない。

高校教育が次第にテクニシャンになる教育とクラフマンになる教育に分れる傾向に対して、この方面からのとらえ方が望まれる。テクニシャンとクラフマンに対して伝統的に価値の貴賤や上下という考え方があるが、これは社会的には正しなければならないことである。

高校教育の再編成を、現在高校生が置かれている現実から出発して、より良い方向に進めてゆく最善の努力をまず教育の現場からしてゆかなければならぬ。

#### 41・1・11 第2日目教科別集会（札幌旭丘高校）

次第に教科部会も充実して、第3回目より社会部会は、歴史、倫理、地理の小分科会をもち、理科部会では、物理、化学、生物、地学の小分科会を設けることになり、それぞれ共通のテーマをもちらながら、専門に分れて討議をすすめるようになった。各部会は、中央又は地方より講師を迎えて部会のテーマに応する講演も日程の中に含めるようになった。

国語部会では、東京教育大学の馬淵和夫、数学部会では模範授業を兼ねて慶應大学の田島一郎、農業部会では北大の布施鉄治、家庭部会では藤女子大の鈴木ヨシの各氏、更に英語部会では外国人講師として北大の Aallan George Barr 氏などそれぞれの権威者を招いて一層充実した部会討議が行なわれた。

研究発表も次第に内容も充実して発表件数も増してきた。

#### 41・3・31 研究紀要第3号発行

高教研の生みの親であり、北海道高校教育の中心的存在でもある梶浦会長は研究紀要第3号の巻頭言に次のように記してある。

「世界的教育競争、教育爆發の時代にあって、教育の実践家も理論家も、さらに専門領域内の学者も専門外の学者も共に意見を出しあって教育の実践に大きな幅と深みを加えることになろう…。年毎に本会の趣旨も理解され会員の数も増加し、年間の行事も手堅く実施されるようになり基礎が固ったというのはわたしだけの感じではないと思う。本会が今後さらに構想を新たにし發展をどげられ、充実した研究成果が得られるよう念ずるものである…」と。

この冒葉を残して学者としての学芸大学教授から、旭丘高校の校長になられ高教研の会長としても多忙なところ英語部会長としても数多くの業績を残されて公的な立場を去られたことは、設立当時の心労やご指導を直接知

っているものにとって、心さびしい限りである。

## ○昭和41年度会員数（3343）

### 41・6・14 第1回役員会

梶浦会長が定年退職され、北星大学教授に就任されて会長の席を退いたが引続いて当研究会の顧問として会のご指導を願うことを役員全員一致で決定する。

新会長には長瀬米蔵先生（旭丘高校）が選出され当研究会は創立期より発展期に入る。

### 42・1・10 第4回研究大会参加人員（1656）

#### 第1日目全体集会（札幌静修高校）

大会数日前からの記録的な豪雪の為、昨年同様講師の先生方の飛行機の便のことで無事開会時間まで到着するかどうか心配したが、当日朝にはからりと晴れ上り、参加者は続々会場につめかけ椅子が不足して汗を流して旭丘高校より運ぶという盛況ぶりとなつた。

昨年予定していた講師平塚益徳先生の世界各国の教育制度、思潮の比較研究を基礎にしての後期中等教育再編成の諸問題について、かなりつっこんだ講演がなされた。

又第4回大会より全体講演として自然科学系講師と人文科学系講師のお2人を迎えてお話しをお聴きすることになって、午後の部として札幌医科大学の中川秀三先生に、大脳生理学の立場から教育の問題についてお話を戴くことになる。

#### 〈全体講演午前の部〉

##### 後期中等教育の諸問題について

###### ——世界の教育情勢の中の日本の教育の現勢と今後の方向——

講師 国立教育研究所長 平塚益徳

日本の戦後民主主義の最大の欠陥として「自主性」に欠ける点である。自分の足りなさに対する謙虚な反省と、デュイのいう「開かれた心」、すなわち自分の足りなさを他に示し、他からの批判を求める心、とこの2つに裏づけられた自己主張が日本の民主主義に特に欠けている。

現在世界各国に於いて歴史にかけてみない程教育に熱意を示している理由として生活水準の向上、保健、食糧等諸条件によって人口が増加し、より優れた国家社会を形成する為にも初等中等教育の普及充実が叫ばれるようになった。普通一般教育におけるアメリカの「人種差別の撤廃」イギリスの「中・高等教育の再編成」フランスの「個々人を大切にする教育」等をその1例として上げる。

日本の教育で問題になることは、知的能力を優先させ、身体的能力を価値的に低いものとされているが平等な扱い方をしなければならない。又自己に最も適した職業に打ち込むことが正しく自己を生かす道であるとする西欧的な意味での召命觀が欠除していること、又、学校教育

以外の教育例えは社会教育が正当な評価を得て制度的に充実しておらず定着していないことが上げられる。又日本に於けるナショナリズムについての偏見について、從来日本では利己的ナショナリズムの危険性にのみ焦点を合せて問題を論じられているが、「自分の国を大切にする教育」は他国を大切にする教育でもあるとする考えが世界各国の教育の大きな流れとなっている。

つまりナショナリズムの教育がインターナショナリズムの教育につながることを考え合せなければならない。

日本には歴史的にみて「教育尊重の精神」が育てられている世界に稀にみる国である。この先人の大きい遺産をもってして明治以後の学校教育のみ教育であるとする誤りを正し、人間教育の正しい観点に立って世界に発言出来るものとならなければならぬ。

#### 〈全体講演午後の部〉

##### 大脳生理学と精神衛生について

講師 札幌医科大学教授 中川秀三

スライドによって神経系統、大脳の構造、精神医学等について専門的なことを平易に説明しながら、能率的で効果的な勉強の仕方について、医学的見地から次のような興味ある例を示される。即ち3才頃までの乳児期が脳の発達に重要な意味をもち、その後脳は苦心して使用されることによって、新しい回路が形成され、その事によって連想の網が広げられる。大脳は使用される部位が特に発達し、それを中心に脳全体の開発がすすめられる。又睡眠はエネルギーが合成され、蓄えられるという点で脳にとって特に重要であり眠ることも学習の一つであることを忘れてはならない。

又脳は身体の全エネルギー中の非常に多く消費する機関でもあるので栄養、特にビタミンの供給、（果物、野菜）に留意する必要がある。

脳は精神の緊張と弛緩が交互に使いわけるとすぐれた発達を期待することが出来るだけに医学的にも重要である。

### 42・1・11 研究大会2日目教科別集会（札幌旭丘・札幌南・函館水産）

発足以来教科別集会の会場を札幌旭丘高校で実施してきたが、比較的会員数の多い部会の会場を旭丘高校のみで確保することは次第に困難になってきた。旭丘高校では80名以上の部会会員が一同に集まる場所は無理をしても三ヶ所位よりない。しかし、会場の急速な変更は不可能な為多くの不便を忍んでもらいながら運営せざるを得なかつた。

各部会の運営については部会運営の計画の段階でかなり充実した内容をもり込んでいた為、教科部会の研究討議内容にも多くの期待がかけられるようになつた。殆どの部会では中央、および地方より権威者を競って招いて一流の講演を準備した。

国語部会では、東京大学助教授築島裕、「古典教材の

取扱いについて」社会部会（倫政・政経）、東京都立小石川高校教諭、蜂須賀孝「倫政と政経との関連について」（歴史）「日本近代史研究会」川村善二郎「日本近代史上の諸問題」（地理）横浜国立大学教授野村正七、「地図教育の問題点」、数学部会では東京都立大学教授、穂刈四三二「ベクトルの実態とその応用について」理科部会、上智大学教授、金原寿郎「今後の高校物理教育について」、北海道大学教授、村山大記「植物ウイルスについて」芸術部会、北海道教育大学助教授、鬼丸吉弘「美学について」英語部会、北海道インターナショナルスクール校長、アーレッタ・セルザー「An Apple for the Teacher」、家庭部会日本文化パターンズKK、田口充子の「講習」農業部会、北海道農務部、藤村利夫「北海道の土壤について」工業部会、生産本部プログラム教育研究所長、矢口新、「教育の体質改善とプログラム学習」商業部会、小樽商科大学教授、岡本利一「流通組織の変化と商業の経営」、水産部会、北海道大学西山作蔵の講演の数々に、質的に一層の深まりを示した。

研究発表についても第4回大会より資料の中に研究発表の要旨を印刷することになり、資料と共に研究内容をはっきり残すことが出来るようになった。

家庭部会は札幌南高校、水産部会は函館水産高校にと、旭丘高校以外にも会場を1部移したが、旭丘高校内で多くの分科会の会場をもつのは限界に来ている。事務局としては明年度よりの教科別集会の会場については改めて考え直す必要があると反省をもちながら大会は終った。

#### 42・3・15 研究紀要第4号発行

昭和41年度の事業は研究紀要第4号の発行と共に主な事業は終了したが発足以来樅浦会長を補佐し、高教研の運営面に多くの手腕を振られ、実質的に基礎作りの蔭の力となった事務局長成田勇造先生が道内稚内高校長として転出されることになった。この間会長交替もあって会の運営にスムーズな引継ぎが行なわれたのは成田事務局長の功績であることは広く知られている。

#### ○昭和42年度会員数（4426）

42・5・19 第1回役員会に於いて役員改選期を迎える再び長瀬米蔵氏（札幌旭丘）が選ばれ成田事務局長の後任として大塚正次氏（札幌旭丘）が任についた。

創立5年目を迎え、ようやく研究会の意義が理解され、研究成果が注目され始めて、会員数も飛躍的に増大すると、組織の改革をすすめて地区支部と教科部会の連絡を密にする必要に迫られ、事務局の機構に改正すべき点があることが課題となつたが、根本的解決策は次年度を待たなければならなかった。

会員の増加にそなえて全体集会と教科別集会の会場の確保等について年度当所よりそれぞれ検討し市民会館、

市内の高校等も予約すべきところは予約するという手配を済ませた。

尚役員会で決定をみた特記すべきこととして前年度までの事業の3つの柱であった、研究大会の開催、研究紀要の発行、会報の発刊に加えて研究調査が加えられ、主要な事業は4つとなった。研究調査は会報その他で公募されたが、調査費の補助金はまだ予算の関係上支給されず、必要な援助を与えるという程度に留っていた。

研究会をスムーズに運営する為年間3回開かれていた役員会の外に新たに事務担当者会議を3回開いて、連絡を密にして完全を期した。

#### 43・1・9 第5回研究大会参加者（2323）

##### 第1日目全体集会、札幌市民会館

静修高校より市民会館へ会場を移して参加者の相当の増加を見込んでも余裕のある運営が出来ると思っていた事務局は、12月中旬以降の参加申込みの数が市民会館の大ホールの収容定員を超えてしまったので全道から集る参加者が講師の講演を聴けずに帰ることになってはと、至急市民会館ロビー、会議室等に予備会場を設営し、テレビを設置するという大作業に取りかからなければならなかつた。予備椅子を旭丘高校から運ぶという作業も予算がない為におりからの吹雪の中をトラックの積みおろしから椅子の並べかえに至るまで事務局員や市内の先生方の無償の労力に頼らなければならなかつた。

しかし悪天候の中を続々集る参加者でぎっしりつまつた会場の中は教育に対する熱意で興奮しきっていた。

##### 〈全体講演午前の部〉

###### 「後期中等教育の基本問題」

講師 東京大学教授 細谷俊夫

中教審の後期中等教育の答申に対する批判を中心にして、講演が進められたので今回の講演によって昨年度の平塚先生の講演が答申にそった講演であったので、その長所と同時に将来修正されるべき短所を知り得たことになる。

後期中等教育の答申の中心は高校教育の多様化につながるが、各種の各科の新設の方向をおし進めるよりはむしろ、既存の学科の再検討、統廃合を行い、必要なものだけを残す方向こそ改善の主旨に合うものである。

今日の技術革新の進行の中では、もはや完成教育ということではなく、そこに従事する者には何等かの教育のしなおしが必要とされている。このような状態の中ではむしろ専門化の方向ではなく、基礎的な教科をしっかりとおさえることによって新しい事態をのりこえてゆける潜在的能力（柔軟な頭、柔軟な技術）を身につけさせることが大切である。それは言いかえれば①主体的な人間の知性を高める。②生産的な思考能力を高める。③アイデアに対する鋭い感覚を養う。④1つのことをなし遂げたという満足感、充実感を与えるという点を重視する教育をこそ大切である。

## 〈全体講演午後の部〉

### 「進路指導について」

日本大学教授 伊藤祐時

進路指導そのものについては矛盾を含んでいるが、心理的立場から人間を育てる教育という見地に立って進路指導を考えたい。

人間の心は生後形成され、外界のものを受け入れる力があり、それを貯え、貯えたものを活用できるのであり、人間に心的エネルギーが豊かにあり、そのエネルギーを外部の様々なものを獲得する方向に向けると同時に、獲得したものを適当に加工し更に有利なものにすることができる能力をもっている。

人は刺戟と反応の間で状況によって、一旦反応を停止させることができ、人間だけが時の流れを知覚して自らの過去を知り現実を理解し将来を思念することが出来る。つまり人は知覚し、反応し、考える動物である。この人間としての特質を育てることが、学校教育の狙いでもあり、それを生かしてこそ進路指導の意義が生れてくる。

## 43・1・10 第2日目 教科別集会

教科別集会は昨年で予言されたように旭丘高校のみでは消化し切れなくなり旭丘会場（国語、保体、農業）開成会場（社会）、札幌西会場（英語、芸術）、札幌南会場（理科、家庭）、札幌北会場（数学）、札幌琴似工芸会場（工業）、啓北商会場（商業）、小樽水産会場（水産）の8会場になった。

研究発表者の数も質も一段と増し研究内容の活潑な討議がくりひろげられた。各部会の講師も講演のみならず、研究発表の討議に加わりその中で助言するようになる。

国語部会 東京都立大学教授 村松数弥「古典における漢文教育の取扱いについて」社会部会（倫社、政経）帯広畜産大学教授 大畠莊一（歴史）北海道大学教授 大隅和雄「近代史学の成立」北海道大学助教授 遷塚忠躬「フランス革命についての研究史」（地理）群馬大学教授 有末武夫「日本の交通問題」数学部会 東京教育大学教授 小西勇雄「論証指導について」理科部会 東京大学教授 蓮沼宏「最近の精密測定の話」北海道大学教授 下村得治「代謝と酵素」保体部会 東京教育大学助教授 宇土正彦「高校体育とクラブ活動」芸術部会 北海道教育大学 国松登「芸術科のもつ社会性について」英語部会 東京教育大学教授 桜庭信之「小説の領域—絵画と文学—」家庭部会 味の素KK 氏家勇次郎「新科学調味料について」農業部会 北海道農業専門委員 安部正毅「本道農業の近代化の展望」農業学園指導部 太田米造「農村教育の在り方と卒業後の指導」工業部会 京都大学工業教員養成所 西之園晴夫「工業教育教材のプログラミングについて」商業部会 小樽商科大学「電子計算機の将来と経営組織」水産部会 文部省調査官 高木敬一「水産教育が当面する諸問題」

## 43・3・20 研究紀要第5号発行

掲載論文31編

### ○昭和43年度会員数（5090）

会の急速な発展に事務局はかなりの戸惑いを感じながら機構の改革を急ぎ、地区支部、教科部会の部長の外、事務担当者を正式に位置づけ本部の運営に参加してもらうことになる。一方本部事務局も局長の外に局次長2名、監事3名、庶務、研究、会計担当をおき分担をはっきりさせ、従来までやや繁雑だった会員加入手続、処理を合理化し能率を高めた。

しかしフランス、ソルボンヌ大学に端を発した大学紛争は西独や日本にも社会の根底をゆり動かすかのような恐威を与え、東京大学をはじめ全国で学園紛争が一層激しさを増し、高校にも様々な波紋を投げかけ、多忙を極める生徒指導の中で高教研の運営を進めなければならなかった。

## 44・1・9 第6回研究大会 参加人員（2352）

### 第1日目全体集会 札幌市民会館

国際的にも国内的にも波乱の多い事件が次々と起り教育に於いても根底から問い合わせられる問題が次々に起った。

国際的な視野の広さの点で有名な高坂正堯先生の鋭い分析を通じて教育の新しい転換点を求めて参加者の眼は真剣そのものであった。折しも開道百年を迎えて時機を得た大飼哲夫先生のお話に期待するところ多かった。

勿論教科別集会についても過去の研究大会の成果を次第に正しく理解されるようになり、教科研究について魅力がもたれるようになった。

## 〈全体講演午前の部〉

### 「転換期における日本の諸問題」

講師 京都大学助教授 高坂正堯

1968年という年は今までの世界の秩序を形造っていたものが崩壊し新しいアプローチが必要になってきた。

米国、ソビエトの影響力が低下している今日、国際社会に於ける日本の位置について考える必要がある。現在では、米、ソの軍事的な優位を念頭におきながらソ連、東欧の交友をすすめるアプローチが容易になったので、西欧へのコンプレックスを取り除いて相互依存の中で生きるという認識に立たなければならない。国内における学生騒動は、我々文明社会に危険信号がついたと考えるべきではあるが具体的な動きをみても日本社会に寄与すべき面はもっていない。

問題の焦点は、我々の社会の動きを管理する能力が増大し立派な管理体制が出来、より専門化が必要になってくるので「直接参加」はますます難しくなって来ている。

社会はますます巨大化してゆくが①政府は中央集権の習慣をやめ、分権を与え、末端にも決定権を移すこと。②日本人に著しい政府依存の態度を改めること。③複雑な相互関係の社会、高度産業社会を分析できる態度をも

たなければならない。極めて困難な転換期にさしかかっているが、唯單に政治だけでなく教育とか生き方とかいったものを全体に及ぶような変化が必要なのである。

#### 〈全体講演午後の部〉

##### 「開道百年 北海道の野獸」

講師 北海道大学名誉教授 犬飼哲夫

我々の住む北海道は島国としても広大な領域をもち、豊かな天然物をもち、世界的に魅力のあふれる土地である。知床、日高の山系は秘境性をもつてるのでこのような立派な自然物は我々の子孫の為にも大切に残してやりたい。また残すべく最大の努力をすべきものである。

開拓百年を迎えたがこの間、山野に居住していた野性的動物達もいろいろそれにつれて変化をしてきた。北海道の場合その変化を知る貴重な材料が多い。(えぞ鹿、えぞ狼、熊、などの動物とアイヌ民族、および北海道開拓との関係を興味深く説明される)。

#### 第2日目教科別集会

各教科別集会への参加者が増加すると同時に研究発表者の数ばかりでなく、各教科別集会を運営する係、役員、助言者の数を増し、部会が次第に大型化して参加者の集まりやすい大型の会場をえらんだ。国語拓銀ホール、社会札幌開成、数学北陸銀行、理科北大工学部、保育札幌旭丘、芸術住友信託、英語、農業市民会館、工業水産会館、商業道銀鳥居前支店、水産小樽水産高。

講師についても全体集会の講師と同様、いわゆる大物講師を招く部会が多くなった。大学紛争のため直前にあって講師が出席できなくなるのではないかという懸念が年末より事務局を訪れる部会役員の中であったが、最後まで対策が立たず大会の日を迎えたが、一つの部会では大学側の教官禁足命令があつて講師が出席されず、他の一つの部会では、札幌に前日においてになったが至急東京に帰らなければならぬ為、講演の内容をビデオに録画して、千歳の飛行場へお送りし、翌日参加者はV・TRで講師にお目にかかるという異例の出来事があった。しかしこのような不安な社会情勢にも拘らず各部会の参加者は例年にも増加して熱心な討議が行なわれた。

国語部会、国立国語研究所、奥水実「作文指導について」社会部会(倫社)北海道大学教授、並木正義「受験生の心理—受験生の健康相談」(政経)北海道大学教授早川泰正「日本経済の諸問題」日本史、東大史料編纂所教授、稻垣泰彦「中世の農民運動」(世界史)北大助教授、井上泰男「世界史と比較史」地理、東京教育大教授浅香幸雄「地理教育の充実と教材教具の活用」数学部会、文部省調査官、大野清四郎「数学教育の現代化と新教育課程」理科部会、北海道大学教授、岡本剛「金属表面の反応性とその制御」東京教育大学前学長、三輪知雄「これから生物教育の方向」保育部会、東京教育大、松田岩男、「学校体育における測定と科学的指導法について」芸術部会、札幌放送合唱団指揮者、平賀瑛林「芸術教育の創

造性の開発」英語部会、東京外国语大学、齊藤次郎、これらの英作文指導、家庭部会、北海道電力、橋本英寿、東芝商事、安藤利雄、北海道工業試験場、北川誠二、藤女子大、伊藤弘子、ライオン家庭科学、山下せつ子、農業部会、北海道教育委員会、芦真「西欧の農業教育」工業部会、京都市洛陽工業高校、山本績「学習のプログラム化の方法とその評価法」商業部会、小樽商大、伊藤森右衛門「経営学の新展開—意志決定とリーダーシップ」水産部会、元北海道大学教授、田村正「北海道沿岸養殖漁業と水産教育」

#### 44・3・15 研究紀要第6号発行

研究紀要の内容が充実すると同時に掲載希望が多くなり、教科部会でその銓衡に苦心して、予算の許す範囲で教科毎の割当枚数をぎりぎりまで増やすまでのものが、最終的には紀要を2分冊にして配布することになった。掲載論文34篇。

#### ○昭和44年度会員(5052)

44・5・31 役員会において研究会の運営上今年度より大会参加料(会員2,00円非会員5,00円)を徴集することになった。

大学紛争はやがて高校へと波及し全国的に紙面をにぎわと共に、北海道でも高校生の政治活動に対し特別指導措置が取られるが高校生の政治活動に対しては意見の対立が激しく起った。この中で高等学校教育の重要性が一層叫ばれ、「眞の教育とは」の間に答えられる教育の実践をこそ高めなければとお互い話し合いながら、役員事務局員研究発表者はそれぞれ教授、生徒指導、校務の異常な緊張状態の中で研究大会の準備を進めたが、長瀬会長は会報第11号のあいさつに第1に会員の一層多くの加入と研修参加を求め、第2に研究大会の内容の質的な向上、第3に研究紀要の内容充実、第4に地区支部の教育活動を促進して教科部会との連携を密にしてすぐれた運営を呼びかけているがこのような厳しい社会的課題に高校教育が充分答えられるような研究会へと発展するよう願いをこめてのことであろうと推察する。

本部事務局は組織を合理化し、事務局長、局次長、庶務、研究物、研究調査、会員会計の業務内容を明らかにし能率向上につとめた。

一方年間2回の会報の広報性を更に活用して、研究会のPRにつとめこれまでの年度の事業計画内容の外に研究テーマ、参加方法、研究会の年間予定表、地区支部、教科部会事務局一覧、本部事務局構成を明らかにして、新しく迎える会員にも理解しやすいように考えた。

#### 45・1・9 第7回大会参加人員(2551)

第1日目全体集会 札幌市民会館

大会参加申込数が昨年よりかなり増加する見込みがは

つきりすると事務局では市民会館大ホールに入場出来ない会員の為にロビー、コリドー、ギャラリー、会議室等にテレビの設置、椅子その他の会場設営作業を急がなければならなかつた。市民会館での全体集会は、もう予算面でも運営能力面でもはつきり限界にきていた。

#### 〈全体講演午前の部〉

##### 「宇宙開発と変革の時代」

科学評論家 岸本 康

次々に打上げられるアポロ宇宙船の素晴しさは、月面探査によって新しい事実が明らかになったことよりも、まず目標を立てて努力すれば、かなり不可能だと思われることでもやり遂げることが出来るという確信を国民一人一人にもたらしたということである。

技術面では1,000万点以上にもおよぶ部品の組合せの技術もさることながら、その故障がわずか数点であるという正確さであった。この計画で5万から10万点の新発明がなされ、技術社会で計りしれない進歩と意味をもたらした。アポロ計画の大きな功績はシステム工学の応用である。

これによって、技術、科学の分野のみならず我々日常生活への進歩を約束した。この科学の進歩によって、70年代は、労働を生みだすものが人間の手から機械に移り、「エンゲル係数との戦い」から「豊かさへの戦い」への移行が中心問題となる。生活信条の変革をうがし常識、習慣通念法律などの総点検が必要となる。科学技術の大きな進歩が人間、社会のさまざまな面に影響を与えて行くが、人間は科学、技術にふりまわされることなく、科学の本質を理解し人間を中心とした時代となるべきである。

#### 〈全体講演午後の部〉

##### 「教育改革と後期中等教育の諸問題」

国立教育研究所 益井重夫

各国が今日ほど教育を通じて国家の発展と個人の幸福を追求しようとしている時代は過去にはない。日本でも高校教育、後期中等教育の問題は大きな教育全体の改革の枠の中で考えなければならないが政治経済、その他文化など総合的視野から考えなければならない。

その為にはアメリカ、イギリス等の教育制度なども研究に倣するか教育改革を単に行政面、法制上の改革の次限で大方針、一大方向を打出しても細部までわたる規制は有害である。

一般国民、教師を含めての全員参加による意志決定のしくみがなければ質のよい、きめのこまかい教育はできない。又教育改革には人間教育のポイントを持たなければならぬがイギリスのジェントルマン教育の目指すものがその一つの参考になる。その中心をなすものは「リタッチメント一離脱一」ということである。つまり物に埋没しないで常に一步間合いをおいて自分を冷静に保ち諸問題を客観的にみなおすことの出来る「ゆとり」であ

る。又子供たちに大人の既成の価値観を理解させる教育よりも子供たちの価値観に理解のまなざして接してやりそれを理解して対話をはじめることから教育が始まるのである。

#### 45・1・10 第2日目教科別集会「部会・講師・演題」

国語部会、成蹊大教授、成瀬正勝「森鷗外管見」社会部会（地理）東京教育大教授、浅香幸雄「地理教育の充実と教材教具の活用」（日本史）北大助教授、永井秀夫「近世からの明治初期の領土問題」（世界史）北大助教授、岩田拓郎「ヘシオドスの生活像」（倫社）北大助教授、宇都宮芳明「現代の思想的状況」（政経）北海道新聞論説委員、菊地正世「70年代における諸問題」数学部会、立教大学助教授、村田全「集合概念はどんな意味で数学の基本であるか」理科部会、国際基督教大教授、原島鮮「」井尻正二「第4期について」保育部会、東京教育大助教授、松田岩雄「体育に於ける測定と科学的指導法について」芸術部会、詩人、更科源三「芸術教育について」英語部会、東京学大教授、江川泰一郎「学習文法の問題点とその扱い方」北大客員教授、ジョン・ランドン「これから日本に於ける高校英語指導の目標」家庭部会、北大教授、佐々木酉二「家庭生活と微生物」日本女子大、宇川和子「保育の指導について」農業部会、文部省視学官、厚沢留次郎「農業教育の諸問題」工業部会、札幌琴似工業高校長、寺岡二郎「ヨーロッパ教育界の趨勢—初中等教育を中心として—」文部省調査官、土井正志智「歴史的にみた工業教育の推移—その目標と内容について—」農業部会、小樽商大、斎藤要「最近の消費者問題」水産部会、文部省調査官、高木敬一「高等学校教育課程の改訂と水産教育」

#### 45・3・20 研究紀要第7号発行

文字通り多難な教育界の中で高教研の発展の為に心をつくして数々の改革を試みその任務を果たされた長瀬会長は定年により紀要第7号の発行をもって実質的に会長を去られることになった。

激務に追われ校務の多忙の時にしばしば気の減入る時、会長の励ましの言葉に慰められがんばり続けた事務局員も多いことと思う。研究紀要第6号の巻頭言の次の会長の言葉は極めて印象的で教育研究に対するお考えの一端をうかがうことが出来る。「… 私共高等学校の教員の任務は生徒の教育ということにあります。この教育という言葉はなかなか内容の深いことであり『人間にまで育てる』ことかと思われます。生徒の未来は自由であり、豊かです。この生徒の自由な可能性を一方的に傾向づけたり、しばったりはできないと思います。むしろ生徒の未来の可能性に信頼をおき、健全で確かな基礎的な豊かな教養を身につけさせるよう努めなければならないと考えます。人間形成への道は、口頭の方法を並べるのではなく自己のうけもつ教材の分野を通してこそ開けるものと思います……。」

## ○昭和45年度会員数（5213）

旭丘高校を停年退職し札幌女子短大の教授として迎えられた長瀬先生のあと高教研の第3代目の会長として磯貝芳司先生（札旭丘）が選ばれた。長瀬先生は引き継ぎ顧問とし会の指導をおねがいすることに役員全員一致で決定した。

磯貝会長は会報第13号のあいさつに高教研の新しい方向づけと思われる会長としての抱負を次のように述べて飛躍的に発展した本研究会の課題の解決に腕をふるわれることになる。「… 本研究会は高校教師の研究会でありまして、学者や研究者の学会とは違う独自性があると思います。

第1義的には「教授、学習」についての研究と実践が結びついた実践研究を目的とした研究の交流がなさるべきものと思います。「教える教師」と「学ぶ生徒」そして「媒体としての教材」この三者の力動的な関係をあくまで教師の主体性に立って研究し実践さるべきものと思います。この実践研究は、高校現場の実践から発して、研究会において高く昇華され、それが再び学校に還流されるべきものであります。実践研究の第1は『教材研究』でありますか情報社会に移行しつつある今日教材としての情報を受容し、専門的にそしゃくし、教育的に取捨選択する力を養わなければなりません。実践研究の第2は学習指導法の近代化でありますか生徒の能力が多様化、多分化しつつある時、教材の多様化と同時に指導法の多様化をはかる必要があります。「教えるものから学ぶ者へ」の転化をはかり、この研究を実践の立場から取り入れるべきものと思います……」

### 46・1・8 第8回研究大会参加人員（2921）

年毎に増加し限界を超えて、他の方策が立たないまま、ここ数年来事務局員にとって年末は、恒例の大会準備に忙殺された。研究紀要、大会資料等の印刷発注、関係方面への諸連絡、果てはテレビ受像機の設置、予備会場の設営の椅子運び等、肉体労働そのものの仕事が次々と処理されていったが事務局としては、明年より規模の大きい学生年金会館を利用できることを考え高教研の準備に多忙な思いをするのは今年限りであるように念じながら仕事に精を出した。

### 〈全体講演午前の部〉

#### 「日本と中国」

講師 東京大学教授 衛藤瀧吉

日本に於ける「中国の脅威」として中国が日本を直接侵略するのではないかと言われているが中国の陸海の軍事力が防御的である為当分の間考えられない。

中国からの間接侵略については、外交上で言うオープンシステムと、クローズドシステムというのがあるが、日本は外圧からの影響の受けやすいオープンシステムで

あり、両者が接触する際、オープンシステムは短期間では不利な立場になる。これが間接侵略の脅威となる。又あり得ることもある。しかし長い目でみれば、外交上はオープンシステムで鍛えられた方が国家としては有利である。他方中国にとっても日本は脅威となっているという問題もある。

過去に於ける日本軍のこわさがあって日本が軍事大国になることを非常に怖れている。又日本に於ける経済力の発展はマルクス主義流にいうと、次第に原料市場と販売市場を守るために外國に軍隊を派遣しないというのは虚となる。又日本が台湾に経済援助をしているのは中国からみれば内政干渉になる。

自衛隊の防衛費についてGDPのわずか1パーセント以下だとしても東アジアにとって北京政府の立場から見れば脅威である。

これら的情勢から中国にとって日本の脅威を取り除くために、①人物交流。②海外の経済進出に誤解を取り除く。③台湾への介入を少くする。④軍事力を加速化しない等のことが大切である。日中関係を改善することは日本の政治全体にかかる問題で小手先の処理で解決出来ない。困難を覚悟しながら少しでも取除く努力が必要である。

### 〈全体講演午後の部〉

#### 「情報化社会における教育のシステム」

講師 朝日新聞論説委員 岸田純之助

情報化社会とはポスト・インダストリアル・ソサイテイの語で使われたものだが、工業化社会の次にくる社会の意味を情報化社会と名づけたものである。

この「情報」とは「人間の知的な活動」ということ、大差ないものだが、この生産量は急速に増えて多くの人たちがこれを処理する方法を身につけることが大切である。大量の情報の生産と流通に応ぜられる頭脳集団（シンクタンク）が必要である。つまり集団で研究発明することが大切になるがその為には互に集団で問題を考察処理する能力を身につけることが大切である。

次に情報社会に於いては変化に対する柔軟な能力を身につけることが大切である。現代の技術はあらゆる可能性をもっていると考えてよい時代で、その急速な変化と同時に変化の影響も急速にあらわれる時代で、その考察と対策こそ教育の中で最も大切な姿勢である。

情報化社会は多様化の社会である人間も多様化するので教育にそれにこたえうる様一方ではマスプロによる能率的教育をし、他方では1対1の教育を考えるという、多様な方法を組合せて対処する方向を見出さなければならない。

### 46・1・9 2日目教科別集会

国語部会（拓銀ホール）東京教育大名誉教授、熊沢

龍「言語の本質から国語教育を考える」社会部会（札旭丘高）（地理）千葉大教授、清水裕八郎「70年代の文明の動向と日本列島の未来」（日本史）北大助教授、田中彰「明治維新觀研究の歴史的意義」（世界史）北海道教育大教授、松井秀一「中国古代史について」（倫社）北大助教授、宇野光雄「宗教と人生」（政経）北海道教育大、十亀昭雄「議長制民主主義の構造と変質」数学部会（北陸銀行）東京教育大教授、宇川正友「確率の基本的概念について」理科部会（卸センター）北大教授、中川鶴太郎「高分子について」北大教授、玉重三男「生体工学の話」保育部会（札旭丘高）東京教育大教授、笠井恵雄「1970年代の体育、スポーツ」芸術部会（市民会館）建築家、田上義也「創造性の開発を目指す芸術教育」英語部会（札旭丘高）道教委嘱託、ケネス・マクグロウ「日本に於ける英語教育私見」家庭部会（札西高）芝浦工業大学教授、藤井正一「これから的生活とその指導法」農業部会（道宇赤レンガ）常広泰大、田島重雄「世界史的視野よりみた農業教育の方向」工業部会（理美容センター）東京工大教授、末武国弘「教育工学の実践」商業部会、小樽商業高 水産部会（小樽水産高）前北海道中央水産試験場長、添田潤助「沿岸漁業の将来について」

#### 46・3・20 研究紀要第8号 発行

5213名会員をもつ大研究会まで発展し、研究成果と共に高校教育研究会としては全国に誇るものに成長した。事務局をまとめて会の合理化と種々の改革をすすめる中心であった大塚正次氏は札幌星園高校長に転出された。

地区支部、教科部会、本部事務局の中核である重要な事務局長として豊島一三氏（札旭丘）が任につかれた。

#### ○昭和46年度会員数（5792）

校長協会の役員の任期に合せる為再選される高教研の役員は今年度に限って1年とした。会長その他の役員として磯貝先生等が再選された。

いよいよ本会も6,000名に迫る会員をもつ大研究会とし明年10周年を迎えることになり、間近に迫った高校新教育課程への移行、さらに第3の教育改革が提唱されている今日、本研究会に寄せられる内外の期待は益々大きく、今後その内容の充実につとめ積極的な研究活動を推進することになる。

#### 47・1・7 第9回研究大会 参加人員（3326）

##### 第1日目全体集会（札幌厚生年金会館）

あと1ヶ月札幌冬期オリンピック大会を迎える日、新築されたばかりの豪華な厚生年金会館へ参加者全道から研究の成果を抱いて会場へ続々集って来た。

北日本第1を誇る大ホールも満席となり入り切れない会員がロビーにあふれる程であった。開会式の祝辭の中で岡村教育長は引退の意を表明し関係者を驚かせた。

#### 〈全体講演午前の部〉

##### 「民主主義を考える」

講師 東京大学教授 林健太郎

民主主義が現代の支配的理念であることは疑いないが戦後日本の民主主義觀には2つの欠陥がある。1つは民主主義が歴史の産物であることを忘れていることであり、他は民主主義を万能薬と考えることである。歴史の産物としての民主主義の精神は、その限られた範囲内では封建時代にもあったし、婦人参政権や普通選挙制など現在の形になるのは、日本だけでなくヨーロッパでも歴史的にはごく新しいことなのである。民主主義の失敗の例も数少くない。その没落の例を見ると民主主義の悪い面がよく現れている。多数の意志に従うというこの制度はこれをうまく運営するのは容易ではない。秀れた面と利己的な面を合せもつ人間が集って物事を決めていくのであるから、下手をすればその悪い面ばかり出てくる。

このようなことを防ぎ民主主義を有効ならしめるには、秩序の推持と議事運営などのルールに従うことである。又直接民主主義を主張する声があるがアテネに見られたようにデマゴーグ、さらにその背後に強固な組織がある時には1党独裁になって民主主義が死滅することは歴史の示すところである。

長所や短所を理解し、悪ければ最悪の制度になりかねないこの制度を最も秀れた制度へ磨き上げる為には先祖より伝わる様々な経験の積重ねを新たに考え、それを現実の場で生かしていかなければならない。

#### 〈全体講演午後の部〉

##### 「教育革新の課題」

講師 能力開発工学センター 矢口新

現在道德教育でさえ教科書で教えるという明治以来の知育偏重のため、本を読んで「わかった」という感じが生れても、それによって何かが「できる」ということはならない。「できる」為には場面場面において神経の働きかせ方、つまり主体的に人間を行動にむかわせることが教育のなすべきことである。

教育が「行動する習慣」を身につけさせなかつた事が現在の生徒に見られるように、みんなで協力していく姿勢の欠陥、生徒会の不振、言うだけで行動しない傾向等が生えている。生徒に実践させる教育を行う為に我々は個別教育によって、生徒の行動するさまざまな場を提供してやらなければならない。その際工学イデオロギーから学ぶことは教育を取巻く諸条件を整え、上限を決めて生徒に努力させることが教育者の仕事でありそれゆえにこそ教職が専門職となるゆえんである。

#### 47・1・8 教科別集会

国語部会（拓銀ホール）、二松学舎大、佐古純一郎「古典と現代」社会部会（札幌南）（地理）東京教育大教授、市川正己「世界地誌の諸問題」（日本史）北海道教育大教授、榎本守恵「大正政治史の諸問題」（倫社）東京教育

大教授、小牧治「現代思想の諸問題」(政経)道立総合  
経済研究所長、長谷部亮一「国民所得から見た日本経済」  
数学部会(北陸銀行)東京教育大教授、前原昭二「写像  
と行列について」理科部会(北大)東大教授「これから  
の高校理科教育のあり方」北大教授、東晃「氷河の氷の  
結晶に関する話」保体部会(札幌丘高)東京教育大教授、  
宇土正彦「保健体育指導上の諸問題について」芸術部会、  
(市民会館)札幌音楽院々長、荒谷正雄「芸術教育につい  
て」英語部会(札幌丘高)共立女子大教授、速川浩「高校  
における文学題材の取扱い方」家庭部会(札幌西高)埼  
玉大助教授、助父江茂登「衣生活指導について」農業部会、  
(道建設会館)ホクレン農協連合会長、吉田要治「これか  
らの北海道農業について」東大名誉教授、戸刈義次「農業  
の進歩と農業教育」工業部会(理美容センター)・システム  
研究センター理事長、片方善治「情報社会の工業教育」  
商業部会(小樽商業)水産部会(小樽水産)文部省調査  
官、間山郁三「水産教育の振興と将来の課題」

#### 47・3・10 研究紀要第9号 発行

巻頭言(磯貝会長)

高等学校教育が、技術革新による急激な社会的変動と  
急速な生徒の進学率の上昇に伴って今日大きな転回点に  
達していることはご承知の通りであります。

それは戦後教育の機会均等の促進の成果であると同時に  
その質的転換を進められていると言えましょう。高校  
段階に於いては、生徒の能力、適性、希望等が多様に分  
化し個性の花が開く時期であります。これに応じた教育  
を適切に行うことが眞の教育の機会均等であると思いま  
す。従いまして人間の発達過程のうち、高校段階では学  
科、課程を用意し、いかなる教育内容および方法をとる  
べきか、ということが深い哲学的理念と、すぐれた科学  
的方法の総合によって裏づけられねばなりません。この  
本質的な極めて困難な問題は、専門職としての高校教師  
の課せられた問題であると言えましょう。……」

#### 昭和47年度会員数 (5714) 昭和47年9月現在

役員改選により磯貝会長が再選された他、多く新し役  
員を迎える、10周年記念事業を中心とする本年度の主要事  
業が決定された。

#### 47.6.7 昭和47年度第1回役員会

##### I 経過

- 4.10 昭和46年度事業実施報告提出
- 昭和47年度事業計画書提出
- 5.13 昭和47年度役員改選依頼
- 8 昭和47年度会員加入登録依頼
- 19 本部事務局会議
- 21 第1回役員会開催案内
- 6.7 第1回役員会開催
- 7.13 会報第17号発行
- 31 10周年記念誌編集座談会

- 9.1 本部事務局会議
- 2 第2回役員・事務担当者会議開催案内
- 16 第2回役員・事務担当者会議
- 10.23 第10回記念大会要項及び関係印刷物編集発注
- 11.6 研究紀要第10号原稿締切
- 7 第10回記念大会要項、参加申込書、参加証、係  
役員委嘱状  
同派遣依頼状、講師委嘱状、同派遣依頼状等の諸  
用紙発送
- 10 第10回記念大会後援依頼(道教委、市教委、校長  
協会)発送
- 13 第10回記念大会案内(道教委だより)、公報  
に掲載依頼
- 19 第10回記念大会運営会議開催案内
- 20 10周年記念誌印刷発注
- 29 文部省監査
- 12.1 本部事務局会議
- 2 第10回記念大会運営会議

#### II 昭和47年度事業内容

##### ① 北海道高等学校教育研究会第10回記念大会

##### ○ 研究主題

高等学校教育と学習指導の現代化について

第1日目 全体集会 昭和48年1月9日(火)

場所 北海道厚生年金会館ホール

札幌市中央区北1条西12丁目

日程: 講師

- 9:00~9:40 受付
- 9:40~10:40 開会式 10周年記念式典
- 10:40~12:30 講演 演題「変りむく日本と教育」  
東南アジア研究センター所長  
講師 京都大学教授 市村真一
- 12:30~13:30 昼食・休憩
- 13:30~15:30 講演 演題「地球科学と環境問題」  
講師 中央公論審議会会長  
前埼玉大学学長和辻清夫
- 16:30~18:00 10周年記念祝賀会  
3階会議室「清流」

##### (講師紹介)

市村真一先生は昭和24年京都大学経済学部を卒業し、米  
国コロンビア大学・同マサチューセッツ工科大学院に学  
ばれた後、和歌山大学教授、米国ジョンズ・ホプキンス  
大学客員講師、大阪大学教授、米国カリフォルニア大学・  
ベンシルバニア大学各客員教授などを経て、現在京都大  
学教授、東南アジア研究センター所長をつとめておられ  
ます。  
先生は計量経済学者として著名で、学究として優れた業  
績を積まれるのみならず、我が国教育の正常化に非常な  
熱意をもって当られ、前期の中央教育審議会臨時委員と

して活躍されました。著書に、「国民所得と資源」「経済循環の構造」「世界中の日本経済」「現代をどうとらえるか」等々があります。

和達清夫先生は大正14年東大理学部物理学科を卒業、ただちに中央気象台に入り、昭和7年「深発地震の研究」で学士院恩賜賞を受賞。その後中央気象台長、気象官長官、日本学術會議議長、国立防災科学技術センター所長、埼玉大学学長を歴任。現在、中央公害審議会会長をつと

めております。又昭和16年には文化功労賞を受賞されました。

先生は地球物理学、地震学及び気象学の権威者として余りに専有名で、著書として専門書の他に「地球と人」「台風のはなし」、「青い太陽」等の啓蒙書をあらわし、サイスモロジー（地震学）をもじった西須諸次のヘンネームで、隨筆や野球評論にも達筆をふるわれております。

## ② 第2日目 教科別集会 昭和48年1月10日(水)

部会名	時限 主題								会場名
		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	
国語	現代国語の教材研究	受付	研究発表・討議 部会総会		昼食 休憩	「現代国語の教材研究」 お茶の水女子大教授 外山 滋比古			拓銀ホール
社会	社会科教育の現代化とその方向	受付	研究討議		昼食	講演 (地理)「東南アジアの地誌について」 日大教授 沢田 清 (日本史)「昭和の歴史と文学」 藤女子大教授 小笠原 克 (世界史)「19世紀ナショナリズム」 北大教授 矢田 俊隆 (倫社)「高校生の道徳育成」 札幌聖心高長 三上十喜子 (政経)「南北問題と日本の経済協力」 早大助教授 西川 潤			札幌南高等学校
数学	数学教育の現代化	受付	講演 主題と同じ 東工大教授 大槻 富之助氏		昼食 休憩	研究発表・討議 部会総会			北陸銀行
理科	これからの理科教育はどうあるべきか。 1. 新教育課程に際して実践面においてどのように展開すべきか。 2. 現代の教育の問題点をふまえて	受付	開会式 「静電気現象と災害」 東理大教授 橋高重義	休憩	物化生地合同パネルディスカッションテーマ 「高校における理科教育にのぞむもの」 副題 「理科教育と人間形成」 司会 1名 パネラー 4名	昼食 休憩	(物化生地各分科会毎) 研究協議 研究発表		北大工学部
保健体育	「保健体育指導上の諸問題とその研究」 —新学習指導要領実施に伴う諸問題を中心にして—	受付	研究発表		昼食 休憩	講演 「運動と人間」 前東京教大教授 岸野 雄三			札幌旭丘高等学校
芸術	自発的な創造性の育成を目指す芸術教育	受付	講演「芸術教育における創造性について」 作家 沢田 誠二	部会総会	昼食 休憩	分科会 研究発表と討議			市民会館 2階会議室

部会名	時限 主 題									会場名
		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00		
英語	新教育課程との関連において、授業改善を如何にすすめるか	受付	特設授業 札幌北高 北川輝彦	開会式	講演「言語・言語学・語学教育」 北大教授 福村虎治郎	昼食 休憩	研究発表 討 議	部会総会 閉会式	札幌旭丘高等学校	
家庭	「これから家庭科教育はどうあるべきか」	受付	報告会 「全国産業教育指導者養成講座」 —保育について—	講演 「人間形成の立場からみた保育」 藤幼稚園長 宇山鈴子	昼食 休憩	研究発表と 討 議			市民会館 3階会議室	
農業	新教育課程の実施に即応して農業教育の現代化をすすめるために教育の内容、方法をどのようにしたらよいかを研究討議する。	受付	講演「農業教育と現代と新しい教育課程の編成について」 文部省職業教育課 教科調査官 松下魏三	質疑 応答	昼食 休憩	研究発表討議 指導助言			札幌市民会館 第5会議室～ 第6会議室	
工業	工業高校における専門教科の教育内容の現代化（特に教育内容の精選・構造化について）	受付	開会式 講演 「工業の教科内容の精選・構造化について」 文部省調査官 関口 修		昼食 休憩	研究発表および 研究協議			北海道理美容センター	
商業	商業教育現代化のための具体的問題点について	受付	講演 「今後の商業教育のあり方」 旭川商高長 二階堂文雄氏 全体会議	部会 研究協議 (分科会 毎)	昼食 休憩	研究協議 (分科会毎)			北海学園 大學	
水産	水産教育の現代化について ① 教育課程 ② 学習指導法	受付	講演「水産教育の現代化について」 北大経済学部 教授 真野 倖	研究発表	昼食 休憩	研究発表 討 議	部会 総会	小樽水産高等学校		

### ③ 研究紀要第10号発刊

・規 格—B5版 250頁程度

・発刊予定—昭和48年3月10日(土)

・原稿締切—昭和47年11月6日(月)(厳守)

・原稿内訳

☆教科は1教科につき400字詰原稿用紙(本部規定)

70枚以内。原稿の集約、審査等は各教科部会で行なう。(申込先—各教科事務局)

☆教職一般は1編につき400字詰原稿用紙(本部規定)

30枚以内。原稿の集約、審査等は地区支部長及び本部役員で行なう。(申込先—各支部事務局)

☆研究調査は研究紀要に調査報告を掲載する。

☆紀要抜刷50部は執筆者分を本部で一括発注する。なお、50部以上希望の方は各個人においてその分を印刷業者と連絡を取って直接申し込みのこと。

☆発表者が決まり次第、本部より地区支部及び教科部会を通じて必要枚数の原稿用紙をお送りする。

#### 〈備考〉

1. 紀要是全一冊として発刊する。

2. 教職一般の原稿は、特定校に集中しないよう配慮したい。

3. 原稿締切日は厳守し、以後の分は認めないとする。

4. 原稿は必ず支部・部会を経由して本部へ提出すること。本部へ直送されることは絶対ないようにお願いする。なお、支部・部会の原稿の厳選をもお願いしたい。

5. 紀要論文募集要項は、この「会報17号」と同時に「道教委より」にも掲載するので参照されたい。

〈原稿の書き方についてのお願い〉

☆原稿用紙1枚目の1行目には『題目』を、2行目には『勤務先・執筆者氏名』を記す。

たて原稿の場合もこれに準ずる。

☆文中、ゴシックを要するところは——ゴシ（朱書）、イタリックの場合は、イタ（朱書）のように下線を引く。

☆図は、白紙又は青色紙に墨又は黒インクで鮮明に書き直接凸版にできるようにする。

☆図、写真は別紙とし、余白に番号と氏名を書く。写真版が多くなるときは予算の関係上本部編集部担当者（沢田）にご連絡下さい。

☆図、写真の入るところは原稿中にはっきり指定すること。

☆原稿は原則としてお返しません。

#### ④ 会報17号、18号の発行

・回数一年2回（7月・3月）

・内容

〈17号〉

- ・全体研究テーマ
- ・教科部会研究テーマ
- ・研究紀要要項
- ・研究調査要項
- ・研究調査要項
- ・事務局（本部、地区支部、教科部会）一覧
- ・役員名簿一覧
- ・昭和47年度事業計画、予算
- ・第10回研究大会（10周年記念大会）について

〈第18号〉

- ・第10回研究大会成果報告等

#### ⑤ 研究調査

〈昭和47年度の申込受付について〉

・申込方法

本年度の採用予定は4~5テーマで、申込は教科関係のものは各教科部会、教職関係のものは地区支部でとりまとめ、それぞれ部会長、支部長を経由して本部事務局へ9月9日(土)までに連絡する。

・研究調査の期間

研究調査の期間は1年又は2年継続で、1年で完成のものは1万円、2年継続のものは各年度5千円の調査費が支拂が配当される。

・紀要発表

研究調査の報告は研究紀要に掲載するので、内容を400字詰原稿用紙20枚程度に要約し、教科又は支部を経て、11月6日までに本部へ提出する。

〔昭和46年度完了のもの〕

① 学校経営の近代化を志向して

芦別高業高校 佐藤枝郎

② 政治・経済における課題研究学習の実践

札幌旭丘高校 鈴木健吉

#### ③ 学校実習漁場に於けるマコンブ” Laminaria Japonica Areschoug ”栽培に関する研究

恵山高校 阿部準三 小田貞雄

#### ④ 工業高校卒業者の職場生活の意識について

札幌琴似工業高校 清水茂

#### ⑤ 本校におけるスポーツテストの実態とその活用

札幌旭丘高校 桜井文雄 背原道行

竹谷紀靖 片桐令子

高橋勝昭 田中令子

#### ⑥ 10周年記念行事

イ 記念誌の発刊

〈内容〉

・発刊の辞（会長）

・祝辞（道教委、市教委、高校長協会）

・10年を顧みて（歴代会長）

・10年の歴史（沿革小史）

・全体集会（テーマ、講演その他）

教科部会のあゆみ

地区支部のあゆみ

本部事務局のあゆみ

研究紀要、研究調査、会報（10年の記録）

座談会（誕生から10周年まで：歴代会長、事務局長）

・教育年表（10年と日本、北海道の教育のあゆみ）

・現況と将来への展望

※第10回研究大会参加者全員に配布。その

ロ 功労者表彰（表彰状、記念品）

・日 時—昭和48年1月9日（第10回研究大会全体集会に於いて）

・場 所—北海道厚生年金会館

・対 象—歴代会長

ハ 祝賀会

・日 時—昭和48年1月9日 午後5時より

・場 所—北海道厚生年金会館（予定）

・参加者—歴代会長、副会長その他関係者

ニ 記念講演

第10回研究大会全体集会に行なう。

#### 高教研の歴史と運営

（文賀寺島善五郎）

## 地区支部

# 10年の歩み

### 石狩地区支部

石狩支部は本部所在の支部として、昭和38年本研究会の発足以来、会務の運営や調査研究の推進のために本部事務局と一体になって仕事を進めてきた。

別表に示すとおり、草創期の3年間は梶浦会長が支部長を兼ね、支部の事務も本部事務局員が併せて取り扱っていたのである。当時の支部会員数は全道会員数の約3分の1を占める状況であったから（別表参照）、本部の事務イコール支部の事務に近かった。

しかし、昭和41年3月梶浦会長が勇退され全道の会員数も3,000名を突破するに至って、その事務量は飛躍的に増大し、本部事務局である旭丘高校だけでは処理が困難となつたので、この年から支部長に札幌北高の直木校長を選任し、それに伴つて支部事務局も同校に置かれることになった。

爾来、昭和45年度まで上野校長、長浜校長と歴代の札幌北高校長が支部長を勤めた。

なお、支部会員数の推移を見てみると昭和44年45年の両年度が大きく後退しているが、時あたかも高校紛争の最盛期、それとこれとの因果関係があるかどうかは確かではないが興味深い数字である。

昭和47年度から、高等学校長協会の支部組織が改変になり、同時に支部の名称が札幌地区から石狩地区と変更になった。

現在、支部会員数は1,059名を数え、高等学校31校のほか、札幌盲学校ならびに真駒内養護学校の高等部および理科教育センター、道立教育研究所の職員が加入しており、全会員数に占める割合こそ20%を割ったが、依然として中核支部としての位置を保っている。

さて、当支部の過去10年間の歩みをふりかえってみると、研究活動の分野ではほとんど特筆すべきものはない。

その理由は、おそらく他の支部とも同様と思われるが、それぞれの地域に各教科毎の研究組織が長い歴史をもつて着実な実践研究を積み重ねているという事実である。これらの成果の一端は毎年の研究大会における研究発表や研究紀要の論文となって紹介されているところである。

したがつて、支部事務局としての仕事は、支部会員名簿のとりまとめとか研究調査、研究紀要論文等の取り次ぎなど極めて事務的な内容に限定されている。

本研究会も創立10周年、いよいよ新しい段階を迎えたわけであるが、この際支部活動のあり方についても検討しなければならない時に至っている。教科に関する研究はすでにある研究組織にまつとしても、教科の枠を越えて、会員相互の研修と意見の向上をはかるべき研究分野も少なくはない。広く会員の意見を徴して、本研究会設立の趣旨に添つた研究活動を推進する必要を痛感するものである。

（札北陵教頭 千葉賢一記）

（別表）歴代支部長・会員数一覧

年度	会長	支部	全会員数に対する百分比
38	梶浦 善次（旭丘）	633	31.8%
39	" ( " )	681	30.6
40	" ( " )	728	26.9
41	直木 通（札北）	864	25.8
42	上野 秋造（ " ）	973	22.0
43	" ( " )	1,046	20.6
44	" ( " )	951	18.8
45	長浜 英作（ " ）	720	13.8
46	大塚 正次（星園）	1,099	19.0
47	本間末五郎（北陵）	1,059	18.5

## 道南地区支部

道南支部は9月18日現在で会員数は548名に達し、渡島、檜山地方各高校の約半数近い教員ならびに関係指導主事が加入している。高教研発足以来10年を経過して会員数も安定し着実に増加してはいるが、過去の記録を辿ってみると遺憾ながら支部独自の事業を行なうまでの機運には達していない。しかしながら発足以来研究紀要に毎号支部会員から活潑な投稿発表があり、研究大会では各教科部会で提案報告が続けられている。

今後の見通しとして活潑な本部活動につりあう支部の活動を望む声もボツボツ出てきている。その障害になっているのは支部会員がすでに教科毎の研究会に加入しており、毎年支部活動が持たれているという時期の重なりの問題、支部運営費の範囲で独自の事業をもつことが全体集会となるとなかなか困難であるということである。

事務局が札幌から遠隔の地にある支部では本部との打合せの旅費に満たない現在の支部還元金では、事務局学校の旅費持出しによって諸連絡が行なわれているのが現状である。

各教科毎の研究会はそれぞれその成立に歴史的な由来をもつもの多く、また関係教科の教員が全員自動的に加入し、それなりに相当の実績を積みかねているものも少くない。高教研支部の会員はこれらの既設の教科研究会の会員と完全には一致してはいない。

このような事情と財政面の問題などから現在まで支部独自の事業を計画するまでに至らなかったというのか真相であろう。

しかしながら他区支部ではすでに支部として独自の研究会等を開き活動しているところもあるやに承るので、今後それらの状況を大いに参考にさせていただきたいと考えている。

当面の問題としては本部と支部との、また支部会員相互の連絡を密にして本部事業への参加を促進すると共に、会員数の尚一層の増加——できるならば全員が会員となる位——をはかり、その上で支部独自の研究会などの開催、あるいは既設教科研究会との共催などの計画を推しすすめられるようになれば幸いであると考えている。

(函館東高長 横田淳一記)

## 後志地区支部

北海道高等学校教育研究会の満10周年を迎える各支部の会員の皆様と共に本会の発展と盛会を心から喜びたいと思います。

更に此の10年間本会の育成と発展のため、御指導を頂きました関係機関に感謝を申しあげ、更に本会の運営は勿論、特に支部の運営に御指導と御激励を頂きました、歴代会長を始め、関係役員並びに事務局の皆様に心から感謝を申し上げます。

さて当支部も本会発足の昭和38年度には、小樽、後志併せて会員86名でしたが、昭和40年度には206名を数え、更に46年度には、411名と増加し、47年度には小樽支部と旧後志支部との合併により、新しく後志支部として出発を見た訳で現在のところ会員数も421名の多きを数えるに至りました。これも本会の内容の充実と、実践の成果が高く評価された結果だと思います。

又本会事業の一つである研究紀要については、一月の研究集会に毎年参加出来ない場合でも、この研究紀要を研究発表の場として、意義あるものとし活用しております。当支部も紀要1号より9号までの寄稿数28編を数えており、各支部の寄稿と相俟って巻を重ねる毎に、実践

研究の記録がそれぞれの場で生かされて居ることと思います。当支部として今後も教育の場での実践を通じて内容の充実した研究の寄稿に努力するつもりであります。

又毎年一月に行なわれる研究集会の最初の年には事務局でもある、旭丘高校を会場に350名の参加者より出発したとのことですが、其後会員数の増加と共に参加者も昭和46年度には3300名の多きを数え、会場の選定に苦慮する状態のことですが、当支部は例年会場が札幌に設定されるので、距離的に極めて恵まれた条件のもとにあり会員数の半数に近い参加を見ております。このことは、会員自らの自覚と意欲の現れに外ありません。

次に本会の運営については、年に一度の研究集会に最大の努力をし、成功させるのは勿論ですが、その中間に於ける活動即ち例えれば各支部間の交流を活潑にするとか更に工夫をする必要があるのではないかでしょうか。

又各地区支部別の諸研究活動についても、一月の研究集会に向っての一段の努力をしなければなりませんし、支部計画の研究会の持ち方についても工夫を必要と考えます。

本年度から合併（小樽・旧後志支部）し再出発をしま

した当支部は、今後どの様にして、前にも増して支部活動の運営についてスムーズにしかも内容の充実に努力して行くことが当面の課題と云えましょう。

本会の10周年に当り当支部の合併も真に意義のあるも

のに支部会員相互の理解を基盤にし一層の発展を願っております。

今後共当支部に変わぬ御指導と御協力をお願ひ致します。

(但知安教頭 岡田貞幸記)

## 南空知地区支部

本会発足当初の管内会員数は僅かに59名であった。当時、管内の中心である岩見沢には市内小・中・高校・大学を通じての組織、岩見沢市教委主催の教科研究会があり、また、本会設立趣旨の浸透が不十分なうえに、会員は教科別の個人加入であることから、教科内の他教員の思ふくなどを考える者もあって、会員勧誘の衝に主として当たられた各校の校長先生の御尽力も、なかなか実を結び難い状況であった。

しかし、現実に生徒の前に立つ現場の高校教師として、何を、いかに教えるかの実践研究と、その交流を深めたいとする人々もしだいに増し、昭和40年度は発足当初の3倍に、42年度には約6倍、350名の会員を数えるに至った。この年、本会への加入方法がすべて地区支部を通じて行なわれるようになったこともあり、支部組織を明確化するために、当時の支部長、岩見沢西高等学校長、林 信義先生のお手元で「北海道高等学校教育研究会南空知支部会規程」がまとめられ、昭和42年7月13日から施行され、発足5年目にして支部組織が確立されたのであった。その後、会員はしだいに増し、本年度は499名となり、管内公私立23校高校教員の45パーセント強が加入するに至っている。

この間、会員各位の平素の研究成果は後記するように、本会研究紀要の第1号以来、第9号まで、15編の研究論文が毎号にわたって掲載されるところとなり、かつまた、全道大会では多数の方々が研究発表者として発表され、本研究会の活動推進に貢献してこられたことは誠に喜ばしいことであり、ここに敬意と謝意を表すしたいである。

今、10年の歩みを照顧して将来を思う時、従来、札幌での全道大会への期待、依存が多過ぎて、本研究会の基盤である支部活動の活潑化をそこなう結果になつてはしまいかと考えさせられることである。もとより、当支部管内は札幌に隣接し、地理的に恵まれて大会への参加も容易であり、これにより啓発、裨益されるところ誠に多いことは喜ぶべきことであろう。しかし、会員各位が本研究会をより身近なものと感じ、日頃の実践、研究を

より確かなものとするために、校内では数少ない同一科目的教授者、実践研究者に、支部他校会員との提携、共同研究を通して、より多くの実践例を求め、共に検証し合う中から深化し、昇華された実践指針の集約を計るような研究推進のあり方、それを通じての会員相互の新陸と研究意欲の増進を、共々に求め、進めて行きたいものと思うのである。

記

### 1. 会員数推移

年度	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
会員数	59	80	184	194	350	410	437	468	479	449

### 2. 歴代支部長・事務局

年度	支 部 長	事 務 局 校	事務担当者
38	滝田彦之丞	岩見沢西高校	渡辺 直吉
39	滝田彦之丞	岩見沢西高校	渡辺 直吉
40	滝田彦之丞	岩見沢西高校	渡辺 直吉
41	深田 賢正	岩見沢東高校	小竹 秀雄
42	林 信義	岩見沢西高校	渡辺 直吉
43	西山 勝	栗山高校	正津 富雄
44	西山 勝	栗山高校	清水 国通
45	町田 敬治	栗山高校	深尾 彰
46	町田 敬治	栗山高校	林 政夫
47	町田 敬治	栗山高校	浅利 俊吉

### 3. 研究紀要掲載者

紀要1号 南幌 鈴木幹雄

「多数羽養鶏についての一考察」

紀要2号 南幌 小野繁夫

「農業自営者教育における進路指導」

紀要3号 夕張工 笹本 敏

「アルミニナセメント 特にその早強性について」

紀要4号 美唄南 青地 巧

「小量化学実験について」

- 紀要4号 三笠 金野富士男  
「地学に於ける野外巡査の諸問題」
- 紀要5号 岩見沢西 沢井泰子  
「家庭経営に於ける住居指導についての一考察」
- 紀要5号 夕張工 篠本 敏  
「俄虫・意義鉱床とその鉱石について」
- 紀要6号 栗山 高橋哲治  
「高校化学実験書についての一考察」
- 紀要7号 栗山 高橋哲治  
「有機化学実験についての一考察」
- 紀要7号 栗山 狐塚英隆  
「公衆衛生の効果的指導についての一考察」
- 紀要7号 月形 後藤 弘  
「Indirect Passiue の限界について」
- 紀要8号 栗山 長尾 章  
「記号論理による論証指導の一試案」
- 紀要8号 美唄聖華 阿部重廣  
「衛生看護科実習（校内および臨床）についての考察」
- 紀要9号 美唄南高校 牧野作夫  
「食品加工科における専門クラブ活動指針に関する考  
察」
- 紀要9号 月形 後藤 弘  
「absolute Nominative 研究」
- 4. 全道大会研究発表者**
- 40年度
- 農業部会 南幌 小野繁夫  
「定時制農業高校を中心として」
- 41年度
- 農業部会 南幌 朝日 博  
「農業教科と普通教科との関連をいかにしたらよい  
か——基礎的知識・技術の系統的履習において」
  - 部会 月形 竹橋孝順  
「教科学習の基盤としての生徒指導について」
- 42年度
- 社会部会 美唄南 高橋泰賢  
「社会科（政経）における構造化の実践的研究——  
日常学習活動中の——」
  - 数学部会 月形 谷川幸雄  
「図形と方程式の取扱いについて——創造性を培う  
指導——」
- 43年度
- 社会部会 夕張東 幅 一  
「主体的問題解決能力を育てる課題学習——中小企
- 業問題をいかに指導したか——」
- 農業部会 南幌・芽室  
「定時制農業科の保持する施設々備の活用上の諸問  
題について」
- 44年度**
- 国語部会 岩見沢東 木下 虎彌  
「現代国語における文学教材に対する生徒の実態に  
について——「夜明け前」を中心とした一考察——」
  - 社会部会 栗山 西村正末  
「人生観・世界観の類型別学習における思想史的取  
扱いについて」
  - 数学部会 月形 川村道夫  
「個人診断票を利用した数学Ⅰの指導」
- 45年度**
- 数学部会 美唄工 野坂慶一  
「定理の多角的考察」
  - 数学部会 栗山 長尾 章  
「組合せ理論の一考察」
  - 保体部会 月形 五十嵐義治  
「定時制（季節制）体育の諸問題」
  - 保体部会 美唄聖華 曽我文子  
鈴木トキ  
「衛生看護科における看護実習を効果的、能率的に  
学習展開させるための研究」
  - 農業部会 南幌 中川寿興  
「農業教科指導の目標設定と、それにともなう指導  
方法をいかに近代化するか」
- 46年度**
- 社会部会 月形 実古正司  
「意欲的な世界史学習の一方法——ヨーロッパ中世  
の展開——」
  - 理科部会 夕張北 国枝安夫  
「基礎理科の中の物理と他教科の境界領域について」
  - 理科部会 夕張東 勢渡 鑒  
「化学結合の指導法について」
  - 理科部会 美唄東 藤倉仁郎  
「これからの中の生物教育はどうあるべきか」
  - 保体部会 美唄聖華 浜谷英雄  
「衛生看護科の教育課程について」
  - 保体部会 美唄聖華 斎藤とも子  
「成人実習における視聴覚機材の利用について」
  - 英語部会 長沼 昌山康正  
「English program as a foreign language」
  - 工業部会 美唄工 辻村時男

「教育工学・システム化をどう組織的に導入するか」  
○商業部会 夕張 中山宗義  
「改訂學習指導要領にもとづく商業法規の指導上の  
留意点」

○商業部会 由仁 時田弘根  
「小規模商業高校における教育課程——本校の試案  
を例として——」  
(栗山高長 町田敬一記)

## 北空知地区支部

発足当初は、いわゆる校長教究という受けとられかたで、教頭、校長など一部で組織されたこの研究会も、ここに創立10周年を迎えて、教育現場の隔々まで根をおろした大木に成長し、会員数も6000名に迫るほどになったのは、まことに喜ばしいことである。

お陰さまで当北空知支部も、この10年に歴代の支部長はじめ関係各位のお力によって、順調な発展を続け、最近は毎年500名の会員を登録する道内有数の支部に成長したことは、たいそう心強い次第である。

さて、この10カ年間に、支部独自の主体的な研究活動を、どのように進めてきたかということになると、いささか後めたい思いである。つまり、年に一度の全道研究大会の輝かしい盛会のかげに安住して、支部活動に盛り上がりを欠いていたことは否めないからである。しかし、管内には別に北空知高等学校連盟に所属する研究部会があって、この中で教科別研究サークル活動が活発に行なわれており、しかもこの構成員が、そのまま高校研支部のメンバーとして表裏一体となっていることを思えば、このサークルの盛んな研究成果は、そのまま、高教研北空知支部の活動歴でもあり、高教研紀要の毎号に当支部関係者の論文が多数掲載されているのも、その証左であろう。

本年度は、さらに支部研修活動の充実を目指して、前述のサークルによる研究のほかに支部主催の研修大会を

行なったが、夏期休暇中にも拘らず盛況のうちに終ることができた。

当日は、管内各校から約70名が参加して、午前は、北海道立精神衛生センター所長黒田知鶴氏「青年期の精神衛生」について、午後は、北海道立教育研究所長吉村忠幸氏の「教師と人間」と題する二つの講演を聴講したが、どれも時宜に適した極めて小噬に富む内容で、参加者に深い感銘を与え、また参加者からも活潑な質問が多く出て、時間の経過を忘れるほどであった。

我々教師は、自分の専攻科目については一応の見識を持っているが、しかし他領域の事柄には関心が薄く、急速に変貌する現在社会の中で、兎もすれば孤立する傾向を生じていることを大いに戒心しなければならないと思う。このような事態に対処するためにも、専門教科の研究と併せて、一般教養の研修の機会を充実する必要があり、高教研支部の一般的研修活動も今後このような方向をとるべきであろう。このためには、講師として広く地域各界の識者の活用に努めるとともに、また時には中央の権威者を招へいするなど、研修機会の設定について積極的な取り組みが望まれる。

以上のとおり、創立以来の10周年を振り返って、当支部の歩みは、必ずしも目立ったものではなかったが、着々と堅実な道を進んでおり、今後さらに一層充実した研修活動を展開するよう決意を固めている次第である。

(砂川北高長 谷川 伸記)

## 上川地区支部

北海道高等学校教育研究会が創立されてから満10年、旭川支部（現在上川支部）は創立当初より223名の会員を擁し力強い歩みを続けてきた。

昭和38年5月の設立総会には、本部副会長として旭川北高、村上正雄校長（前教育長）を送り、また旭川東高山崎吉松校長が旭川支部長に就任した。以来支部長は昭和42年まで5年間、旭川東高校長が就任し支部の取締役を果してきたが以来2年交替で各校持ち廻りとなり、43

年～44年は旭川北高、45年～46年は旭川西高、そして本年度は旭川商業高校が支部長を引受けている。

発足当時の支部会員数は223名で、管内総教員数に対し約22.6%に過ぎなかったが40年307名、41年344と毎年その数を増し、46年には20校515名を数えるに至った。更に本年度は高校長協会の地区割の変更があり、それに併行して名寄支部の一部と本支部との併合により名称も上川支部となつたこと也有つて、33校774名、総教員数

比57%と飛躍的に増大し石狩支部に次ぐ大世帯となった。このことは北高教研の発展から考えると極めて喜ばしいことであるが同時に、支部の運営あるいは教科別研究会の持ち方など種々再編成再検討を要する面が出てきており、その調整を急いでいるところである。

支部活動の主なものは教科別の研究会である。当支部においては支部創設の昭和38年に農業科の研究会を旭川農業高校で実施し多大の成果を収めたが、更にその充実を望む声が会員より起り、39年度からは毎年二教科の研究会を持つことになった。39年は家庭（旭川北高）、保健体育（旭川東高）を実施したが、当時助成金として一教科3000円を配分したに過ぎず当番校はその運営に相当ご苦労されたと思う。しかしこうした全会員の熱心な研究心に支えられて、以来10年教科別研究会が休むことなく持たれ地味ではあるが活潑な研究活動が行なわれていることは当支部の大きな特色である。本年度は家庭（美瑛高校）、商業（旭川商業高校）の研究会の実施が決定し各当番校で準備されており助成金も支部費で一教科、9000円を計上している。なお昭和40年以降の研究会は次のとおりである。

40年 数学・商業

41年 理科・芸術

42年 英語

43年	数学・家庭
44年	工業
45年	国語・社会
46年	農業・商業

次に支部通信の発行である。支部の活動状況ならびに高校教育研究に関する情報提供及び会員の希望、意見などの交換を図るという趣旨から43年6月30日に支部通信第1号が発行された。以来今日まで年1回乃至2回発行され、本年度は第10号を発行する予定であるが各地各校の情報交換に役立っている。

なお研究発表などについては研究紀要第2号には実際に支部会員7人が研究成果を発表し、8号までの発表は17編を数えており、又全道の研究大会には会員諸氏の研究発表が毎回行なわれるなど支部会員の研究への取組み及び熱意は極めて高い。

以上当支部10年の概要を記したが、発足以来熱心な会員の力に支えられまず地域での研究体制の確立が除々に実を結びつつあり、それが年1度の全道大会での交流として大きく結実していっていることは誠に喜ばしい限りである。今年度は名寄支部との合併により相互に情報が持ち寄られ、新らしい事業意欲と企画が盛上ってきている。

(旭川商高長 二階堂文雄記)

## 留萌地区支部

### 1. 歩みと現況

#### (1) 歩み

北海道高等学校教育研究会が昭和38年に発足した時、当支部では各校の校長が、この会の趣旨を説明し会員募集をしたが賛同会員は少数であった。しかし爾来この会を理解し賛同する会員は逐年増加し、今年度の加入率は地区教員の60%にもなり、会に対する認識が深められたことは喜びに堪えないところであります。

尚、当支部が規程を作り、本格的に取り組もうとしたのは昭和42年である。

#### 3. 年度別地区支部長

年度	氏 名	学校名
38	岩沢 国男	留萌
39	工藤 正雄	留萌
40	細谷 猛	羽幌
41	細谷 猛	羽幌

42	虎 谷 勇 作	羽 帆
43	虎 谷 勇 作	羽 帆
44	虎 谷 勇 作	羽 帆
45	正 津 富 男	増 毛
46	鈴 木 新 造	増 毛
47	山 下 三 郎	苦 前

#### イ. 留萌地区支部会規程

##### 第1章 総 則

第1条 この会は北海道高等学校教育研究会留萌地区支部会といふ事務局を地区支部長の所属校に置く。

第2条 この会は北海道高等学校教育研究会則第3条の目的を達成するため、同会則第4条の事業を行なう。

第3条 この会の会員は北海道高等学校教育研究会の会員であつて留萌地区支部内の者をもつて組織する。

##### 第2章 役 員

第4条 この会に次の役員を置く。

1. 地区支部長 1名
2. 地区副支部長 2名
3. 監事 2名
4. 理事 1名
5. 幹事 若干名

**第5条** 地区支部長、地区副支部長、監事は地区支部において選任し、理事・幹事は地区支部長が委嘱する。  
役員の任期は2年とする。

#### 第6条

1. 地区支部長は地区支部を統轄し本部の役員となる。
2. 地区副支部長は地区支部長を補佐し、地区支部長事故あるときは、その職務を代行する。
3. 監事は業務および会計を監査する。
4. 理事は会務の運営庶務の処理の中心となる。
5. 幹事は会務の運営庶務の処理にあたる。

### 第3章 機関

**第7条** この会の機関として役員会を置く。

**第8条** 役員会は適宜これを開きこの会の運営に関する事項を審議する。

### 第4章 会計

**第9条** この会の経費は北海道高等学校教育研究会の事業費および、その他をもってこれに当てる。

**第10条** この会の会計年度は毎年4月1日に始り、翌年3月31日に終る。

### 附 則

1. この規程の改廃は役員会による。
  2. この規程は昭和42年7月18日より施行する。
- (2) 現況  
支部活動としては、①離島高校をかかえている、②各校間の距離的隔たりがある、③予算の裏付がない、④交通が不便である、⑤各教科担当者の横の連携に欠けていいる、とゆう地域等の特殊性から会合の機会を持つことが非常に困難であり、殆んどしていない状況である。した

がって事務局は本部と各校との事務連絡や支部会員名簿等の事務的な仕事のみに止っている。この点会員に対し深謝すると共に反省している次第である。

#### 3. 留萌地区支部役員（昭和47年度）

役員名	氏名	学校名	
地区支部長	山下三郎	苫前	
地区副支部長	川端保	留萌工	
"	北村四郎	天塩	
役員名	氏名	幹事	氏名
"	青木弘(羽幌)	"	西牟田実(焼尻)
"	佐藤俊彦(遠別)	"	富永定繼(留萌)
幹事	野田一男(天塩)	"	小沢三二(留工)
"	丸田広臣(初山別)	"	工藤哲一(苫前)
国語	岡本喬(留萌)	英語	浜中洋司(留萌)
社会	笹尾琢磨(天塩)	家庭	古賀ツイノ(留萌)
数学	南明(羽幌)	農業	森本褒(遠別)
理科	奈良勇季(増毛)	工業	春田俊郎(留工)
保育	佐藤功(初山別)	商業	工藤哲一(苫前)
芸術	日影憲吾(羽幌)	水産	阿部真次(天壳)

### 2. 将来の展望

いろいろ困難点はあるが、当地の特殊性から先づ学校間の親睦を図ることが是非必要である。小規模校では教科担当者が1名とゆう学校が全体の約半数校ある現状から、今後教科別研究会を企画し学習指導法の研究に重点を置いた支部活動をしたいと思考しているその研究会では各校の実践成果をもちより、意見交換をするとゆう方法で効果的な運営をしたい、それにより会員相互の親睦を深め横の連携が密になり、一層の教育効果が期待されるだろうし、本会の趣旨にもそい、創意工夫を重ね魅力あるものにすれば、会員の加入率も増し、実質的な実のあるものと発展するものと信ずる。

(苫前商教頭 工藤哲一記)

### 宗谷(旧名寄支部)

#### 職員の理解と協力

名寄地区支部においても、本会発足当時の道央地区と同様、しばらくは若干名の方々が会員となられ、研究大会を開催することに、本会の趣旨、目標等について職員へ鋭意説明啓蒙にあたってこられたようである。

その熱意と努力により、徐々にではあるが毎年会員数の増加をたどり、研究大会の内容充実と参加者の積極的

協力が実を結びはじめ、当地区教職員の本会への理解も深まり、研究会存在の意義も認められるようになって、昭和45年度の当支部会員は414名、加入率73%を越えるまでとなった。おそらくこれは、全道的に高加入率を誇る旭川地区を凌駕したものと思量される。

#### 地区支部の組織化

当地区における校長会、教頭主事研修会、各種研究会、

連絡協議会等が催される折に、数年以前より本研究会の名寄地区支部の組織化が提唱され、支部における研究会の開催を希望する声が次第に強くなってきた。意見や希望のなかには、地区支部の研究と交流を積みあげ実のあるものとして、全道大会へ代表を送り研究発表を行なうような組織体制を確立すれば、本道の教育研究の水準も向上し、質、量ともに価値ある先駆的なものになるのではないかろうか。という言葉も聞かれた。

しかし、各種の研究会や大会等がかなりの数にのぼり、各学校における教育計画に支障をきたす恐れなしとしない現状と、本研究会への理解と認識がようやく深まってきた段階で、一足飛びに高次元をねらうより、地区支部の規約を整備したり、支部の問題等について検討してみるとから始めてはどうか、ということで足下を固めていく道を選んだのである。

昭和45年7月15日付をもって、名寄地区支部規定が発効し、支部役員の委嘱も決り、支部内各学校における関係者の職員への情報提供も迅速化され、全道大会参加希望者は激増し、大会運営の機構が全道的なものとなるにつれ、当地区からも大会役員、部会運営者としての参加もみられるようになった。

また、大会参加経験者を中心として、当地区でも日頃の教育実践を基礎とした、全道大会における研究発表の場を希求する声が大となってきた。本部事務局、教科部会における配慮もあってか、昭和46年度の大会では、社会・理科・商業・工業等の部会に研究発表者を送ることが出来た。

年に1度のことでもあり、交札会的意識をもって参加しようという面もないではないが、体験者の中には、「年

に一度旧交を温める楽しみもあるが、それ以上に教育界の動向や社会変化の情勢、教師の各種実践例、教育に対する認識等を見聞するにつけ、驚異を感じるとともに、自戒の念にかられ新たな意欲をかきたてられる。」という感想をもらっているのである。

#### 今後の課題

当支部では、昭和46年度より支部研究会の開催について模索を始め、昭和47年度に各教科の代表者と支部役員との懇談会を開いて、この問題を検討する手筈であった。

だが、急速昭和47年度初頭、本研究会の地区支部割が変更され、名寄地区支部は上川支部（旧旭川支部と合併）と宗谷支部（新）とに発展的再編成することとなったのである。しかしながら、会員の本研究会に対する理解と研究意欲はいささかも後退することなく、両支部の構成員として、本会発展のため大いに協力し、貢献されるものと期待する。

道内において、高等学校教育関係の研修会、研究会、各種講習会等が各地で計画され実施され、教科関係はもとより、高体・野連、高文連等の大会も数多く催されている現在、本研究会の地区支部研究会を新たに企画することは容易ではない。各学校とも平常日において、補講代講等が相次ぎ、また、長期休業中は数多の研修会等が組まれていて、何かを企図しようとしても意に任せないのが実情である。各種研究会等をもう一度総合的に検討してみることも必要ではないだろうか。

いずれにしても、道内各地において、地道にこつこつと教育実践を積み重ねられている教職員の慎思な姿勢を顕現する場と、研修意欲に応える機会を設定されるよう乞い希うものである。

（名寄教頭 秋山茂夫記）

## 網走地区支部 (旧北見地区支部)

- 昭和38年度（第1回教育研究会）
- 昭和39年度（第2回教育研究会）
- 昭和40年度（第3回教育研究会）

引継書類、記録も当時のものは無いので不確ではあるが、未だ当地区には支部の結成を見なかった様で、各校とも校長、教頭をはじめとして研究熱心な此の種の全道的会合を待望していた少数の教諭が、毎年1月の教育研究会に直接、自主的に積極的に個人参加をしていった様である。

- 昭和41年度（第4回教育研究会）

この年北見地区に支部が結成され、支部長に大滝与三

郎（小清水高長）が選ばれ小清水高事務局となる。会員募集登録もはじめて支部として行なわれたが会員数は明らかでない。

- 昭和42年度（第5回教育研究会）

支部長大滝与三郎（小清水高長）事務局小清水高校、会員募集により本会の性格も理解され会員数も増加したようである。

- 昭和43年度

役員改選により支部長牧野賢良（遠軽高長）副支部長千葉恒平（北見仁頃高長）五十嵐弘（網走南丘高頭）監事相馬進（留辺蘂高頭）赤塚一夫（遠軽家政高頭）事務

局長野崎正二（遠軽高頭）となる。管内公立高校28校全てが加入し登録会員数も260名となった。これは網走管内高校教員数の31%の加入率である。第6回教育研究会の参加者も大変増加した。

#### ○昭和44年度

支部長は牧野氏の後任吉本昇（遠軽高長）副支部長は千葉氏の後任小山忍（北見仁頃高長）事務局長は野崎氏の後任十河巖（遠軽高頭）が補充選任され副支部長五十嵐弘、監事相馬進・赤塚一夫と支部役員を構成することになった。支部規約も検討され当地区の実情に合うものか制定された。各校長理事の会員勧誘力により支部会員数は352名、加入率は42%となり第7回教育研究会参加者も著しく増加、部会研究発表もなされた。

#### ○昭和45年度

役員改選支部長吉本昇、副支部長小山忍、五十嵐弘、監事相馬進、事務局長十河巖は再選、監事に伊藤惣蔵（遠軽家政高頭）が選任された。支部理事会で支部研究会の実施について検討されたが、当支部内には国語・地理論社・理科・商業・保健の6教科に亘って既に網走管内教育研究会があつて活動しており、数学・英語についても遠紋地区（遠軽紋別地区11校）教育研究会があり毎年理事会、研究会が持たれている事であり更に高教研支部研究会を設けることは重複し、運営上も問題があるとして保留された。

各校とも格別の会員増加の努力がなされ支部登録会員数は413名加入率は50%を超えることに旭丘教研、校長教研の誤解もなくなり北見支部としても高教研の組織が定着した。第8回教育研究会には当支部より全体司会、部会研究発表者も出て参加者は一層増加研究紀要に投稿する会員もあった。

#### ○昭和46年度

支部長吉本昇、監事相馬進、伊藤惣蔵、事務局長十河巖は前年に引き続き、副支部には神田正男（北見仁頃高長）磯村尚志（網走南丘高頭）が新たに選任補充された。登録会員数は462名と更に増加をみた。研究会参加者は各校旅費予算の都合もあり会員の輪番制、隔年制その他で制約もあった様であるが希望者全員に対する打切旅費の扱いとか実費支給とか工夫が試みられ第9回教育研究会には当支部からの参加者は飛躍的に増加した。

#### ○昭和47年度

役員改選支部長吉本昇、副支部長神田正男、磯村尚志、監事伊藤惣蔵は再選、新らに監事として佐々木浩元（留辺蘂高頭）事務局長として田中美知男（遠軽高頭）が選ばれた。加入校は上渚滑高校廃校により1校減ったが新らに北見藤女子高校が加入され支部登録会員数は7月1日現在479名に達し、会員中研究調査希望者もあり、逐年発展の一途を辿っている。

(遠軽高長 吉本 昇 記)

## 釧根地区支部

昭和48年4月、釧根管内の校長会が当地区へ転入の校長歓迎の意を含めて催された。

その折いろいろの役割を決める中で、高教研の支部長を仰せつかったが、何をどうしてよいやら皆目見当もつかない有様であった。幸い事務担当の衝に本校の林教頭があたることになり、会員の登録、名簿の作成、会費の徴収、本部或は各校との連絡などテキバキと手際よく処理されていき、名前だけの支部長でいられる、胸をなでおろしていたものである。

ところが、本部から10周年を迎えたので記念誌を発行することになったが、その中に地区のあゆみなる項目を設けることにした。ついては各支部の今日までの経緯を調査して作文せよ……ということである。誠に困ったことである。引継がれた書類綴りをひっくり返しても45・46年に関する若干の控えがあるだけで、資料らしいものは何もない、せめてこの間の支部役員の名簿でもと思っ

たが、無駄であった。これでは10年のあゆみどころではない。万事休すというところである。

本部の資料によると研究会発足の38年度の全道会員は1985名と記されている。全道各地域から数に多少の差はあるにしても万遍なく参加しているのに、釧根地方だけは何故か1人の会員も登録されていないのである。その頃私は札東高にいたが時の校長江口孝先生から設立の趣旨が伝えられ、発展を期したいと説明され、札東校の体育館で支部の設立の会が催され、既存の研究団体との関係はどうなるか、性格上所謂校長教研であることには抵抗があるなど議論が湧いたが、それでも可なり多数の参加者があったことを思い出す。

それにしても当時釧根では、この研究会に関する討議の場がなかったのだろうか。そしてどんなときさつがあって参加者を出すに至らなかつたものか、今となっては知る術はない。時の校長さん方にお伺いしたい気持でも

ある。僅か10年にしてこれである。

これを思えば、発足から今日まで旭丘高校に本部が固定されていたことは、大変なご苦労ではあったが、その流れを知る上でも、記録の保存されている点からも幸いしたと云えることです。

当支部においても、今後記録を整備し、担当する学校が移動しても、これを確実に伝えるようにすると共に、計画的な研究体制を下から盛り上げるために、少くとも3年に1度くらいは、全体会議或は研究会のようなものを催したり、現在家庭科教員によって実施されているような、教科群毎の研究を推進したいものと念願しているところです。然しこのような計画も釧根の広大な地域に散在する各学校から集合するための旅費を始めとする諸費用を捻出するのに苦慮しているのが現状であります。

最後に当支部47年度の役員名簿を記し賛めをふさぎたいと思います。

支部長 北條 忠（釧江南）

副支部長 新橋 昭夫（釧星園）

明平 行男（根室）

監事 佐々木重元（阿寒）

木下 義武（釧商）

理事 林 司（釧江南）

幹事

田中 保（釧潮陵） 教科幹事

岩尾正次郎（根室） 国語 磯部 誠一（白糖）

荻田 寿隆（標津） 社会 笠井 泰次（湖陵）

増田益之助（中標準） 数学 山根 泰一（江南）

小田代謙三（汐見） 理科 藤崎 善久（北陽）

塚原 春樹（白糖） 保育 佐田喜四男（釧工）

浜頭 久平（北陽） 芸術 石原 行男（江南）

中原 勝郎（別海酪農） 英語 岩崎憲太郎（弟子屈）

小黒 淳達（霧多布） 家庭 佐藤 静江（星園）

吉田 春二（釧星園） 農業 杉山 輝正（標茶）

三浦 隆治（根室西） 商業 田村 重見（釧商）

細川 征一（弟子屈） 水産 北山 重明（厚水）

小甲 幸一（釧短大付）

佐賀 晋二（釧第一）

（釧江南高長 北條 忠記）

## 十勝地区支部

昭和38年北海道高等学校教育研究会が結成されると共に、十勝地区支部では藤田武男柏葉高校長が初代の地区支部長に就き、各学校長を中心となって全員加入を呼びかけて発足した。当時の会員名簿がないので会員数は不明であるが、昭和39年度は253名と急速に増え、その後除々に加入者も増加し、例年300余名を数えていたが、最近は340名前後の会員を数えるに至った。

地区支部長は、藤田武男柏葉高校長（38～41年）、山口賢二帶広南商業高校長（42～44年）、西山勝芽室高校長（45～現在）と続き、当地区支部の発展に尽力されてきた。

この研究会の発足がらの数年間は、その趣旨がよく理解されず、所謂校長教研の名で誤解と反対の動きが各学校であったことは、当地区支部のみならず他地区でも同じであったようである。最近年ごとに盛会になり、参加

加入会員も増加の一途をたどって来ていることは誠によろこばしいことである。

振り返って当地区支部を見るに、今後改善努力すべき点があるようと思われる。発足当時から今まで、地区支部活動が極めて低調で、この点研究会の発展と将来を考える時、いささか寂寥の感にたえないことである。管内的には各教科、分掌等の研究団体やサークルがあり、活潑に活動をしているが、それ等が当研究会とのつながりの無い状態で活動し運営されている。今後、これ等との関連などについて調整を研究しなければならないと思うわけである。

地道で恒常的は地区支部活動こそ、本研究会の将来の発展につながり、教師の専門性を高め、本道教育界の前進を約束するものと考えるのである。

（芽室教頭 赤堀一夫記）

## 日胆地区支部

昭和47年度より北海道高等学校校長協会支部の組織の再編成がなされ、従来苦小牧支部に属していた日高管内高等学校が行政区画単位の観点から新たに日高日高支部

を結成し、さらに北海道高等学校教育研究会会則第7条の定めにより、高教研日高支部の誕生をみたわけであります。会則の第3条（目的）本会は高等学校の各教科な

どに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ることを目的とする。又第4条（事業）本会は前条の目的を達成するため次の事業を行なう。1. 研究会の開催 2. 講習会、講演会の開催 3. 機関紙の発行 4. その他本会の目的達成に必要と認められる事業を行なう、とあります。卒直に言つて高教研発足以来、札幌における研究大会は別として、支部単位の組織的な研修活動は誠に貧弱なものであったのではないかと反省を新たにしているわけです。こうした反省の上に立ち胆振・日高両教育局の指導等を得ながら昭和44年の秋に室蘭・苫小牧支部合同の高教研支部研究会を室蘭清水丘高等学校を会場として開催し、以来毎年春秋2回実施しております。その成果も著しく胆振・日高の高校教育の発展、充実に大きな役割を果して参っております。

昭和46年度までの地区支部の活動につきましては胆振支部の活動報告の中に述べられることと思いますので、ここでは割愛させて頂き、執筆者として責任を果す意味において日高の実態を紹介申しあげ、又日頃考えていることを若干述べてみたいと思うわけであります。

当日高は総面積4,838 Km<sup>2</sup>、太平洋沿い東南140 km程に亘る帯状の地域であり、世帯数29,031、人口112,175、人口密度23.2（全道：67.9）、産業別としては、第1次産業44.6（全道：26.4）、第2次産業24.3（全道：26.2）、第3次産業31.1（全道：47.4）、となっており、この数字特に東部日高に過疎化現象が進行しつつあります。又1世帯当たりの月収平均は町により隔差はあるにしても、60,000～80,000円と推定され、全道勤労者1世帯月実収入平均105,998円（昭45）に比較して経済状況は劣悪であると判断されます。こうした地域に道立高校4（全日制：普13、農3、商5、工2、計23間口（昭47入学者に対する間口）、定時制：普2、農1、商1、計4間口）町立高校6（夜間定時制：普4、季節定時制：生1、計5間口）計10校が散在しているという状況であり、高校進学率は60%強（全道80%強）という低率地域であります。又昭47公立高校入学者選抜資料によると日胆学区の全日普通科合格者平均点は8学区中第6位というデーターが出ております。上述の資料の分析から当日高における産業経済面での総合的な改造計画が必要であると共に、教育の面での強力な行財政措置と現場における教育指導の充実を期してゆかねばならないと思うわけであり、又日高の特性としての定時制教育の重視と、その充実発展に大なる努力が払われなければならないと考える次第であります。

1960年代は世界的に教育爆発の時代であり、又教育投資の時代がありました。70年代以降は脱工業化社会、情報化社会であり、又人間性回復の時代であり、生涯教育論もようやく注目され、教育の垂直的、水平的思考と統合の試みが始まろうとしている時代であります。こうした教育の大変革の時代に教育に携る我々の責任は誠に大なるものがあると思われます。学校教育内容の手段的側面と自己実現的側面の考察、構造的知識の視点からの「学習のしかたの学習」、さらに形成的評価の重視等、前途には解決すべき問題が山積していると思うわけであります。こうした時代的要請にこたえるべく昭和47年度胆振支部との合同教研を6月16日に行ない、又11月1日に第2回合同教研を計画しております。以下合同教研の概要と日高支部役員一覧を付記し、「高等学校教育と学習の現代化」の主テーマに迫るべく支部教研の活発化と充実を図りたいと存じます。

最後に北海道高等学校教育研究会の10年の歩みに深甚なる敬意を表すると共に今後の益々発展ありますよう祈念申しあげる次第です。

#### 1. 昭和47年度日胆高等学校教育研究会（春季）

期 日 昭和47年6月16日（金）

主 催 北海道高等学校教育研究会胆振・日高支部

後 援 北海道教育委員会胆振・日高教育局

当番校 北海道苫小牧工業高等学校

会 場 苫小牧市民会館

##### 研究主題

地域、学校、生徒の実態に即した教育課程をどのように編成したらよいか。

##### 小テーマ

1. 教育課程編成の手順と組織について
2. 各教科以外の教育活動の工夫について
3. 新教育課程に伴う教務内規の整備について

部 会 (1)全日制部会 (2)定時制部会

参加者 (1)全日制部会39名 (2)定時制部会26名

#### 昭和47年度日胆高等学校教育研究会（秋季）

期 日 昭和47年11月1日（水）

当番校 北海道静内北高等学校

##### 研究主題

学習指導の改善をどのようにすすめたらよいか。

##### 小テーマ

1. 効果的な年間指導計画の作成はどのようにしたらよいか。
2. 学習の定着を効果的にするための評価はどうあればよいか。

3. 学習の個別化をすすめる授業はどうあればよいか。まだ確定はしていないが上記のようなものになると思います。

## 2. 昭和47年度北海道高等学校教育研究会日高地区支部役員名簿

役員名	氏名	学校名
地区支部長	今井敏夫	様似商業高等学校
副支部長	白崎久彦	富川高等学校
" "	五十嵐弘	振内高等学校
監事	氏名(学校名)	監事
" 河西久男(浦河)	" 内田清(えりも)	
" 佐々木茂(静内)	" 相馬進(日高)	
" 藤木利男(平取)	" 下村保治(厚賀)	
" 岩隈秀夫(三石)		

国語 (24)	山橋正光(様似高)	英語 (10)	太田隆高(浦河)
社会 (20)	高橋忠男(振内)	家庭 (5)	黒田典子(浦河)
数学 (18)	平野弘一(富川)	農業 (11)	菅沼修三(静内)
理科 (19)	島村峯雄(富川)	工業 (10)	鈴木一郎(浦河)
保体 (11)	本間秀夫(平取)	商業 (15)	吉口新一(様似高)
芸術 (3)	足利晃洋(静内)	会員数	146名 教科( ) 内は教科別数
事務局	(学校名)北海道様似商業高等学校		
	(住所)様似町大通1丁目25番地		
	(電話)様似 117・407		
事務担当者	高橋 豊		

(様似商高長 今井敏夫記)

## 教科部会

# 10年の歩み

## 国語部会

### 中央講師の面影

41年の1月10日、第3回の国語部会。この時は会場が旭丘高校の図書館で何とかやりくりがつく頃であった。

中央講師として招へいした馬渕和夫氏は東京の学校で私と机を並べた仲間である。私が彼を紹介した後、彼が私との仲を話して、「学校時代の自分の学科の成績でどうしても未だにとけないナゾが一つある。それは支那語のK先生の点数が丙だったことである。私がこんな成績をとるはずがないのであって、これは先生が名簿の欄を一つ間違えて松本のところへつけるべき評点を隣りの私のところへ誤記したものであろう。」

参会の皆さん大笑いだったがこれは本当のことである。こんなことが縁になってか部会総会で部会長に推されたが、私は旭丘の高橋克美先生が助けてくれるのならということで引受けた。

それからは総会、部会、講師の依頼、会場の設営などほとんどすべての仕事は高橋先生とその仲間の先生がやってくれて、私のしたことと言えば戻込みする研究発表者を時々口説落したくらいなものであった。それと中央から来られた講師の方々と酒を酌んでは北海道の情緒を味ってもらうことであった。

ルイベ、タラバ、イクラなどという特産を賞味してもらって亭主の追分を聞いてもらったこともあった。

逆に45年(第6回)の成瀬先生からは講演の森鷗外管見というのも面白かったが、ホテルアカシヤでビールを乾しながら大正時代の殆どの作家と面識のあった先生の近代から現代にかけてのよもやま話が大変面白かった。

46年(第7回)の熊沢先生は私の恩師で、若き日ソシユールの言語学をひっさげてさっそうと言語学界に登場された方であった。今から30年も前の話してある。

今日70才、白髪赭顔、たばこを手から離さず、酒を語らしたら話は尽きるところを知らず、今でも東京中野の一角に熊沢横町と称する先生愛用のはしごの名所がある。

講師の先生との酒の話で終ってしまったが、私なりの感想を言わしてもらえば中央の講師の方々が、北海道の国語科の先生方の研究意欲が歓談の中で高く評価されていたということが一番の収穫だったように思う。

(木古内高長 松本利一記)

### 部会の10年

私たちの部会の母体である高等学校教育研究会は、調査研究、研究大会、研究成果刊行(紀要)という三つの事業を軸として動いています。したがって、この部会も常に研究第一主義の立場に立って運営されてきました。

この10年間、研究熱心な会員の諸先生の大会における、また紀要発表における立派な業績はここにあらためて申し上げるまでもないことです。事務局を担当していた者の1人として、諸先生のご熱望に応えられるような充分な運営ができなかったことを遺憾に思っています。

特に

- 年毎にテーマを変えるのではなく、継続的な研究一ある問題に対しての一貫した追求ができるようしたい。
- したがって講師の選定ももっと充分準備、研究し、会員諸氏の希望が生かされるようにしたい。
- 年1回の大会の運営形式もマンネリ化しつつある現在、いくつかの分科会に分けるとか、討議のしかたにもっと工夫するとか、考えるべきではないか。
- 各支部ごとの活動をふまえ、またこれとの連絡を密にすること。

といったような懸案も具体化されぬまま、事務局の引継が終ってしまったことは甚だ残念で、今後の問題としてそれが開成高校の新しい事務局に委ねられることになりました。

320名から700名へと会員数も飛躍的に増加した今日、この会に課せられた使命もまた極めて重、且つ大であります。10年の歩み、積みかさねの上に立ってともに力を竭すべく、会員の皆さんのご指導とご支援を心から望みます。

(札旭丘 高橋克美記)

## 社会部会

1. 本研究会は発足当初において校長教研とか官制教研という批判を受けていたし、今日もそうしたイメージをもって受けとめられている傾きがないわけでもない。

しかし本研究会が生徒の学力水準を向上させるにはどうしたらよいか、そのために能力や適性に即したカリキュラムをどのように構成するか、さらに学習内容を理解、定着させるにはどのような方法が適切であるかといった現場の教員が等しく抱えている共通の課題を研究しあう目的をもって発足し活動を続けていることは、その後の全ての活動それ自身がもっともよく証明しているところである。

かように社会部会は他の部会もそうであったように、兎に角社会科が当面している現場の諸問題を参加者全員で忌憚なく話しあうということで出発したのであるが、昭和38年度第1回大会から昭和40年度第3回大会にかけては、昭和35年改訂の指導要領をめぐる諸問題、就中新設された〈倫理社会〉の性格や指導法をめぐる問題に主たる関心が注がれていたようである。

2. 昭和41年度第4回大会から各部会毎に部会テーマを設定するとともに、分科会に分かれて運営されることになったが、社会部会においては「教材教具の効果的取り

扱いについて——単元主題の効果的指導について」のテーマを設定し、〈倫社・政経〉〈歴史〉〈地理〉の3分科会を設置して運営に當るようになった。

昭和41年度第4回大会では各分科会で「社会科教授過程の構造化」が問題となったが、授業目標を中心教材内容をどのように有機的に構成し、授業全体の立体的、構造的イメージを鮮明に確保していくか、またいかにして科目相互の関連を図り教科全体としての調和をとり、発展的系統的学習を展開していくか、などをめぐって論議された。

昭和42年度第5回大会においても、前回同様の問題が継続されたが、一方では構造化の過程で陥りやすい授業の形式化の傾向をどのように補い、授業の過程で「生徒の主体性・創造性をどう伸張していくか」という発展的問題提起もなされた。

3. 昭和43年度第6回大会から社会部会は、〈倫社・政経〉〈歴史〉の各分科会を更に2分して〈倫社〉〈政経〉〈世界史〉〈日本史〉とし、〈地理〉をそのまま残して5分科会を設置して運営に當ることになった。

昭和43年度第6回大会では前回の大会で提起された構造化に伴う欠陥をどう克服するかの問題に焦点がおかれ

たが、生徒の主体性・創造性を伸ばすために「主体的課題学習をどう進めるか」を中心に論議された。

昭和44年度第7回大会においても前回同様の問題が継続されたが、更にいかにして学習への興味を喚起し、学習意欲を高めていくか、そのために学習資料をどう教材化するか、また学習内容を効率よく理解定着させるために教育機器をどのように活用するかなど、いわゆる「教材教具の効果的利用」をめぐる問題についても論議された。しかし一方ではそうした技術的問題に終始しがちな傾向に対して疑問を投げかけるものもかなりあった。

4. 昭和45年度第8回大会にあたって、全体テーマは、「高等学校教育と学習指導の現代化」に改められた。

これに呼応して社会部会のテーマも「社会科教育の現代化とその方向について——学習を深めるためのねらいと内容および方法」に改められた。現代社会がその複雑な構造のもとでいかなる問題を提起しているか、それらの課題に対してどのような観点から対処したらよいか、またそのために現代科学の研究成果をどのように導入したらよいかを、理論的な現代観と実際的な現代意識を分離させることなく、たえず社会科教育の現場のなかで提起される具体的な問題を通じて検討するという研究の方向が定められたのである。

昭和45年度第8回大会では、「主題学習をどのように進めるか」に主たる関心が注がれたが、社会科の成果が継

続的、発展的に生かされるためには、何よりも基本的事項を確実に理解させ、基本的能力を身につかせることが必要であるが、そういう観点に立って「学習内容をいかに精選集約するか」という問題も話題になった。

昭和46年度第9回大会においても前回同様の問題が継続されたが、昭和48年度から実施される45年改訂指導要領をめぐる諸問題についても検討が加えられた。

5. 今回の改訂が現代社会における人間形成という基本的課題を担つて行なわれたことは承知のとおりである。

激しく変動する現代社会の複雑な構造のなかで人間の自主的なあり方が強く求められている今日、社会科に負せられた使命と役割はきわめて大きいわけであるが、そうした意味では「社会科教育の現代化」という部会テーマは今後社会科が目指さなければならない方向を明確に示唆していると言えよう。

本研究会も明年1月で第10回大会を迎えるわけであるが、上述の意味で内容的に大きな転期にさしかかっていることは明らかである。分科会の運営についても、従来の研究・講演というスタイルのマンネリ化が数年前から指摘せられており、この面でも一層の創意工夫が要請されているところである。

第10回大会においてはシンポジウム形式の運営を目指し、全員の主体的参加による分科会で新味を添え、そうした意味でも画期的なものであります。

(札幌東 村上恒一記)

## 数学部会

北海道高等学校教育研究会数学部会が発足して既に10年の歳月を経過し、今日ここに、このような立派に成長した姿で、10周年記念を迎えることができましたことは、誠にお慶びにたえません。

私はこの間、数学部会に寄せられた関係各位のご努力とご熱意が今日をあらしめたものと考え、数学部会を代表して、ここに深甚な敬意を表するとともに厚くお礼申し上げる次第であります。

ご承知のように、数学部会は昭和38年に、北海道高等学校教育研究会の部会として発足して今日に至ったのであります。

その創成以前は、全道的な研究機関として、北海道算数数学教育研究会（北数教）ただ一つがありました。そして北数教全道大会の中でも、数学教育の充実と振興が強く叫ばれ、また昭和38年度よりの高等学校学習指導要領の改正に伴なう、数学教育現代化に即応できるよう、

高等学校を主体とする研究機関の創設希望の機運も、漸く高まってきた。

そして当時の北数教高校部会の会長、副会長を中心に、役員会、関係各団体等において、北数教、高教研の二本立制について北数教各支部の意見を集約し、また他府県の実状等も参考にするなど、その実質的な誕生に至るまでには、幾多の解決しなければならない問題点、困難点がありました。

そして大方の意見の集約として、高教研数学部会発表大会を1月に行なって、その中でいくつかの研究成果を集約して、8月に行なわれる日数教全国大会に発表できること。そして例年9月に行なわれる北数教全道大会に、日数教全国大会での研究集録、今後の課題等を中心に研究を推進する。

このような、1月（高教研）——8月（日数教）——9月（北数教）のサイクルで、相互関連をはかりながら、

全道的に数学教育を発展させていく方向で、この数学部会を位置づけました。

またその後の成長の過程においても、全道的統一研究テーマの設定や、研究発表の募集など、ある時は研究大会間際に講演依頼のために急拵上京したとか、事務局の雑多な事務処理等、並々ならぬ労苦、努力の回顧談も屡々聞いております。

このように、10有余年間の数学部会、各地区支部及び各学校関係者の努力は、着実にその成果を顕し、別に掲載の数学部会活動史年表資料等でも十分におわかり戴けるように、数学部会発表大会においても毎年に全道各地からの参加者数が増加し、また立派な研究成果も熱心に発表されています。

特に共同研究等の成果が、高教研研究紀要、その他各種の研究紀要等に発表されていることに注目したいと思います。

近年科学技術の長足の進歩と相俟って、数学教育の現代化が強く叫ばれ、発足当時の10年前と同じように、昭和48年度より高等学校学習指導要領が改訂されることになりました。そしてそれに伴なって生ずる現実的な現場の悩みや、問題点を解決していく地固めをする基盤として、数学部会の果たす役割は、尚一層重視され、また大きな期待が寄せられています。

申すまでもなく高等学校における教育研究は、各学校における毎日の実践的教育活動の積重ねが基盤でなければなりません。そしてその集約されたものとして、数学

部会が存在し、大会においてその成果の交流が行なわれてきました。

しかし10年を経過した今日、「高教研のマンネリ化、新年交社会的大会」などと仄聞することもあります。新年交礼的なことそれ自身それなりの意味はあると思われます。ともすれば、現状維持にのみとどまり、また組織の中に埋没して、無関心 無批判になりがちな結果がそのような状態を醸し出しているのではないでしょうか。

私は今後我々がなすべきことは、この数学部会を今日のように見事立派に育てあげてきた先輩諸氏の努力と業績に対しても、いささかの瑕疪をつけることなく、不断の努力と反省を加え、より魅力的な内容の充実と一層の向上・発展を期すべきものと考えます。

ここに私は、数学部会のこれから進むべき方向として、次のようなことを提案したいと思います。

- (1) 創設当時の基本的な考えに則り、日数教にもついての足がかりとなる方向に研究部会大会を推進すること。
- (2) 学習指導要領を中心とした研究実践と先導的研究を推進すること。
- (3) 各地区支部の組織化をはかるとともに、共同研究を推進すること。

最後に、本誌数学部会活動史、その他各種資料等の編纂にあたり、ご多忙のところをご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げる次第であります。

(札啓成高長 斎藤国夫記)

## 理科部会

高教研の10周年に当り理科部会に関して最近考えることを述べておこうと思う。

研究会は元来その性格として、何かあるものごとの研究に際して、同じ目標をもった人々の集まりであり、研究を進めるのに便利な組織機関であると解釈出来る。その中では常に研究という動作が展開されているわけである。

北海道高等学校教育研究会の会則第3条（目的）には、『本会は高等学校の各教科等に関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ることを目的とする』さらに第4条（事業）では、『本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 研究会の開催
2. 講習会・講演会の開催

### 3. 機関誌の発行

4. その他本会の目的達成に必要と認められる事業とある。

また高教研理科部会規定第2条には、『この部会は北海道高等学校教育研究会に属し、同会則第3条の目的を達成するため、とくに理科教育に関する諸問題を研究し、北海道高等学校教育の向上に役立てる目的とする』そして第4条に『この部会は第2条の目的を達成するため北海道高等学校教育研究会会則第4条にもとづきつぎの事業を行う。

1. 研究会、講演会の開催
2. 研究調査
3. 研究成果の刊行
4. その他第2条の目的に役立つ事業

とある。

会員相互の研修と識見の向上という点で、1月の研究大会理科部会集会における講演の果した役割は大きい。

理科が物・化・生・地の4分科会から成り立っているので一つの講演が理科全会員に御理解頂けるということは至難な事であるけれど、毎回当日の午前に行なわれた講演は大変好評であった。ある見方をすれば、この日の研究集会の主体をなしていたともいえる。

しかし、理科教育に関する諸問題を研究するという目的からいえば、毎回午後に行なわれていた各分科会の集まりにおける研究討議もこの集会の心臓となるものであろう。

教育の現場の状態を踏まえた実践的研究の発表討議ということは、研究という動作の重要な部分を占めるものである。この日のために研究をするというではなく、不斷の研究による成果をより多くの人々と検討し合い、再び教育の現場に反映させるための便利な場を提供すると

いうことでこの日があるので考えたい。

常日頃の研究であれば、年1回の研究集会では間があきすぎるということも考えられる。

たとえば年2回にするかわり、研究大会はもっと控え目で小規模にする。あるいはブロック毎のセミナー活動もあってよいのではないかと思う。冬に理科4教科が一堂に会するという事は、会場等の都合で簡単には行かない。過去においては、理科全体の講演だけで一つの場所に集まるという状況であった。そこで考えられるのは、講演会や4教科合同のシンポジウムは別の時期にもうけることも対策の一つになろう。

研究という活動は、時を問わず、場所を選ばずあるのだと考える。発表や検討の手段も研究集会、機関誌、セミナー等いろいろあると思う。講演会や科学映画会、あるいは展示会も経費等の都合つく限り望まれるものではなかろうか。

以上をまとめて、将来の具体的な活動の参考としたい。

(札南 辺見竜夫記)

## 保健体育部会

会員組織による、この研究会も発足して10周年を迎えました。心からお祝いを申し上げます。

保健体育部会の事務局を担当させていただいたゆえをもって、記念誌の発刊にあたり、原稿をたのまれました。発足当時の諸先輩のご苦労を偲びながら、私の記憶ちがいなどもあるうかと思いますが、部会10年の足跡をたどってみたいと存じます。

部会の歩みを、あえて搖籃期と充実期というかたちでみていきたいと思います。

### 搖籃期

昭和39年、幾多の悪条件化に難産の上、誕生した、この研究会、そして体育部会は当時、札北高に勤務されていた富田友治先生（現札幌大学講師）を中心になられ、補佐役に、これまで部会と、ともに歩んでこらるたいる旭北高の清水達人先生、それに当時、札旭丘高におられた藤沢輝祥先生（現札幌女子短大教授）の両先生、また蔭の力となって、事務的な面で手腕をみるわれた当時、札啓成高に勤務の高橋秋男先生（現道教委指導主事）といった諸先生方の献身的な努力によって現在における部会の基礎づくりをしていただいたのであります。諸先輩に対し衷心より敬意と感謝を申し上げる次第です。

また第1回の研究会の参加人員15名でスタートしたわか部会も今日、約10倍の参加者をみるようになりました

ことを喜んでいただきたいと思います。

### 充実期

昭和42年、第4回の研究会の部会総会において、当時、江別高校長の川田正徳先生（現札幌寒高校長）が部会長に就任され、事務局が札旭丘高に移ることになりました。

川田部会長を中心に在札の役員の先生方のご協力をいただき、部会の組織化をはかり、過去の築かれた実績をもとに、会員のみなさんから有意義な研究会と評価されるようにと数回にわたる役員会で衆知をあつめ、計画、立案にあたりました。

そこで第5回の研究会を契機に、道外より講師を招聯し研究会をもり上げようと、川田部会長の、ご尽力により東京教育大、宇土正彦教授をお迎えし、ご指導いただきました。それで事務局は本部の広報に便乗し部会報をつくり会員へのPR活動につとめその成果があったのか、前年度の2倍を越す参加者による盛会な研究会になり、事務局としても苦労のしかいがありました。

翌年は前回の飛躍を定着させるべく、年度早々に計画を立て、体育科における今日の課題である「学校体育における測定と科学的指導法について」造詣の深い東京教育大松田岩男教授にお願いすることに決まりました。

ところがその頃、全国的に大学紛争が熾烈をきわめ、東京教育大もその渦中にあり状況によっては出席できな

い場合もと云われてはいましたが、余程のことがない限りとかをくくっていました。ところが研究会の前日になってどうしても出席できないとの連絡があり、あのときは本当に困惑しました。

それで急きよ相談し、当時、道教育大札幌附属小学校で「体育についての測定・統計」に関し熱心に研究されていた荻野忠則先生（現札幌市教委指導主事）に事情をお話して懇請し、ピンチヒッターでご講演をお願いしました。お蔵で研究会のスケジュールも混乱することなく盛会裡に終了することができホッといました。

昭和46年1月の部会において2期、4年間部会長をつとめられた川田先生が当時、室蘭清水ヶ丘高校長でしたので部会のスムーズな運営を意図し勇退され、全道唯一の体育科が設置された恵庭南高校長の木村隆一先生（現函館北高校長）が部会長に就任されることになりました。そして翌年42年以来、5ヶ年間、部会の仕事を担当した

事務局が札幌丘高校から部会長の膝下である体育科の先生方の充実している恵庭南高校に移ることになりました。

高教研は旭丘教研などという言葉を耳にすることがありましたか、旭丘高校の体育科の先生方は研究本部の役割もあり、それに部会の企画、準備等で年末から年始にかけては忙しい毎日、毎年のことで冬休みは全くないようなものでした。そこには、よきチームワークと、ひたすらに部会の発展をねがい、サービスの精神がなければ中々できることであることを痛感いたします。

部会員数も500数十名になり、会員の研修意欲も高まり、研究発表される先生方の数が年々増え、時間設定、運営に苦労するように充実してまいりました。

学校教育における体育の重要性を考えるとき、われわれ体育科教師の研究機関として、この部会が北海道の高等学校体育をリードしていくよう今後の発展と飛躍をねがう次第です。

### 保健体育部会の歩み

	回数	期 日	会 場	参 加 人 間	中 心 主 題	部 会 長	副 部 会 長	事 務 局
籠 期	1	39・2・1	札幌丘高	15名	体育の学習指導について	富田友治	清水達人 藤沢輝祥	札 北 高
	2	40・1・13	"	25名	効果的学習指導法について	全上	全上	"
	3	41・1・11	"	36名	体育科学習指導法の研究	全上	全上	"
	4	42・1・11	"	47名	全 上	川田正徳	清水達人 大滝文弘	札幌丘高
充 実 期	5	43・1・10	札幌丘高	106名	効果的学習指導法の研究	川田正徳	清水達人 大滝文弘	札幌丘高
	6	44・1・10	"	136名	全 上	"	清水達人 鳴海啓男	"
	7	45・1・10	"	116名	全 上	"	"	"
	8	46・1・9	"	(?)	保健体育指導上の諸問題とその研究	木村隆三		"
	9	47・1・?	"	(?)		"		恵庭南高

(芦別教頭 在間 弘記)

### 英語部会

昭和38年高等学校教育研究会設立された頃英語部会どのように運営すべきかについて先づ話が出されたのは当時札幌市内の高校英語教師の連絡をかねた親睦会の「幌英会」の席であった。本部事務局が札幌旭丘におかれた関係上、又それまで市内の中学校高等学校英語教育研究会の高校側の中心人物であった梶浦先生、堤先生、(札幌丘)に加えて、伊藤(札幌)、長谷川(札西)瀬

戸(札南)葛西(札北)の諸先生がともかく第1回大会で集った参加者の意見をまとめて、英語部会の運営をしようと決めた。この間本部事務局の業務を担当していた岩城先生(札幌丘)も研究会全体の動きと関係づける為に出席していた。ようやく3回4回と会を重ねるうちに有村(札南)、丹治両先生も参画し、後に石田先生(旭西)も札幌以外から始めて役員として地方の意見を代表

して載くことになった。その後伊藤先生が藤女子大へ、堤先生が札幌市教委、岩城先生が道立教育研究所に転出されると、それぞれ助言者として参加して載くことが多く、長谷川先生が函館北へ移られてから、役員の顔ぶれも一新し、田村（札藤）、杉田（札南）、山崎（札西）、小松（月寒）、犬養（月寒）、の諸先生が加った。

その後、札幌以外の会員の意見を映させる為更に函館より田頭（函北）、旭川より湊（札西）、薄（旭東）の諸先生も加り一層運営面で強力になった。しかし年を追う毎会員数も増加し、札幌市を中心として「中・高合同英語教育研究会」が中・高の教育課程の改訂を目前にして全道的規模の「中・高合同英語教育研究会」開催の動きが起ると、英語部会の事務局の寺島、野元が本部事務局を兼務しながら二つの全道的な研究会を運営すること、は不可能であったので磯貝部会長に動きかけ事務局を札幌西高校に移す折衝をした。幸い西高教頭佐藤勇先生をはじめ舟治、福原両先生のご理解もあって当日の直木校長がご快諾下さったことは事務担当者としても安堵した

ものである。

運営面で英語部会として他の部会と異なる特徴は特設授業を最初からもつていて、研究と、教授実践の緊密をはかるようにつとめてきたことである。乏しい予算で部会運営をすることは問題が多く役員の方々の交通費は勿論食費代も自費負担をするという前近代的なやり方では研究会を本当の意味で近代化出来ないまま放置することになるのではないかと心配するものです。しかし講師の先生方は費用の面で活潑な方が多く講演に快くお出で下さいましたし、助言者の先生も北海道英語教育の先駆者でもある梶浦善次、牧野徹夫・三好茂・中野一夫の諸先生をはじめ、中堅の佐々木明・及川哲哉・斎藤和夫、若手精鋭の佐藤行敏・樋口隆士・福島清治・梶谷幸夫の諸先生のご指導を得て部会の成長をみたものである。「これらの諸先生の指導に加えて、この10年間全道各地より集った会員、参加者全員のご協力とご援助のお陰で今日の英語部会があることは特に忘れてならないことである。

#### 部会テーマ・講師・演題・特設授業

年度	テ　ー　マ	講　師・演　題	特　設　授　業
38			
39	表現力をいかに伸ばすか	北大 Ollan. G. Barr Oscar Wilde's Play, Importance of Being Earnest	公開授業 (札旭丘)
40	視聴覚教具の利用による学習の近代化		公開授業 (札旭丘)
41	読解力をいかにのばすか —多読指導・能力別指導を中心に—	Aleta Seltzer An Apple for the Teacher	岩城 札三 (札旭丘)
42	英語の理解力をいかにのばすか	東京教育大 桜庭信之 小説の領域—絵画と文学—	福原 俊明 (札 西)
43	英語学習における効果的動機づけ	東京外大 斎藤次郎 これから英作文指導	辻 弘 (月 寒)
44	同上（英作文法を中心として）	東京学大 江川泰一郎 学習文法の問題点 北大 John Landon 将来の英語学習の目標	江川泰一郎 (東学大)
45	英語教育の授業改善をどのようにすすめているか	道教委 Kenneth MacGraw 日本の英語教育私見	田辺 洋二 (早 大)
46	同上（新教育課程に関連して）	共立女子大 速川浩 高校における文学題材の扱い方	蒲沢 吉郎 (札 東)
47	教育課程の関連において授業改善をいかにすすめるか	北大 福村虎治郎 言語、言語学、語学教育	北川 輝彦 (札 北)

年度	会員数	研発件数	紀要論文数	部会長	事務担当者	事務局
38	207		2	梶浦 善次	堤 俊憲	(札旭丘)
39	242	5	2	梶浦 善次	堤 俊憲	(札旭丘)
40	282	5	2	梶浦 善次	堤 俊憲	(札旭丘)
41	325	4	2	長瀬 米蔵	堤 俊憲	(札旭丘)
42	467	4	2	長瀬 米蔵	堤 俊憲	(札旭丘)
43	539	3	4	長瀬 米蔵	岩城 礼三	(札旭丘)
44	516	4	4	長瀬 米蔵	寺島善五郎 野元哲浩	(札旭丘)
45	571	5	3	磯貝 芳司	寺島善五郎 野元哲浩	(札旭丘)
46	619	5	2	直木 通	丹治 福原 幹衛 俊明	(札西)
47	615	4	3	武智 省三	円治 福原 幹衛 俊明	(札西)

(札旭丘 寺島善五郎記)

## 芸術部会

### はじめに

芸術部会は、音楽、書道、美術、工芸の4教科合同で運営して来ている。発足当時、芸術の4教科は全道的な教諭の組織がなく、互に交流の機会に恵れないときでもあったので、この研究会の発足は意義あるものであったと思う。しかし当初は参加者が少く、4教科合同で共通の問題を研究しようと云うことで、運営上困難な事が多くあった。現在は参加者も100名近くになり、各教科それぞれに分科会がもてるまでになった。これは当初より第7回まで部会長であった上田由宗氏（前札西高）と部会運営関係者のご尽力のためと云える。ここで各年度毎の部会をふり返ってみることとする。

第1回 全体で講演、研究発表があり、その後各教科部会の協議となる。

この部会がきっかけとなり、音楽教科のみ後に研究会をもち、北海道高等学校音楽教育研究会が設立された。

第2回 講師 藤野 武（教育大教授）

演題 芸術教科と人間形成

研究発表〔書道〕中野友房（札開成）

芸術教育について

第3回

研究発表〔音楽〕加藤恒三（札西）

教科書の取扱について

研究発表〔書道〕上田由宗（札西）

中国を旅して

研究記要 加藤恒三（札西）

### 音楽の有機的な楽典指導について

第4回 講師 鬼丸吉弘（教育大教授）

美学について

研究発表〔音楽〕大津山 高（利尻）

雅楽の音取りについて

研究発表〔書道〕藤根信章（札啓成）

芸術教科の今日的な問題

研究記要 大津山 高（利尻）

雅楽の音取りについて

研究記要 長沼輝夫（帯広柏葉）

書の造型原理

第5回 講師 国松 登（教育大講師）

芸術の社会性について

研究発表 長沼輝夫（帯広柏葉）

書の造型原理

会場 札幌西高で開催〔芸術部会のみ〕

第6回 講師 平賀瑛彬〔指揮者、作曲家〕

芸術教育の創造性について

研究発表 田村 宏（岩見沢女子）

会場 住友信託銀行会議室

第7回 講師 更科源蔵（詩人）

文学と風土について

研究発表 足利晃洋（静内）

書における創造性の開発

研究記要 足利晃洋（静内）

書鑑賞の原理

部会長上田由宗氏が退任され、後任は千葉正信氏〔伊達高校校長〕が推举される。

会場 住友信託銀行会議室

第8回 講師 田上義也（東海大講師）

#### 創造性の開発について

前回の総会で分科会をもつことを強く要望され、この回より音楽、書道、美術工芸の3分科会が開かれるようになった。

#### ○音楽分科会

研究発表 大森 潤（函館中部）

新指導要領における基礎と日本音楽について

#### ○書道分科会

研究発表 三上 隆（函館北）

条市作品指導の問題・創作作品の問題

#### ○美術工芸分科会

研究発表 石川幸男（赤平西）

美術教育における創造性と鑑賞について

会場 市民会館会議室

第9回 講師 荒谷正雄（提琴家）

#### 芸術教育について

##### 音楽分科会

研究発表 山口佑功（札幌南）

想像から創造へ

##### 書道分科会

研究発表 中野友房（札幌成）

書道Iにおける題材の設定について

##### 美術工芸分科会

研究発表 長尾教逸（深川西）

学校教育目標の具体化における美術指導について

#### おわりに

以上合同毎の部会をながめたわけであるが、毎回講演講師の依頼、研究発表のテーマ等で、4教科合同と云うことで苦心している。又部会において、各教科共通の問題を討議すると同時に、専門的な問題についても、研究したいと云う要望が参加者の中で強くなっている。今後は各分科会の内容を更に充実させることが必要なようである。

（札旭丘 滝沢光郎記）

## 家庭部会

10年前、私の勤務していた札幌東高校で、此の会発足のための最初の集りが持たれた関係もあってか、微力な私が家庭部会長をお引受け致しました。

私達は、学ぶ機会を強く求めておりましたので、会設立の主旨に賛成して会員になったものの、最初は、どうしたら研究会参加者があるだろうかという心配であけ暮れたように思います。

最近の研究会のあり方を思うとき、一つの事が育って行くには、10年という歳月が必要なのだと感を深く致します。

第1回の研究会の時には、家庭部会の参加者はわづか6人、主に札幌市内の先生方で、此の部会が成立つようと出席して下さった方々でした。でも私達は、先づ部分が成立したというのによろこび、部会則を考え、会の基礎作りから始めました。

会の運営も暗中模索、兎に角年に1回は研究会を持ちたいということで、最初の2年間は1月の全体集会とは別に家庭科独自で、研究会を開催致しました。即ち、39年7月には、静修学園を会場として、東京のアカデミー洋裁学園長の原のぶ子先生による“立体裁断”的講習会を。翌40年10月には、藤短期大学を会場として、“世界

は食べる”という映画の映写会を行い、何とか責任を果たしました。

何しろ、参加者があるかないかが1番問題でしたので、参加者の便を考えて2回共、家庭科教育協会の研究大会に引きつづいて、日程を組みました。此處で忘れてならないのは、家庭科教育協会の諸先生の全面的な御協力があったからこそ盛会裡に研究会が出来たということです。

又資金面では、全国家庭科教育協会より御援助を頂きました。

この間にも、全体集会は毎年1月に行われました。

40年1月の部会には、鈴木ヨシ先生を講師に招き“家庭科教育と家政学との関連”について、御講演をいただき、伊藤弘子先生、石本梅子先生（当時指導主事）に指導助言をいただきました。参加者も30余名となり、ここで漸く研究部会らしい形が出来たのでございます。

研究会当日の朝まで、一体何人参加して下さるかという心配を致しました。従って、参加者がなくとも、許容していただける鈴木先生、伊藤先生、石本先生にお願いすることが出来たということが、役員一同の心の支えございました。

此の辺で全体集会が毎年1月にあり、それにつづけて各部会をするという現在のような形がととのつてまいりましたので、家庭部会も年1回全体会と共に研究会を開催しようという気運になって参りました。

41年の部会参加者は100余名となり一同大いに喜び合ったものでございます。

此の会が毎年何とか運営出来、順調に育ってまいりましたのは、先ず歴代の家庭科指導主事の鈴木先生、伊藤先生、石本先生が勤めて札幌在住で、家庭科発展を願う純粋の御支援があったこと、2つには、家庭科教育協会の先生方の御理解御支援のあったこと、3つには、会長校（旭ヶ丘本部校）に於て、部会の運営しやすいように事務処理をして頂けたこと、4つには、各役員をお願いした諸先生の献身的な御協力があったからでございます。

42年度になって、家庭部会のより一層の発展のために、家庭部会長を、家庭科課程を持つ学校の校長先生にお願いしては、ということになり、美唄南高校の坂本勇校長先生にお引受けいただき、此處で会の運営も一段と形もととのつてまいりました。以来校長先生方の御相談によって、45、6年度は、札幌西高校の直木校長先生、今年度は札幌東高校の川原校長先生に引きつかれております。

42年度は被服と食物に分けて実験実習をいたしましたが、当日の参加者は予想を大いに上回りました。以後は参加者も多くなり実験実習等は無理な状態になりましたので、人数の移動があってもよいような企画をするよう

になりました。

最近は講師、研究発表者も用意され、毎年発行される研究紀要の原稿も、原稿集めに苦労することも少なくなってきたました。

又各地区支部役員も全部揃うようになります、地区支部の研究活動も、活潑に行なわれているところがふえております。

始めの頃の講師の先生が到着されるかどうか？資料が届くかどうか？と大雪の中を、かけまわった記憶もなつかしい思い出となりました。

最初の計画のように、いかなる研究も自由に発表され、討究される“学問の自由”が確保されていることは、研究会設立当時の会員として何よりも喜びとするところでございます。

時代の流れと共に、生徒の気質も変ってきてています。加えて学校のカリキュラムでは、家庭科はむつかしい問題をかかえています。

日進月歩の社会情勢を最も反映する教科であれば、教師の望まれるものは、熱意だけでなく高度の技術と知識であります。

各地区支部の研究活動が盛になり、教育実践に創意工夫を重ね、研究紀要の原稿が多数集るようにと希望して止みません。

此の研究会の一層の発展を期待して、その創立の時から会員の1人として、会と共に、歩んできた感慨の一端をのべさせていただきました。

(札南 細間しづ記)

## 農業教科部会

### 第1回（昭和38年度）会員数（113名）

旭ヶ丘高校を会場とし、設立総会を開催し組織の拡大、及び高校教育と学習指導の近代化について討議を重ね  
明年度、農業教科部会への基礎をかためた。

### 第2回（昭和39年度）会員数（158名）

自営者教育における進路指導について、

発表者 小野繁夫（南幌）

〃 斎藤忠義（旭川農）

### 第3回（昭和40年度）会員数（214名）

農業教科と普通教科との関連をいかにしたらよいか。

（基礎的知識技術の系統的履習において）

発表者 朝日博夫（南幌）

〃 堀之内清志（音更）

講演（農業教科分科会）

北大教育学部 布施鉄治 助教授

講演内容

農村が高校の教育に何を望むか。

### 第4回（昭和41年度）会員数（358名）

科目「土、肥料」の基礎的知識技術の系統的履習をはかるためには、どのようにしたらよいか。

発表者 中西勝彦（中頓別）

〃 小田島慶吾（士別）

講演（農業教科分科会）

北海道農務部

農業改良課 藤村利夫 氏

講演内容

北海道の土壤、肥料について。

### 第5回（昭和42年度）会員数（336名）

年々部会、会員の増加がみられ、第1部、第2部に分割し教科部会がもたれた。

第1部会テーマ、施設、設備の近代化に伴ないその活用上の諸問題について。

発表者 浅見 猛（名寄農）

第2部会テーマ、定時制農業科教育の動向に照し、その施設、設備のあり方について。

発表者 井上裕司（小清水）

発表者 猪股新平（愛別）

” 佐藤佑一（恵庭北）

講演（農業教科分科会）

道専門技術員 安部正毅 氏

講演内容

本道農業の近代化の展望

農業学園指導部 太田米造 氏

農村教育の在り方と卒業後の指導

第6回（昭和43年度）会員数（336名）

農業教育の近代化に伴い、特に施設、設備活用上の諸問題について研究。

発表者 岡垣 栄（俱知安農）一施設、設備の近代化に伴い、その活用上の諸問題について。

” 原口達司（芽室）一定時制農業科の保持する施設、設備の活用上の諸問題について。

” 田中清一（南幌）一 同上

講演（農業教科分科会）

道教委指導

主事 部 亘 先生

講演内容

西欧の農業教育について。

第7回（昭和44年度）会員数（365名）

農業教科指導の近代化をはかるため、教育内容について指導目標の設定、指導法、及び評価について望ましいあり方の研究討議。

発表者 金田孝次（ニセコ）一農業教科指導の教育的効果（定着、習熟）をいかに評価するか。

” 安田恭一（岩農）一農業教科指導の目標設定と、それに伴う指導方法をいかに近代化するか。

講演（農業教科分科会）

文部省視学官 厚沢留次郎 先生

講演内容

教育課程の改善と教育の現代化。

第8回（昭和45年度）会員数（404名）

農業科指導の現代化をはかるために、教科内容について

て特に指導目標の設定、指導方法および評価についての望ましいあり方について研究協議する。

発表者 中川寿典（南幌）一農業科指導の目標設定とそれに伴なう指導方法をいかに近代化するか。

” 松下松実（名寄農）一OHPを利用した農業教科の学習指導。

発表者 湯谷 博（野幌）一農業教科指導の教育効果をいかに評価するか。

” 林 猛（余市）一農業教科指導の目標設定とそれに伴なう指導方法をいかに近代化するか。

講演（農業教科分科会）

帯広畜大 田島重雄 教授

講演内容

世界的視野よりみた農業教育の方向。

第9回（昭和46年度）会員数（416名）

多様化する生徒の能力に即した農業學習指導法について研究協議する。

発表者 平沢正勝（共和）一班別、グループ別など集団指導、個別指導の具体的方法と結果。

” 伊達寿夫（真狩）一定時制農業高校における総合実習のあり方と問題点。

” 山田 進（ニセコ）一プロジェクト教科指導の一貫性について。

” 谷岡 寿（美幌）一能力の多様化に伴なう測量學習における計算および、製図能力向上のための効率的指導法について。

講演（農業教科分科会）

日大農獸医部

作物学教室 戸苅義次 教授

講演内容

農業の進歩と農業教育。

ホクレン 西村 氏

講演内容

最近の農政について（流通問題）

第10回（昭和47年度）予定

新教育課程の実施に即応して農業教育の現代化をすすめるために教育の内容、方法をどのようにしたらよいかを研究討議し、研究発表校は、全日制、名寄農業、定時制、鷹栖高校とし。文部省、教科調査官、松下魏三先生による。一農業教育の現代化と新しい教育課程の編成一を演題とし、事業計画をたて進行中である。

（俱知安農 高橋清夫記）

## 工業部会

昭和38年5月25日札幌南高校において、全道各地から集った多数の先生方による盛大な設立総会が開かれ、本研究会が正式に誕生したわけですが、教科部会の1つである工業部会も、当時札幌工業高校教頭の本田茂先生が中心になり、同校佐藤嘉正先生とともに早速部会の組織作りに取り組まれました。しかし、そのころ、工業高校では既に小学科（例えは機械科、電気科など）毎の全道組織による学科研究会が創立しており、自主的に研究活動を推進し、かなりの成果を挙げていたこと、また工業高校全体としては毎年全道工業教育研究集会を開催し、積極的に研究活動を実践していたこと、加えて当時の教職員組合の思惑等複雑な要素がからみ、両先生のご努力にもかかわらず組織作りはなかなか成果があがらず、大変ご苦労されたようですが、翌39年2月1日には工業部会規程の制定にこぎつけられ、部会長に本田先生、副部会長兼事務局長に佐藤先生がそれぞれ就任され、その外副部会長1名、監事2名、幹事2名の計7名の役員構成で、部会事務局を札幌工業高校におき、会員数約100名をもって正式に工業部会が発足したわけです。

その年の4月、本田先生は小樽千秋高校（現小樽工業高校）校長に栄転されましたが、激務のかたわら引き続き部会長として組織作りに専念され、当時の記録によれば、たびたび役員会を開き組織拡大対策を協議し、直ちに実行に移すという具合に積極的に活動されたようです。

或る時は小学科毎の研究会理事長を招集し、会の趣旨を説き組織拡大について協力を要請するなど、あらゆる機会を活用して奔走されたようです。

現在450名に近い会員を有する工業部会の草分けを思うとき感無量のものがあります。

39年度の本会研究大会は旭ヶ丘高校で開催されました。当初は研究大会に参加する会員も少く、工業部会には40名たらずの参加者という誠に寂しい研究大会ではありました。研究内容は他の部会に先がけて、視聴覚教育のあり方をテーマにするなどかなり先進的な研究に取り組んでいたことが注目されます。

その後、昭和41年に札幌琴似工業高校長（現札幌工業高校長）寺岡二郎先生が部会長に就任され、以来5年間組織の拡大と部会事業の充実に専念されて、41年度末で会員数206名と創立時の約2倍になり、42年度287名、43年度368名、44年度320名、45年度385名と急速に拡大され、研究大会参加数も急激に増え、例年200名程度の参加者による盛大な研究大会に変わりました。

また、部会事業の充実については、まず研究大会の内容充実を取り上げられまして、41年度は早速、当時注目され始めた行動科学、行動心理学にもとづくプログラム学習による技術教育を研究テーマとして、プログラム学習の権威者である国立教育研究所長、矢口新先生を講師に招聘するなど創紀的な構想により、プログラム学習の理論を中心に充実した研究協議が行われ、つづいて翌42年度、プログラミングの手法とプログラムの活用法についての実践的権威者を講師に招聘し、具体的・実践的な研究大会が開かれております。

この大会では、参加者一同深い感銘を受けるとともに、プログラム学習実践に大きな自信と意欲を持つことができ、プログラム学習の実践に先生方が積極的に取り組まれるようになり、プログラム学習が全道的な定着をみるに至ったものでした。

またこの大会には、鉄道学院、電通学院、職業訓練関係等の先生方も参加され、和気あいあいのうちに熱心な研究協議が行われたことも極めて意義深いことでした。

さらに、44年度からは教育課程の現代化をテーマに理論的研究から実践的研究へと系統的な研究大会が開かれ、その都度、その道の権威者を招聘しての具体的・実践的な研究大会が開催されております。

その後、昭和46年に札幌琴似工業高校長中神謙先生が部会長に就任され、引き続き部会事業の内容充実に意を注がれまして、今日、450名に近い会員を有し、北海道工業教育の現代化推進の核として大きく貢献している工業部会に発展成長した次第です。

以上、簡単に工業部会の足あとを追ってみましたが、10年という短い期間にこのように飛躍的な発展を成し得たのも、創立当時からの役員各位の多大なご尽力と、会員各位のご理解ご協力、さらに、外部からご後援下さった関係各位の暖かいお力添えによるものと感謝申し上げますとともに、この立派に成長した工業部会が今後益々発展をつづけますよう会員各位の一層のご協力をお願い申し上げます。

最後に、会員各位の益々のご健斗を祈念いたします。

（札琴工 清水 茂記）

## 商業部会

10周年とは長いようでもあり、短いようでもある。北海道高等学校教育研究会創設当時からの大会要項、研究発表資料等は本部で保存されており、まとめて発表することになっているので、ここでは、記録や資料にないことを、この研究会の運営にたずさわり、発展のために尽力された先輩の諸先生の回想などからそのあゆみを記してみたい。

第1回、第2回の研究大会には、各団体等の反対もあって会場の確保にも苦労したとのことである。現在のように大々的に会員の募集もしなかったし、一部にはこのような研究会があることさえ知らない人達も多かったとおもわれる。

商業部会も最初は商業科有志のあつまりということでお發している。したがって会員のフリーな話し合いによって研究集会がはじめられた。だいたい30人ぐらいでスタートしたようである。本研究会には加入しないようにという一部団体からの指示があったとも聞いている。このような事情で有志とはいってもあまり集まらなかった。ごく内輪のあつまりとして発足した感がある。

3年目頃から研究会の活動も軌道にのり、会員も順次増加して來た。

商業の教科研究発表等は夏期に開かれる校長協会商業部会主催の商業教育研究集会に主力がそがれていたので本会の持ち方については会員同志で色々な論議が交わ

され、とりあえず会員の要望するテーマに基づきその道の研究者に講演を依頼し、講演者を中心に座談会を開き、会員相互の自由な意見の交換等により研修の効果を高めていた。

その後会員数の増加につれ、この研究集会のあり方が再び論議されるようになり、その独自性を出すため、夏期の研究集会で取扱われない商業教育全般についての問題を取り上げ研究を進めることになり、商業高校における女生徒の増加の問題等、幅広い研修が進められて來た。

その後学習指導要領の改正が打出されてからは、この研究集会でも大いに学習指導要領、教育課程編成について研究していくこと、科目群による分科会等をもつようになって今日におよんでいる。

商業部会の会場も最近2ヶ年は小樽でもたれたが、今年度からは従前どおり札幌に会場を移すことになった。

以前札幌に会場を設営したときには会員数が少なかつたため一部担当者が前日から宿泊しながら準備を進めたり、全体集会の半ばで部会場設営に走り回わらねばならなかつた状態が続いた。

今年度からは札幌におられる会員諸氏の御協力を得て、会員は全員第1日目の全日程に出席したいと思っている。

会員相互の親愛と連帯感をふかめ、たくましい研究意欲による一層の発展が祈念される。

(梅商 小山内義一郎記)

## 水産部会

昭和38年5月、北海道高等学校教育研究会の発足をみたが、当時の水産関係高等学校の実状から水産部会として活動を開始したのは、他部会より2年遅れた昭和40年6月で、小樽水産高校が26名入会したのを嚆矢とする。

ときの橋上宗一校長は、昭和40年6月19日付で研究会の入会について関係高校である函館水産、厚岸水産、森南茅部、浦河、紋別、網走向陽の各高校に文書依頼している。

これより先、昭和39年浦河高校で開催された全道水産教育研究会（主催は北海道高等学校長協会水産部会）において、高等学校教育研究会への加入について橋上部会長より提案審議されたが、各学校の校内事情、とくに組合との関係から加入困難であり、時期尚早ということです今後さらに充分検討の上加入するということになつたときさつがある。

その後、関係各高校の研究会に対する認識が深まり会員も逐次増加し、全道水産教員数の約75%に当る60名が加入した。

昭和41年1月11日、函館水産高校において、第1回の水産部会研究集会を開催した。

これによって、ようやく水産部会も一応軌道にのつたのである。

第1回の研究主題は「水産教科における効果的学習指導法」で、北海道大学水産学部講師、西山作蔵氏による講演が行なわれ、参加者30余名を得て第1回目の研究会としては盛会裡に終始した。

第2回目以降は毎年小樽水産高校で開催され、毎回50名以上の出席者を数え、全道水産関係高校唯一の水産教育研究会として年を追うごとにその実績を上げてきている。

また、この研究会は戦後続けられてきた、校長協会水産部会主催による研究会と合流した形で共催で実施されているが、会期1日では充分消化しきれず、日程をふやすか、あるいは別に実施した方がよいとの声もある。

毎年、研究会終了後実施している懇親会は会員相互の親睦を深めるばかりでなく、各校の情報交換の場としても非常に役立っており、この種の会合も是非継続させて

行きたいものである。

現在会員も70名を数えるようになり、全員加入にあともう1歩というところである。

今後会の運営についてはマンネリ化を防せぎ、さらに意義あるものにするためには会員各位の積極的な参加と本研究会の事業に対する協力を切に期待するものである。

(小樽水教頭 野村雅夫記)

## 歴代会長・事務局長を囲む

# 10周年座談会・回顧と展望

日時 昭和47年8月1日

場所 札幌市石狩会館

### 【出席者】

初代会長 梶浦善次（北海道女大）	会長 磯貝芳司（旭丘高校）
2代会長 瀬米藏（北海道女大）	事務局長 豊島一（旭丘高校）
初代事務局長 成田勇造（岩見沢東高）	（司会）寺島善五郎（本部事務局）
2代事務局長 大塚正次（似高校）	神田昭（同上） 野元哲浩（同上） (記録)柴田浩一（同上）

豊島 それではこれから北海道高等学校教育研究会の10周年記念座談会を開会したいと存じます。

最初に現会長の磯貝先生からご挨拶いただき、次に司会の寺島先生から会の進め方についてお話ししていくだいて、先生の司会により進めていきたいと存じます。何分よろしくお願ひ致します。では校長先生どうぞ。

磯貝 本日は最近にお暑い中をお集りいただきまして誠にありがとうございました。

本研究会も昭和38年5月に第1回の総会をもちまして以来、本日お集りの諸先生、ならびに会員諸氏の熱意と協力によりまして、本道の高校教育の振興に大きな役割を果して参りましたが、本年度で満10周年ということになりました。

つきましては、その記念行事としてこの座談会を催しましたが、この10年の回顧と今後の展望について腹蔵なくお話しいただけましたならば、今後の進展に大いに役立つものと考えておりますので、この際是非明らかにしておきたいこと、あるいは苦心談、秘話等、何でも結構でございます。一つざくばらんにお話しいただけたらと存じますので、何分よろしくお願ひ致します。

### 創設の事情・その精神

寺島 私は10周年記念行事の一環としての記念誌の編集を担当しておりますが、本日は、「10周年座談会」ということで、歴代の会長先生、事務局長の先生方にお集まりいただきましたが、この会の司会という大役をおおせつかった次第です。そこでこの会の進め方として次の三つのことを考えております。

一つはこの会の発足のいきさつと創設の精神といったこと、二つは10年間の業績、三つは今後の展望という風にまとめていきたいと存じます。

ところで、編集の方では、この10年を三つの時期に分けて考えております。第1期は創設期（昭和38年～40年）梶浦先生を中心にこの会を創り育てて行った時代、第2期は発展期（昭41年～44年）長瀬先生時代と申しますか、飛躍的に会員もふえ内容も充実して行った時期、第3期は円熟期（昭45年～現在）磯貝先生を中心に質的な向上をはかりつつ、現在に到る時期、一応仮説として以上三つの時期に分けて考えております。

それで古い時代から順に、全体集会、教科別集会、紀要等についてまとめていただき、最後に今後の研究



右から  
梶浦、成田、大塚  
各先生

会のあり方についてふれていただけたら幸いと存じます。

この10年間の資料を調べておりますうちに感じましたことは、この10年はちょうど戦後教育の反省期にあたっているということ、特に、戦後導入されたアメリカ教育の理念、制度、技術に対する根本的な反省を迫られた時期にあたっております。新しいカリキュラムの検討、道德教育の問題、愛国心の涵養、あるいは能力検定テスト、全国学力テスト、高校生の急増対策とか、期待される人間像、大学紛争、高校紛争等、重要な問題が集中して起きてきたのが、この10年間だったと思います。そして現在、後期中等教育の改善、多様化、更に新教育課程が実施されようとしている時期にさしかかっています。

従って本研究会もこの辺で過去をはっきりふりかえり、将来の展望を慎重に見きわめる時期ではないかと存じます。ともかくこういう10年間、初代の梶浦先生は大学教授の経験、長瀬先生は多年の校長として、磯貝先生は行政面の経験というように、それぞれユニークな過去の業績を負ってその任にあたって来られました。

昭和38年5月25日に、この会の発会式が行なわれたわけですが、発足に到るまでの事情とか、当時の社会情勢、教育事情の中で、どんなお考えをもってこの会を始められたか等につきまして、先ず梶浦先生からお話をいただきたいと存じます。

**梶浦** いや、特に遠大な理想があったわけではありません。関係した皆さんとのお話しの中から次第に具体的な構想がまとまっていったというのが実情です。

話の発端は、あれは昭和38年の3月頃だったかと思いますが、道の方から校長会に対して次のような話がありました。

今度文部省から民間教育団体に補助金が出ることになったが、対象があまり細分化されていては効果的でないから、なんとか1本化した組織を作れないものかということだったんです。当時、小、中学校ではかなり伝統のある団体もありましたが、高校ではあまり整備されておらず、教科によっては二つあったり、かと思うと全然そういうものがない、研究しても発表の場もないという教科もあるという風にかなりアンバランスな状態だった。

そこで、常任理事会で検討した結果、そういう組織に財政援助が与えられるなら、やる価値があるし、またやるべきだという事になり、当時の東高校長だった江口先生が発足までの責任者ということにお願いして組織作りにかかっていったわけです。発足までは校長会が責任を持つが、その後は出来るだけ現場の先生にやって貰うということにし、またそうやってきたつもりですが、このことが後々まで“校長研”などと批判される原因になったんですね。

ところで、研究会というような組織にあり勝ちなことですが、会費を徴収してもそれがどういう風に使用されているかあいまいだという不満があるのですが、そんなことのないように目に見える形で還元しようというわけで研究紀要、それから教育全般についての有意義な講演というように、だんだん具体的な構想が固まっているように記憶しています。

**成田** 梶浦先生のお話に関連してですが、只今は主とし

右から

豊島、磯貝、長瀬  
各先生



て校長会の立場からお話があったわけですが、現場の受けとめ方はどうであったか申し上げますと、よく校長会からの押しつけだと言われますが、私は決してそうではなかったと思っています。

梶浦先生からこういう組織を作りたいがというお話があった時、それを各教科におろして、そういうものの必要があるかどうかというところまで話し合って貰い、その上で参加すべきかどうか話し合いました。教科によって事情はいろいろありました、結論的には一本化された組織があった方がいいということになり、ほとんど全員参加した次第です。

**寺島** この会の事務局がいよいよ旭丘高校におかれることになったわけですが、その組織作り、特に運営の面でいろいろとご苦労なことがおありだったと思います。その辺のことを成田先生から。

**成田** あれは3月頃でしたか、梶浦先生が理事会からもどられましてね、会長を引き受けることになったが、事務局の方をよろしくと言われた時には、正直こりや大変だと思いましたね。(笑) 始めはどういう風にすすめていったらいいか手につかなかったというのが実際でした。それでも只今お話をありました基本構想をもとにして、規約その他の具体案作りにとりかかったわけです。

当時の川股事務長、それから大野先生、私と3人で主に仕事にあたりました。実際の運営が始まってからは、大勢の先生方に手伝っていただきましたが、特に英語の堤先生、それから今函館工専におられる恒川先生がよくやって下さいました。

ところで第1回の支部長会議を総会の前にもちまし

たが、その席上、研究意欲をかきたてるような研究紀要、これは是非出そう、ゆくゆくは文化系理科系の分冊を出してもいいというようなお話をありました。

それから北海道ではなかなかお目にかかるないような大物講師による講演会、また事務局ばかりでは研究会にならない、地方の研究組織も活潑にしていかなければというので、地方支部への運営資金還元ということも、発会の当初から構想の中にあったわけです。

**寺島** こういう動きをその頃地方におられた長瀬先生、磯貝先生はどのように受けとめておられたか。先ず、長瀬先生からお話いただきたいんですが。

**長瀬** 私はその頃小樽におりましたが、この会の企画を初めて知ったのは、昭和38年2月13日、校長協会の常任理事会の席上でした。偶然当時のメモが出てきましたね。それによりますと、昭和38年度教育研究団体体育成強化国庫補助として、国として予算が計上された。についてはそれに即応するような研究組織を作ってはどうかということでした。私としては賛成でしたが、何分組織作りを急いでいるということと、外部からの批判があつたりして、初年度は小樽はあまり会員数が集まらなかつたように記憶しています。

その後旭川に赴任してみると、様子が大分ちがう。組織がしっかりしていました。地方支部運営資金もいただきました。

考えてみると、いろいろ困難な状勢の中で、なんとか組織作りをなし遂げたということは大変な成功だったと思います。そういう意味で創設期3年というのは重大な時期だったんですね。それからこの会が個人加入だということが大有利でしたね。

ご承知のように、昭和41年度から思いがけず会長ということになったわけですが、梶浦先生から要點を引継いだものだから、何とか会員をふやすことを最重点に考えてきました。

それからこれは大塚先生の発案なんだが、地区ごとの事務担当者、教科の担当者を正式に決めて貰って会議を持つということを始めました。その外、大会の司会者を各地区から出すとか、会報の中に大会概況を入れて大会に出られなかった方に知って貰うとか、とかく札幌中心になりがちな大会運営にいくらかでも地方会員の方々に参加してもらって連帯意識を高めることを目的としてやってきたつもりです。

それから大会を札幌ばかりでなく地方にもまわせという意見が毎回出てくるんですが、現在の段階では宿泊とか会場その他の条件を考えますと、なかなかむづかしい。

**磯貝** 私はその頃奈井江の新米校長でしたが、当時の北空知の支部長滝川高校の横式先生からこの研究会の計画と会員募集のお話がありましてね。そこで早速教頭さんを通じて先生方に話して貰いました。その結果、研究は個人の意志に基いてやるものなんだということで、当時おった職員25名の殆ど全員が参加してくれることになりました。

昭和45年度から長瀬先生のあとをやることになったんですが、司会の方の区分によると円熟期となっていますが、まだまだ円熟期とは言えない。生长期、それもよちよち歩きの段階なんですね。以前からの路線を踏んでいるだけなんですよ。ただ私の期になって中央の動きが、中教審の基本構想とか、学習指導要領改訂の動きとか、あるいは大学紛争というような波にあらわれて、地味な研究活動が定着しがたいというような時期にぶつかっているんだね。

こういう時期に、特に高校紛争にぶつかって考えたことなんですが、本当に高校教育の目的を達成することが、紛争に対する答だと思うんです。つまり、現場の教師として互いに研修にはげむ、そして生徒に対して魅力のある授業を展開する。その為には教育課程、指導法、教材の研究を重ねて、理論的なものに眼を向けながら実践的な工夫を怠らないということが何よりも大切だと思うんです。

そしてね、この研究会の理念は一貫してこれだったんではないか、それが今日この研究会が6,000人の会員を擁する盛況を見るに到った最大の原因ではないかと考えています。

**梶浦** その通りだと思います。それに関して会報の3号にこんなことを書いたんですが、「それぞれの教科を通してこれらの問題（高校再編・学力向上等）に迫るのは決して視野の狭い、いわゆる教育の技術主義ではありません。このような地味な研究と実践はとくに観念的になり勝ちな教育問題の解決に確実な基礎を与えるものであります。」というんです。

つまり、吾々実践者は毎日の地味な問題をその場で解決していくということを通じて教育理想を達成していくべきだということです。これがこの研究会の基本的な考え方だと言っていいと思います。

### 講師の人選・会場の設営

**寺島** 終戦以来、政治経済の動きを中心としてそこから教育を考えていこうという視点が強かったのに対して、別の観方を定着させようというのが、この研究会の動きではなかったかと思いますが、そういう点をふまえて、全体集会の講師として知名度の高い方を依頼して来られましたが、その選定の基準をどの辺に置いておられたか、それから、最初の大会の時、全体講演のあと研究発表がありましたか、その性格をどのように考えておられたか、その点をお伺いしたいと思います。

**梶浦** いや、最初は会期が1日でしたので講演を聞いて散会というのでは研究大会の意義が薄れるというので研究発表も入れたのだと思います。

**成田** 第1回は午前中が全体集会、午後教科部会でした。そして午後の方は今後の運営方針を決めるだけでした。午前の研究発表には大野先生、河西先生にやっていただきました。

**梶浦** それで第1回の講師として森戸さん（森戸辰男氏）にお願いしたわけですが、森戸さんは中教審の委員長をしておられましたし、経歴、経験からいって最適任だと思いました。

然しあの頃は高校生の急増期でお忙しい方でしたので、仲々お会い出来ません。それで民主教育協会の事務局長の宮崎さんに仲介していただいてお願いしました。

いや、講師の選定では校長研と言われるのも無理ないですね（笑）。第2回は高坂さん（高坂正顕氏）でしょう。この高坂さんが「期待される人間像」の主査をやっておられるなんて折衝の段階では全然知らないんですよ。教育の理論家でもあり、実践面でも経験豊かな方ということになると、やはり高坂さんの名が出てくる。

そこで教育大の下村寅太郎先生を通じてお願ひしたわけです。ところが、高坂さんが研究会に来られる前日に「期待される人間像」が発表され、新聞でもとり上げて問題にするという次第で、いかにも私が「時の人」をえらんだような印象を与えましたが、事実は以上のことなんです。

その次は沢田さん（沢田慶輔氏）でしたが、本当は平塚さん（平塚益徳氏）においていただく筈だったんです。

前年の7月には上京してお願ひし、秋に行ったときには承知したということで全く安心しておったんですが、あれは12月28日でしたか、突然電報が入りましたね、予算折衝のためどうしても行かれないというんです。研究会まで2週間位しかない。弱ってしまってね。

そこで1月3日頃でしたか、それこそ必死の覚悟で上京しましてね。平塚先生をお訪ねして、これは先生の責任なんだから誰か推薦してくれということで、沢田先生にお願いすることになったんです。

長瀬 あの時の会場は静修高校でしたね。

成田 そうです。旭丘でやったのは第1回だけでした。だんだん会員数もふえまして、どうしても旭丘では収容しきれなくなつたんです。

それから会期のことも39年度の役員会で問題になりました、学校が始まってから先生方が出てくるのは大変だから、思いきって冬休み中にしたらどうかということで、第2回目からは1月10日前後ということになりました。だから2月というのは第1回だけです。

長瀬 平塚さんが来られたのは第4回でしたね。あの時も年の暮に上京して念をおしてお願ひしました。何しろ前年のことがあるもんですから。

ところが、今度は飛行機の延着で午前に来られる予定が午後になってしまった。(笑) そこでやむなく吉村さんと、梶浦さんに演説をぶって(笑) いたぐらにてることもありましたね。

寺島 講師の件では大塚先生も大分ご苦労があったんではないでしょうか。

大塚 そうですね。私の場合は大体校長先生が折衝されおられますから、そのあとの事務的な連絡が主でしたが、岸田さん（岸田純之助氏）の場合は、第7回においておいでいただく予定だったのが、翌年になったというようなケースもありました。大体お忙しい方ばかりですので、2年計画で折衝しなければならないようですね。

磯貝 私の場合は8・9回ですが、講師の人選を役員会

で検討して貰っても、なかなか具体的な人選まではむずかしい。そこで結局事務局で考えるということになるわけですが、教科のわくをはなれて広い視野をもつた方、しかも文化系、理科系お一人づつとなると益々むずかしくなる。

そこで第8回は、ちょうど中国問題がクローズアップされて来た時期だったので、衛藤瀧吉さんにお願いしようと思ったんです。

ところが5月頃でしたか、講演のため札幌に来ておられるということを知りましてね。いきなりホテルにお訪ねしてお願いしたんです。そしてこっちの学校名を名乗ったら、よく知っているというんです。なんでも先生の研究室に本校の卒業生がいて大変優秀だというので、すぐ承知して貰いました。それから岸田さんは前年からの交渉の経過もあり、これから的情報化社会という問題をとり上げていただきました。

第9回はどうしようと考えたんですが、ちょうどその頃、高校紛争、その前年の大学紛争と大きな混乱が続いた時期だったわけですが、その後の学校教育をどうもっていったらいいかが大きな問題だった。

それについてお話ししてもらうには大学紛争を身を以て体験した人がよからうということで、東大の林健太郎さんにお願いすることになったんです。たまたま堀米庸三さんが私の恩師でしたので、先生からもお願いしたんですか快く引き受け下さいました。

もう一人理科方面で矢口新さん。この方は一度工業部会の講師として来ていただいているんですが、その頃は教育工学、視聴覚、システム化などという問題はまだはじりだったんですが、今や時の問題だというので改めてお招きしたわけです。

いや、講師をえらぶというのはいろんな意味で大変なことで、今第10回の講師をどなたにしようかと頭の痛いところなんですが、然し、結局私ども3代目は、講師の招聘についても初代、2代の遺産をひき継いだという感じがしますね。

これほど会員数も多く熱心な研究会で、業績もあげているというのが中央講師にも魅力になっているんではないかと思います。謝礼なんか、これはお恥しいようなもんですね。

長瀬 全くあの謝礼を渡すときはつらいぞ。(笑) 文字通りの薄謝ですね。

寺島 講師の人選について、歴代の会長先生がそれぞれご苦心なさっておられることは、今のお話でよく解りましたが、それと同時に大会会場の設営にも、代々の

事務局長さんはご苦労なさっているんではないかと思  
いますか。

成田 私が事務局長をお引き受けして最も苦労したのは、会員数をなんとかしてふやすということでした。なにしろ助成金をもらうためには一定数の会員数を集めなければならず、初年度はグラフなど作りまして、毎日の申込数を書き込んで一喜一憂したものでした。

その次に苦労したのがこの大会場の設営でした。初年度はすべて旭丘で実施しましたが、部会も全部ということになると、使う部屋がなくなるんです。会議室に椅子を180入れたこともあります。次年度から静修高校をお借りしましたが、設営に生徒を動員するわけにもいきませんし、朝早くから先生方にお願いしました。特に第4回でしたか、ストがありましてね。チームを焚く人がいない。そこで旭丘のボイラーの人にお願いして焚いてもらったり、スチール椅子1,000位を会場にならべて貰ったり、これは大変な労働でした。

長瀬 あの頃の校長さんは佐藤麟太郎先生でしたが、随分お世話になったね。

神田 そこで苦労をしたんで、会場が市民会館に移ったから今度は楽になるかと思ったら、そうでないんだね。結局朝早くから椅子運びだった。(笑)

野元 市民会館はお役所なんですね。いくら朝早くいつもおいでそれと開けてくれないんです。

大塚 会員の方全部が来られたら、もう収容する場所がないんですね。中島のスポーツセンターという声もありますが、立派な講師のお話を聞きする場所としてはどうも。(笑)

### 紀要のこと

成田 研究紀要のことですが、第1回は原稿を集めるのにひどく苦労しました。

大塚 私どもの頃からは寄稿が多くなりまして、かえって嬉しい悲鳴をあげる状態になりました。一度だけ二部に分けて発行したことがあります。然し、全体の方にどんな研究が行なわれているか知つてもらうためには、一部の方がいいんではないかということで、もともと二部でしたんですが、費用から言えば二部の方が安くあがるんです。

寺島 私、庶務をやっておりますが、道内ばかりでなく道外からも論文の照会が随分あります。大学生だとか研究機関から、あの論文を送ってくれとか、紀要の何号を送ってくれという問合せがかなりあります。そういった意味では、この研究紀要も全国的な地位を占め

ていると言えますね。

梶浦 ほう、そうですか。

長瀬 国会図書館にも送ってますね。あそこに送ると、ご本人の業績を顕彰するばかりでなく、同じ研究をやっている人同士の横のつながりが出来ていくきっかけになる。

磯貝 これは研究会に匹敵する大事な意味をもっている。後まで残るという点、日常の継続的な活動の成果だという点ですね。事実論文の執筆者は、北海道の教育界の中堅として活躍していますね。

### 事務局の諸問題

磯貝 それから、今だに巷間“校長教研”だとか“旭丘教研”などと言われているが、この会を運営するにあたっては事務局の労力たるや大変なものなんですね。そこで部会を出来るだけ分散して、労力を軽減をはかるとともに、旭丘教研などと言われないようにしようと努力しているわけですが、然し、問題は今後どうするかということですね。

大塚 事務局運営の最大の困難点は経費の乏しいということでしたね。私の時は、会費は殆ど全部お渡しする資料代になってしまいます。会計は常に火の車でした。

神田 各教科からも予算の請求が出てくるんです。それがだんだん活潑になるにつれて、それぞれ東京あたりから立派な講師をおよびするんです。それがまた魅力あるわけですが、旅費を工面するのか大変ですね。

長瀬 文部省からの補助というのは、会員数とともにスライドするのかと思ったら、そうでないんだね。

大塚 最初の頃は、役員会の意向もあり、会の趣旨をひろく浸透させようというので、会費も200円で気軽に参加できるようにということでしたが、会員数から言っても、規模から言っても大体いいところまで来た。今後は質的に充実させなければというので250円になりました。

それが45年で、それから今回の300円になったわけです。大体組織が安定して来たら今度は質的発展を目指す。その為には、直接負担、直接参加という考え方が大事だと思います。

磯貝 そうだね。いつまでも補助金におんぶというのではなく、自分たちの研究には自分たちが金を出すということが、研究の意識を高めるんではないか。

大塚 一時会員が3,000から5,000に急増したことがありましたね。あの時は運営費が30万ほどどうしても不

足で、広告を15、6軒から賛助してもらって赤字を埋めたんです。これが一番いやでしたね。然し、これをやつておかなければ運営ができなくなるもんですから。

**長瀬** 役員会なんかでも、随分きびしいことを言われたね。今飲み食いしているのはどこの金だとか、大会当日の申込み金はどこに使っているのかとかね。

**神田** それはよく言われますね。ちゃんと説明してある筈なんだが。

**大塚** 大体発足当時から、この会は金銭的にきびしい会だということが役員の皆さんに浸透しているんですね。それだけに事務局運営は大変です。いつか文部省に補助の増額をお願いに行ったことがあるんですが、その時、あんたのところの会は全国一規模が大きくて全国一会費が少ない。そんなとこに増額はできないとうんですよ。(笑)

私は、北海道は全国一地域が広いんだから、一つの研究会に参加するのに全国一旅費がかかるんだと言っておきましたが、その時費ったリストによりますと、全国の補助団体で、けたはずれに会費が安いんです。

**磯貝** ところで私の代になってから旭丘は、事務局を大分やつたからこの辺でどこかに受けもってもらいたいという提案したんだが、大反対なんだよ。

お前研究会をつぶす気かなんてね。

**大塚** その発想は私なんですが、ここまで旭丘中心にやってきたから、この際広く会員の皆さんの手で運営されるべきではないかと考えたもんですから、事務局校をどこかへという考えをうち出したんです。

**磯貝** もう事務のパターンも出来ているから、高体連を二年交替でやっているように、できる筈だといったんですがだめなんだ。

そんなら、部会は分担して受け持とうということで、今旭丘でやっているのは音楽部会だけなんだがね。

**大塚** 地味なものをもちこたえていくのは、大変な努力が必要ですね。毎年の継続でしかも発展をはかるのはむずかしいことです。

**長瀬** こういう会は高体連とは性格がちがうんだね。高体連は生徒が主体で、先生は顧問という立場でしょう。ところが、これは対象が先生でしょう。(笑)

**野元** 最近は、事務局の仕事も一年間のパターンが大体固定してきました。一年のうちの何月には何を出すとか、その様式もそろそろ固まって来たところです。

**大塚** あれは野元さんと寺島さんの合作だ。

**野元** 然し、その一面これでいいのかと言う不安も感じるんですね。そこで“脱旭丘”的声も出て来るんです。

**成田** 然し、現在となっては、旭丘から事務局を移すということはむずかしいでしょうね。

**寺島** こういう問題もあるんじゃないでしょうか。現在この研究会は会員が6,000名を超える盛大な会になっているんですが、本部事務局の機構だと運営費、メンバーは殆ど発足当時と変わっていないわけです。

例えば、どんなに急ぐ時でもバスか電車で出かけなくてはならないとか、費用を浮かす為に広告費を集めなければならないとか、そういう苦しい運営をやっているんですが、その辺の事情をよほど整備した上でなければ、よその学校へそのまま持っていくのはむずかしいと思います。

**大塚** それは現在の事務局長さんの最大の悩みだと思います。だから、本来ならちゃんと本部事務局を置いて専任の事務員が仕事をするのが理想です。

然し、立場を離れてから申し上げるのは心苦しいんですが、担当の先生にはご苦労だけれども、現場の先生が直接事務をとって下さるところに何らかの意味があるのではないかと感じるようになってきました。

ただ、運営費が少なく、担当の先生の労力の過重負担という状態は何か改善して上げたいと思います。

市当局の英断に期待して定員増を考えて貰ってもいいんではないですか。

**梶浦** これは何も旭丘の為ではなくて、道全体の教育の為のサービスなんだから、道の方から事務員をまわしてもらうとか、そういう突破口をひらいでやっていく以外ないと思います。そういう働きかけは積極的にやるべきだと思います。

ただ、旭丘に事務局があるというのは、全体の向上の為のサービスであると同時に、自己啓発の機会も作るのだという考え方で、あえて先生方にお願いしたというようなわけで、その点先生方にはご苦労をかけていくと思います。

**成田** 地方に出てみましてよく解りましたが、地方の学長の中には受け取り方が様々で、極端な場合は、旭丘が高教研の事務局をとってはなさいなどと言う人もいます。然し、道立の高校では転勤がはげしいので実際問題としてはむずかしいんじゃないですか。

**豊島** 事務局の仕事も先程のお話通り、パターンが決まってきて、その点では楽になってきています。ただその反面、型が決まってマンネリ化して行く傾向がどうしても出て来ます。去年やった通りやれば何とか出来るということですね。今年はちょうど10年になりますし、これが一つの転機ではないかという気がして

います。

大塚 うん、脱旭丘を提唱した底流には、一つはそれが  
あったんですよ。

### 今後の課題・新しい展望

寺島 歴史的に見ますと、この10年は戦後教育の反省期にあたっているということは先程申し上げた通りですが、現在は後期中等教育の改革の問題で、48年から新しい教育課題が実施される段階に到ってますし、更に先導的試行などということが言われてます。

そこでこの研究会もその要望に答えられるかどうか新しい課題を与えられたわけです。事務局の機構運営を含めて、研究会の内容の問題で新しい展望が必要になって来ているのではないかでしょうか。

大塚 たしかにそうですね。総合的な研究の場が作られたというのが、この研究会の功績だといえますね。

ただそれを質的にどう高めていくかという課題は今後に残されていると思いますけれども、その際、既存のものを全く考えないで、ひたすら新しいものを考えていくのはどうかと思うんです。

神田 だが、このままいいのかというのが現在の吾々の最大の悩みなんです。どうしても既成観念から抜けられない。そこで、他校で事務局をやって貰ったら何かいいアイデアが生れるんじゃないかと思うんです。

大塚 “脱旭丘”は旭丘の先生がまっさきにやるべきではないですか。(笑)流れの中で苦労した人が、もう一つ飛躍をこころみる。その中で新しい展望を開くべきではないかと思います。提唱した本人がこんなことを言っては申し訳ないが。(笑)

豊島 ただ今のお話は、事務局云々というより、現在の“旭丘教研”と言われる状態から脱け出すことだという風にお聞きしたわけですが、そう飛躍的に考えなくとも、地道に改善すべき余地はまだまだありますね。

磯貝 そうなんだ。組織運営の問題が一つあるほかに、内容的な問題があると思うんですよ。質的な向上をいかにはかるか、例えば地区、教科の研究活動を主体的に充実していく。その為の予算、組織をどうしたらよいか考えていくというようなことですね。そうでなくてただ1回の大会だけで能事終れりと言うのでは負担はどうしても事務局校にかかるくるんだよ。基盤の充実が当面の課題ではないだろうか。

豊島 地区支部の活動ですが、中には立派に地道な活動を続けているところもありますが、全般的に言ってまだまだ軌道にのっていない感じがします。やはり支部の活動が、中央の大会に反映して盛り上っていくとい

うのが、研究会の本来の姿だと思いますが、なかなかむずかしいですね。

寺島 然し最近では、恒常に地区支部と教科部会の研究会が行われるところもでてきてています。

磯貝 社会科なんかでも、夏休みを利用して集団的に研究する動きが出てるんですよ。ただ、これは高教研の下部組織とは言ってはいない。いないけれども、これはやはり上部に高教研という組織があればこそなんだね。この動きを大事にしなければならないと思うんだよ。ただやり方は決して一律にはいかないんで、それぞれの支部長さんに考えてもらう。

神田 その考えを発展させるために、本部から支部にかけてP・Rしてもいいと思ってるんですが、出かけようにも予算が全くないんです。その辺の時間と財源を考えてくれれば大分様子がちがってくると思うんですよ。

大塚 地区の場合も、私が事務局をやっていた時、室蘭、苫小牧、それから釧路で地区の研究会を開いて下さいました。旭川は恒常にやっています。が、残念ながら定着しないんですね。問題はやはり予算がないということ。それからもう一つは、やろうにもその方法が解らないというのが実情なんですね。

それでお願いなんですが、札幌地区で一つモデルになるような地区活動をやってほしいですね。

寺島 札幌でも部分的にはできているんです。たとえば、英語では市内中学校の先生と定期的に合同研究会をやっています。が、やはり財源のことが問題になって来ます。

磯貝 共催の形でやってもいいんだね。事務量はそれ程ふえないと思うんだ。そのため部会長が積極的にリードをとってほしいと思います。

それから部会発表について言えば研究授業をぜひやってほしい。英語と数学では研究授業を持っていますが、やはり全教科必要だと思うんですよ。これは一つの課題だね。休み中で生徒を動員しにくいという難点もあるけれど、ビデオに撮っておくとか方法はあると思うんですよ。創設の精神から言ってもこれは必要なんではないか。

成田 地方に出で感じたことなんですが、この研究会についての認識が低いですね。地方支部、教科部会の研究成果のもちよりが、この研究会の実質的内容なんだということを、本部役員会などでもっと認識して貰う必要があるんじゃないでしょうか。その為に支部還元金があるんだということですね。

梶浦 今の事ですが、校長会でも趣旨の徹底、状況報告を繰返しやるべきでしょうね。

それから、これまでそれぞれの教科部会で独自のテーマを掲げて研究を進めて来ましたが、今日のような変革期で、制度の問題が日程に上って来ますと、制度の問題は各教科を貫く共通の問題になってくるんです。そこで全教科共通の大テーマを掲げ、それによってそれぞれの部会がその教科の観点から問題を考えしていくというのも一つの行き方ではないですか。

寺島 アメリカで1920年代に、伝統的な教育のやり方と進歩的なやり方のどちらか効果的かという問題が提出され、それを解決する為に現場の実践と理論とをかみ合させて、8年もの日時をかけて研究が進められ、制度教育内容等の新しい方向がうち出されたということがありましたね。

梶浦 これは日本の教育行政の体質から来ているのかも知れないが、どうも現場の先生方の実験のはばというのは狭いんですね。これはいけないと思うんですよ本当は。然し、狭ければ狭くなりに、従来とは違った角度で考えていくことが望まれているのではないかでしょうか。特に先導的試行などと言われ、教育内容でも制度でも一つの転機に来ているのは確かなんですから、これまでの高校3年というわくの中で考えていくのではなく、もっと広い視野でどうしたらよいかと考えな

がら研究していく。何かそういう大きなテーマをもつて進んでいくことが必要なのではないでしょうか。

寺島 ではこの辺でこの座談会を終りたいと存じます。長時間にわたり熱心にお話し下さいまして誠にありがとうございました。

なお、本日の座談会の録音テープと記録とをもとにして、記事という形で記念誌に掲載いたしたいと考えておりますが、長さの関係でお話の内容を要約したり、文章としての形を整えたりすることになると存じます。万々誤りなきを期しておりますが、万一誤りがあった場合は、訂正の機会をもちたいと思いますので、ご指摘下さいますようお願いいたします。

磯貝 本日は長時間にわたり、貴重な、また示唆に富むお話をまことにありがとうございました。先程お話をございましたが、本研究会も10年を迎えて一つの転機にさしかかっていると存じます。

また教育界全体も大きく変わらうとしていますが、この動きにいかに対応し、同時に本会をいかに進展させていくかが、吾々に課せられた使命かと存じます。

吾々微力を尽して考え実践していくつもりでおりますが、本日の座談会は吾々にとりまして非常に有益であり、示唆深いものがありました。今後ともかわらぬご支援とご忠告を賜りますようお願いしてお礼のことばといたします。

(文責 柴田浩一)

# 研究成果一覧

## 【全体講演】

第1回（昭和39年）

高校教育の問題点

森戸辰男（中央教育審議会会長）

第2回（昭和40年）

日本教育の課題

高坂正顕（東京学芸大学学長）

第3回（昭和41年）

考える力をもった人間を育てる教育

沢田慶輔（東京大学教授）

第4回（昭和42年）

後期中等教育の諸問題について

平塚益徳（国立教育研究所長）

大脳生理学と精神衛生について

中川秀三（札幌医科大学教授）

第5回（昭和43年）

わが國の中等教育

細谷俊夫（東京大学教授）

進路指導について

伊藤裕時（日本大学教授）

第6回（昭和44年）

転換期における日本の諸問題

高坂正堯（京都大学助教授）

開拓百年と北海道の野獸

犬飼哲夫（北海道大学名誉教授）

第7回（昭和45年）

宇宙開発と変革の時代

岸本康（共同通信社論説委員科学評論家）

教育改革と後期中等教育の諸問題

—諸外国の実状と関連して—

益井重夫（国立教育研究所第二研究部長）

第8回（昭和46年）

日本と中国

衛藤瀧吉（東京大学教養学部教授）

情報化社会における教育のシステム

岸田純之助（朝日新聞論説委員評論家）

第9回（昭和47年）

民主主義を考える

林健太郎（東京大学文学部長）

教育革新の課題

矢口新（能力開発工業センター所長）

## 【全体研究発表】

第1回（昭和39年）

教科指導と学校図書館

大野雍熙（札旭丘）

日本史指導と資料の利用

河西久男（札西高）

第2回（昭和40年）

「教育課程編成上の問題点」

梅村茂（札旭丘）

柳川重男（喜茂別）

佐藤嘉正（札幌工）

福士八郎（士別商）

第3回（昭和41年）

教科学習の基盤としての生徒指導について

納谷浩一（札幌東）

吉田正規（旭川商）

大橋実（札東商）

齊藤勝雄（滝上）

桐山正尚（長万部）

竹橋孝順（月形）

## 【国語】

## 【講演】

第2回（昭和40年）

新指導要領に即し、文学教材をいかに取扱うか

閔良一（立教大学教授）

第3回（昭和41年）

文法教育の問題点

馬淵和夫（東京教育大教授）

第4回（昭和42年）

古典教材の取り扱いについて

築島裕（東京大学助教授）

第5回（昭和43年）

高校漢文教育について

村松数弥（東京都立大助教授）

第6回（昭和44年）

作文指導について

奥水実（国立国語研究所）

第7回（昭和45年）

「森 鷗外 菅見」

成瀬 正勝（成蹊大学教授）

第8回（昭和46年）

言語の本質から国語教育を考える

熊沢 龍（東京教育大学名誉教授）

第9回（昭和47年）

古典と現代

佐古 純一郎（二松学舎大学教授）

【研究発表】

第2回（昭和40年）

新指導要領に即し、文学教材をいかに取扱うか。

獅子原 正（札南）

遠田 昭良（札開成）

第3回（昭和41年）

教育課程に即して文法指導の取扱いはいかにあるべきか。

水谷 邦夫（札北）

池田 敬（札開成）

第4回（昭和42年）

「古典」教科書の万葉教材とその扱い方について

佐藤 文義（樽潮陵）

漢文指導小考

伊藤 浩（苫東）

第5回（昭和43年）

漢文訓読の効果的指導はどうしたらよいか。

町中 豊（風蓮）

実業高校における漢文教材の取り扱いについて

三浦 滋勝（名寄農）

古典乙1 漢文入門の扱いについて

竹内 公克（苫東）

生徒の実態に即した漢文學習指導について

栗原 孝子（函北）

第6回（昭和44年）

創作を中心とした作文指導の一方法

石原 団三（函中部）

生徒の実態と作文指導

斉藤 公秀（常呂）

作文に関する実態調査について

藤原 寿（旭川）

要約文における表現の実態

細田 康弘（札旭丘）

第7回（昭和45年）

現代国語における小説の學習は日常の読書生活に

役立っているか。 松田 公平（上川）

生徒の文学教材への関心の実態について

木下 彪（苫東）

現代国語における詩の指導の実験的考察

古谷 倍（福島商）

現代詩の扱いについて 田村圭司（札開成）

第8回（昭和46年）

現代国語における当用漢字學習の実践例と試案

六ツ見 政見（留辺蘂）

当地域における送りかな意識の実態と正しい送り

がなのあり方について 奈良岡邦啓（木古内）

古典文法の指導について 大川 清司（赤平西）

新指導要領案をめぐる国語教育をめぐる諸問題

三宅 仁（旭東）

第9回（昭和47年）

生徒の現国と古典とに対する意識調査

武田 哲（旭北）

古典の學習指導上の諸問題 背原 善直（函東）

「論語」と現在 戸倉 博（札北）

教育機器利用時の評価についての一考察

村上 義夫（美幌）

【社会】

【地理分科会講演】

第4回（昭和42年）

地図教育の問題点

野村 正七（横浜国大教授）

第5回（昭和43年）

日本の交通問題

有末 武夫（群馬大学教授）

第6回（昭和44年）

地理教育の充実と教材教具の活用

浅香 幸雄（東京教育大教授）

第7回（昭和45年）

地理教育の充実と教材教具の活用

浅香 幸雄（東京教育大教授）

第8回（昭和46年）

70年代の文明の動向と日本列島の未来

清水 鶴八郎（千葉大教授）

第9回（昭和47年）

世界地誌の諸問題

市川 正巳（東京教育大教授）

【地理分科会研究発表】

第2回（昭和40年）

社会科におけるカリキュラムの構造と問題

大沢 昭夫（札西）

第3回（昭和41年）

社会科教授過程の構造化

前田 武男（札開成）

増田 忠二郎（札西）

大森 好男（札東）

第4回（昭和42年）

### 地理における水産業の取り扱いの一視点

千葉 薫（厚岸水産）

国家・国家群についての指導はどのようにしたら  
よいか

渡辺 英郎（札啓成）

国際関係における地理的諸条件の取り扱い方につ  
いての一考察

平岡 正治（赤平西）

国家、国家群の取り扱い方をめぐって  
常本 勇（網南丘）

### 第6回（昭和44年）

地理教材内容の精選と実践

森 貞司（札西）

資料に導かれた地理

神山 健（士別）

### 第7回（昭和45年）

地理学習ノートの利用について

富山 崑（留辺紫）

地理教育におけるグループ学習のあり方

林 隆治（札静修）

教材の効果的利用

原田 豊（函中部）

### 第8回（昭和46年）

地理学習における放送教材の取り扱いについて

木戸口 道彰（本別）

遠足を利用した地理巡検

高平順夫（札藤女）

地理学習における基礎的な地理常識の実態

渡辺誠三（函西）

### 第9回（昭和47年）

小規模校における視聴覚教材の計画的利用と評価  
について

石川真則（穂別）

効果的な地理の学習方法

中西 隆（士別）

48年度改訂「地理B」準備のための試行

加藤 実（札開成）

## 【日本史分科会講演】

### 第4回（昭和42年）

日本近代史上の諸問題

川村 善二郎（）

### 第5回（昭和43年）

近代文学の成立

大隅和雄（北大助教授）

### 第6回（昭和44年）

中世の農民活動

稻垣泰彦（東大史料編纂所教授）

### 第7回（昭和45年）

近世末から明治初期の領土問題

永井秀夫（北大助教授）

### 第8回（昭和46年）

明治維新観研究の歴史的意義

田中彰（北大助教授）

### 第9回（昭和47年）

大正政治史の諸問題

榎本守恵（道教育大教授）

## 【日本史分科会研究発表】

### 第3回（昭和41年）

社会科教授過程の構造化

綾井健二（千歳）

柳沢二郎（札南）

二川義昭（旭北）

### 第4回（昭和42年）

構造化による高校社会科授業の再検討

柳沢二郎（札南）

### 第6回（昭和44年）

思考力と問題解決能力を育てる課題学習

坂井一男（夕東）

安芸国小早川氏の一族一撥について

越野孝（野幌）

### 第7回（昭和45年）

開国以後の政局転換はどう展開したか

丸山寛（留辺紫）

国際情勢の変化と外圧

山崎徹（池田）

### 第8回（昭和46年）

国家主義思想の成立

宮森正勝（砂川北）

「自由民権運動」の指導における留意点

田村善之（釧江南）

明治期における思想史の問題点

江本嘉敏（丸瀬布）

### 第9回（昭和47年）

学習意欲を高める指導法の充実実践例

中齊利信（名寄）

第一次世界大戦の取り扱いの一例

古屋要助（赤平西）

## 【世界史分科会講演】

### 第5回（昭和43年）

フランス革命についての研究史

渥塙忠躬（北大助教授）

### 第6回（昭和44年）

世界史と比較史

井上泰男（北大助教授）

第7回（昭和45年）

ヘシオドスの生活像

岩田拓郎（北大助教授）

第8回（昭和46年）

中国古代史について

松井秀一（道教育大教授）

第9回（昭和47年）

ヨーロッパ封建制の成立

石川武（北大教授）

### 【世界史分科会研究発表】

第4回（昭和42年）

教育方法の構造化について

太田義夫（旭西）

第6回（昭和44年）

世界史学習における地図の効用

菊地守典（幌加内農）

地域社会と世界史B

前野良一（寿都）

主題学習の実践と反省

丸山恵照（当別）

第7回（昭和45年）

世界史年表の効果的利用法

矢野淘（登別）

世界学習における歴史地図の効果的使用について

安宅英夫（樽桜陽）

第8回（昭和46年）

古代史の授業についての一考察

丹幌夫（千歳）

世界史指導上の一試案

玉井滋（留辺蘂）

第9回（昭和47年）

意欲的な世界史学習の一方法

実吉正司（月形）

西洋中世史の特質

木曾義正（俱安農）

### 【倫社分科会講演】

第4回（昭和42年）

倫理社会と政治経済との関連について

蜂須賀孝（都立小石川高校教諭）

第6回（昭和44年）

受験生の心理

並木正義（北大助教授）

第7回（昭和45年）

現代の思想的状況

宇都宮芳明（北大助教授）

第8回（昭和46年）

宗教と人生

宇野光雄（北大助教授）

第9回（昭和47年）

現代思想の諸問題

小牧治（東京教育大教授）

### 【倫社分科会研究発表】

第2回（昭和40年）

社会科におけるカリキュラムの構造と問題

亀山省吾（奈井江）

第3回（昭和41年）

田中照（函西）

江口弘（羽幌）

小川純一（帯柏葉）

第4回（昭和42年）

共哲の基本的な考え方をどう理解させるか

金野和雄（奈井江）

倫理社会の授業における資料の扱い方について

白鳥章（札北）

第6回（昭和44年）

倫理社会の授業展開はいかにあるべきか

中村忠（北斗）

倫理社会における教材の効果的な取り扱いについて  
斎藤俊哉（余市）

第7回（昭和45年）

「人生観、世界観の類型別学習における思想史的取扱について

西村正末（栗山）

倫社教育におけるマスコミの取り扱い方

岸田光生（本別）

第8回（昭和46年）

倫理社会の主体的学習の展開について

加藤秀松（岩内）

「現代思想」単元における学習内容深化の方法

北川豊（滝川）

第9回（昭和47年）

発想における現代化と、現状的発想の周辺について

葛西摩季二（羽幌）

倫理、社会における諸問題

川端良男（雄武）

### 【政治経済分科会講演】

第6回（昭和44年）

日本経済の諸問題

早川泰正（北大教授）

第7回（昭和45年）

70年代における諸問題

菊地正世（道新聞論説委員）

第8回（昭和46年）

議会制民主主義の構造と変質

十亀昭雄（道教育大助教授）

第9回（昭和47年）

国民所得から見た日本経済

長谷部亮一（道立総合経済研究所長）

### 【政治経済分科会研究発表】

第2回（昭和40年）

社会科におけるカリキュラムの構造と問題

梅沢 鑑（櫻桜陽）

第4回（昭和42年）

技術革新

赤沼信夫（奈井江）

政経における構造化の実践的研究

高橋泰賢（美唄南）

第6回（昭和44年）

中小企業問題をいかに指導したか

幅 一（夕東）

単元「経済」における統計資料等の効果的利用について

織田秀秋（札月寒）

第7回（昭和45年）

政治単元における新聞記事の教材化について

鈴木栄吉（帯南）

経済分野の学習資料の効果的な扱い方

前田博富（室清水）

第8回（昭和46年）

「政治・経済」を通して政治的教養を高めるにはどうしたらよいか

井内隆夫（函西）

日本経済の構造をどう指導するか

両国毅（帯柏葉）

第9回（昭和47年）

社会科教育の現代化とその方向

遠藤昭夫（清水）

政経における公害学習指導の取り扱い方についての一覧見

仲井照順（本別）

## 【数学】

## 【講演】

第3回（昭和41年）

集合と論理

田島一郎（慶應大教授）

第4回（昭和42年）

ベクトルの実態とその応用について

穂刈四三二（東京都立大教授）

第5回（昭和43年）

論証指導について

小西勇雄（東京教育大教授）

第6回（昭和44年）

数学教育の現代化と新教育課程

大野清四郎（文部省調査官）

第9回（昭和47年）

写像と行列について

前原昭二（東京教育大教授）

## 【研究発表】

第2回（昭和40年）

新教育課程と学習指導上の問題点

奈良英夫・井原鑑（北開成）

佐々木順雄・金田嶌

上田晃（旭北）

野村明正（札旭丘）

第3回（昭和41年）

新教育課程における新教材の取り扱いについて

石川成平（旭東）

対馬仁郎（札月寒）

第4回（昭和42年）

図形と方程式の取り扱いについて

谷川幸隆（月形）

図形と方程式について

札西高数学科

第5回（昭和43年）

数工における論証指導について

芦別高数学科

論証指導について

長谷川健一（旭東）

高校数学における論証指導について

千歳高数学科

シンポジューム

数工に於ける論証指導について

鈴木成夫（網南丘）

論証指導に対する試案

林重一（俱知安）

高校数学現代化のため集合と論理

林清（旭北）

第6回（昭和44年）

授業研究（実践報告）

宮川行雄（砂北）

本校における理数科の現状と将来

瀬川真一（札啓成）

第8回（昭和46年）

定理の多角的考察

野坂慶一（美唄工）

組合せ理論の一考察

長尾章（栗山）

成瀬武弘（留辺蘂）

第9回（昭和47年）

羅臼分校に於ける「電算機の数学」実践研修報告  
西田 豊（標津羅臼）  
数学工における写像の指導  
白坂 陽一（本別）  
数学科の授業の現代化とOHPの効果的活用について  
鈴木 敏彦（室東）

【理科】

【全体講演】

第4回（昭和42年）

今後の高校物理教育について  
金原 寿郎（上智大教授）  
植物ウイルスについて  
村山 大紀（北大教授）

第5回（昭和43年）

最近の精密測定の話  
蓮沼 宏（東大教授）  
代謝と酵素  
下村 得治（北大教授）

第6回（昭和44年）

金属表面の反応性とその制御  
岡本 剛（北大教授）  
これからの生物教育の方向  
三輪 知雄（前東京教育大学長）

第7回（昭和45年）

原島 鮑（国際基督教大教授）  
第4記について  
井尻 正二（）

第8回（昭和46年）

高分子について  
中川 鶴太郎（北大教授）  
生体工学の話  
玉重 三男（北大教授）

第9回（昭和47年）

これからの高校理科教育のあり方  
大木 道則（東大教授）  
氷河の氷の結晶に関する話  
東 晃（北大教授）

第6回（昭和44年生）

理科教育現代化講座指導資料の実践ならびに検討  
伊良原 国雄（札啓成）  
第7回（昭和45年度）  
最近の物理教育の思潮とカリキュラムの内容について  
榎棒 光一（釧江南）

第8回（昭和46年）

これからの物理教育はどうあるべきか、パネルディスカッション

第9回（昭和47年）

基礎理科の中の物理と他教科の境界領域について  
パネルディスカッション

【化学分科会研究発表】

第5回（昭和43年）

現在の化学で扱われている「脂肪」に新しい傾向  
の化学教育をどのようにとりいれたらよいか。  
相田 忠郎（浜益）

第6回（昭和44年）

原子・分子の概念の化学的導入法について  
神尾 正光（砂北）

第7回（昭和45年）

これからの理科教育はどうあるべきか  
黒田 治（寿都）

現場の実態に応じた化学教育  
高木 幸雄（留辺蘂）

基盤方則に関する実験的考察  
宮下 正格（札西）

第8回（昭和46年）

商業高校に於ける化学教育の一方法  
佐々木 脾（札啓北商）

第9回（昭和47年）

化学結合の指導法について  
パネルディスカッション

物質の性質と電気伝導性から見た化学結合の実験  
指導法

黒河 正幸（俱知安）

【生物分科会研究発表】

第3回（昭和41年）

理科学習指導の近代化  
伊良原 国雄（旭西）  
第5回（昭和43年）  
物理教育の方向  
奈良英夫（理科センター）

第4回（昭和42年）

欧州の植物機構について  
松木 光治（樽北照）  
第5回（昭和43年）  
生物教育の現代化

- 河上 貢（余市）  
第6回（昭和44年）  
生物の自由研究に関する考察  
北野 敬典（砂北）
- 第7回（昭和45年）  
視聴覚器材を利用した効果的な生物の指導法  
高岡 清（奈井紅）
- 第8回（昭和46年）  
ハイマツ落葉生態に関する研究  
恩田 宏興（旭西）  
生態単元の取り扱いについて  
梅沢 彰（札幌成）
- 【地学分科会研究発表】**
- 第2回（昭和40年）  
理科学習指導上の問題点  
岡田 明（札南）
- 第4回（昭和42年）  
支笏・樽前周辺巡査実際例  
大江 フサ（札静修）
- 第5回（昭和43年）  
「天文」単元指導上の1・2の工夫  
香川 良道（北北斗）
- 第6回（昭和44年）  
気象教材の指導実践例について  
大森 勉（歌志内）
- 第7回（昭和45年）
- 第8回（昭和46年）  
地域地史をとりいれた地史指導の一例  
香川 良道（北北斗）
- 第9回（昭和47年）  
地質団について  
坂下 恵（樽桜陽）
- 【保体】**
- 第5回（昭和43年）  
高校体育とクラブ活動  
宇土 正彦（東京教育大教授）
- 第6回（昭和44年）  
学校体育における測定と科学的指導法について  
松田 岩男（東京教育大助教授）
- 第7回（昭和45年）  
体育に於ける測定と科学的指導法について  
松田 岩男（東京教育大助教授）
- 第8回（昭和46年）  
1970年代の体育スポーツ  
笠井 恵雄（東京教育大教授）
- 第9回（昭和47年）  
保健体育指導上の諸問題について  
宇土 正彦（東京教育大教授）
- 【体育分科会研究発表】**
- 第2回（昭和40年）  
保健体育科の学習指導をより向上させるにはどうしたらよいか  
遠藤 忠（札東）
- 第3回（昭和41年）  
体育科の学習指導について  
大谷 文弘（樽潮陵）
- 第4回（昭和42年）  
嚴寒時の体育実技指導（スケート）  
赤川 賢二（帯農）
- 第5回（昭和43年）  
高校に保健体育科を設置している学校の状況について  
増木 康郎（天塩）  
本校における体育実技の評価について  
遠藤 隆（旭北）  
体力、運動能力、発達の要因について  
川上 幸三（函西）
- 第6回（昭和44年）  
学校管理下における本校生徒の外傷事故の原因分析について  
茂井 茂樹（芦別工）  
スポーツテストの考察とその活用  
菅原 道行（札旭丘）  
保健指導の一考察  
佐々三男（札東）
- 第7回（昭和45年）  
カリキュラムにおける一工夫  
笠谷 茂生（美瑛）  
諸検査にみる本校生徒・精神的健康の傾向と問題点について  
作田 昌明（札幌成）  
持久指導とその評価に関する一考察  
川上 幸三（函西）  
本校体育科生徒の実態と教育課程について  
久保 公男（恵庭南）
- 第8回（昭和46年）  
グループ学習の実践  
竹田 慶司（深川西）  
保健学習における性教育のあり方  
五十嵐 新（北星男）  
定時制体育の諸問題  
五十嵐 義治（月形）

第9回（昭和47年）

創作ダンスへの入門

山田 昭彦（俱知安）

小規模校における全員参加のクラブ活動

芹田 重次郎（喜茂別）

本校で実施している必修クラブ活動とその問題点

浜 司（室清水）

本校における体育学習の指導について

四谷 進吾（新得）

【衛生看護分科会研究発表】

第8回（昭和46年）

衛生看護科における看護実習を効果的・能率的に学習展開させる為の研究

曾我文子・鈴木トキ（美唄聖華）

第9回（昭和47年）

衛生看護学科の教育課程について

浜谷 英雄（美唄聖華）

成人学習における視聴覚機材の利用について

斎藤 とも子（美唄聖華）

【芸術】

第2回（昭和40年）

菅野 武（道学芸大教授）

第4回（昭和42年）

美学について

鬼丸吉弘（道教育大教授）

第5回（昭和43年）

芸術科のもつ社会性について

国松 登（道教育大講師）

第6回（昭和44年）

芸術教育の創造性の開発

平賀瑛彬（札幌放送合指揮者）

第7回（昭和45年）

芸術教育について

更科源蔵（詩人）

第8回（昭和46年）

田上義也（建築家）

第9回（昭和47年）

芸術教育について

荒谷正雄（札幌音楽院々長）

【研究発表】

第2回（昭和40年）

現代高校教育の芸術科の位置づけ

中野友彦（札幌成）

第3回（昭和41年）

教科書の取り扱いについて

加藤愬三（札西）

第4回（昭和42年）

芸術四科の今日的な問題点

藤根信章（札幌成）

雅乗の取り扱いについて

大津山高（利尻）

第5回（昭和43年）

書の造型原理

長沼輝夫（帯柏葉）

第6回（昭和44年）

創造性の開発と教育環境との関連

田村宏（岩手女子）

第7回（昭和45年）

芸術における創造性の開発について

足利晃洋（静内）

第8回（昭和46年）

第9回（昭和47年）

長尾教逸（深川西）

想像から創造へ

山口祐功（札南）

書道Iにおける題材の設定について

中野友房（札幌成）

【英語】

【講演】

第3回（昭和41年）

Oscar Wilde's Play, Importance of Being Earnest.

Allan·George·Barr（北大客員教授）

第4回（昭和42年）

An Apple for the Teacher.

Aleta·Seltzer（道インターナショナル  
スクール校長）

第5回（昭和43年）

小説の領域

桜庭信之（東京教育大教授）

第6回（昭和44年）

これからの英作文指導

斎藤次郎（東京外語大助教授）

第7回（昭和45年）

学習文法の問題点とその扱い方

江川泰一郎（東京学芸大教授）

Future Aims and Purposes of Teaching English in Senior High School in Japan.

John Landon（北大客員教授）

第8回（昭和46年）

How I Feel about Teaching English in  
Japan

Kenneth MacGraw (道教委嘱託)

第9回（昭和47年）

高校における文学教材の扱い方

速川 浩（共立女子大教授）

【研究発表】

第2回（昭和40年）

表現力をどうのばすか。

青木 信也（札藤）

渡辺 新一（千歳）

野元 哲浩（遠軽）

小林 謙一（札北）

新妻 英勝（旭北）

第3回（昭和41年）

中津川 浩（小清水）

九津美 明（千歳）

山崎 滋樹（札旭丘）

西田 裕（札旭丘）

福原 俊明（札西）

第4回（昭和42年）

本校における「多読指導」について

佐藤 弘（旭西）

英語科における視聴覚機材利用と読解力について

丸田 謙三郎（樽潮陵）

能力編成の諸問題

品野 健一（函西）

多読指導としてアメリカの教科書の使用

中津川 浩（小清水）

第5回（昭和43年）

本校に於ける聴覚機材の取り扱いについて

藤井 省吾（岩内）

英語の理解力をいかにのばすか

棚橋 啓一（函中部）

Diagramingを取り入れて

野上 好彦（旭東）

L S教材について

山崎 滋樹（札旭丘）

第6回（昭和44年）

英語学習における動機づけの実態について

金津 豊文（風連）

音声面を重視した動気づけ

石前 陸夫（遠軽）

米国の高校における外国語学習の実状と本校における英語学習の効果的動機づけについて

薄 孝三（旭東）

第7回（昭和45年）

英文法、作文の効果的学習について

青木 茂二（帶三条）

英語学習における効果的動機づけ

三木 厚司（網南丘）

英語授業におけるテープレコーダーの一試用

柳川 孝茲（函東）

授業分析からの動機づけ

大沢 征次（旭商）

第8回（昭和46年）

英語授業改善の一つの試み

為近 久治（樽潮陵）

英作文指導について

渡辺 一郎（富良野）

高校入試の分析結果による指導法の改善

合田昭一・小林孝幸・後藤 隆（遠軽）

学習指導の面からみるテスト

近江 啓（俱知安）

第9回（昭和47年）

英語文法の組み立てと分析

新岡 利朗（札北）

Dialoues の必要性とその指導

村上 博信（深東）

English Program as a Foreign Language

畠山 康正（長沼）

恵まれない環境における英語学習とその改善

石川 健二（厚岸水）

昭和46年度新任教員研修会研修報告

小川 興成（本別）

【家庭】

【講演】

第4回（昭和42年）

家庭一般の被服指導における型紙の利用法

田口 充子（日本文化パターンKK）

第5回（昭和43年）

新化学調味料について

氏家 勇次郎（味の素KK）

第6回（昭和44年）

家庭科教育における科学的技術指導

橋本 英寿（北海道電力）

安藤 利雄（東芝商事）

北川 誠二（道工業試験場）

第7回（昭和45年）

家庭生活と微生物

佐々木 西二（北大教授）

保育の指導について

宇川 和子（日本女大助教授）

- 第8回（昭和46年）  
これからの住生活とその指導法  
藤井正一（芝浦工業大教授）
- 第9回（昭和47年）  
衣生活指導について  
祖父江茂登（埼玉大助教授）

### 【全体研究発表】

- 第4回（昭和42年）  
保育の指導に関して  
射場二三子（札東商）
- 第5回（昭和43年）  
新しいすまい方の指導  
岩部リツ（江部乙）
- 第8回（昭和46年）  
高等学校学習指導要領における職業教育関係の改訂と家庭教育  
岩部リツ（江部乙）
- 第9回（昭和47年）  
北空知地区高等学校の家庭科教育の実態と一考察  
熊沢富士子（江部乙）  
池沢澪子（赤平西）  
大友綾（赤平東）

### 【被服分科会研究発表】

- 第5回（昭和43年）  
被服生活と機械縫物  
佐藤久子（）
- 第6回（昭和44年）  
被服材料指導・資料製作実習  
山下せつ子（ライオン家庭科学研究所）

### 【食物分科会研究発表】

- 第5回（昭和43年）  
クノール・スープの実習  
岩本寿美子（美唄南）
- 第6回（昭和44年）  
電気調理器具の使用法・調理実習  
伊藤弘子（藤女大教授）

## 【農業】

- 第4回（昭和42年）  
北海道の土壤について  
藤村利夫（道農務部）
- 第5回（昭和43年）  
本道農業近代化の展望  
安部正毅（道専門技術員）  
農村教育のあり方と卒業後の指導  
太田米造（農業学園指導部）

### 【講演】

- 第6回（昭和44年）  
西欧の農業教育  
藤亘（道教委指導主事）
- 第7回（昭和45年）  
農業教育の諸問題について  
厚沢留次郎（文部省視学官）
- 第8回（昭和46年）  
世界的視野よりみた農業教育の方向  
田島重雄（帯広畜大教授）
- 第9回（昭和47年）  
これからの北海道農業について  
吉田要治（ホクレン農業会会长）  
農業の進歩と農業教育  
戸苅義次（日本大教授）

### 【研究発表】

- 第2回（昭和40年）  
自営者教育における進路指導のあり方  
齊藤忠義（旭農）  
小野繁夫（南幌）
- 第3回（昭和41年）  
農業教科と普通教科との関連をいかにしたらよいか。  
朝日博（南幌）  
堀之内清志（音更）
- 第4回（昭和42年）  
科目「土・肥料」の基礎的知識技術の系統的履習  
をはかるためにはどのようにしたらよいか。  
中西勝彦（中頓別）  
小田島慶吾（士別）
- 第5回（昭和43年）  
施設設備の近代化に伴いその生活上の諸問題について  
浅見猛（名寄農）
- 井上裕司（小清水）

- 第6回（昭和44年）  
施設設備の近代化に伴い、その活用上の諸問題について  
岡垣栄（俱知安農）  
定時制農業科の保持する施設設備の活用上の諸問題について  
田中清一（南幌）  
原口達司（茅室）

- 第7回（昭和45年）  
農業教科指導の教育的效果をいかに評価するか  
金田孝次（ニセコ）

農業教科指導の目標設定とそれに伴う指導方法をいかに近代化するか

安田恭一（岩見沢農）

第8回（昭和46年）

農業教科指導の目標設定とそれに伴う指導方法をいかに近代化するか

中川寿興（南幌）

林猛（余市）

OHPを活用した農業教科の学習指導

松下松実（名寄農）

農業教科指導の教育効果をいかに評価するか

湯谷博（野幌）

第9回（昭和47年）

班別、グループ別など集団指導、個別指導の具体的方法と結果

平沢正勝（共和農）

定時制農業高等学校における総合実習のあり方と問題点

伊達寿夫（真狩）

ホームプロジェクトと教科指導の一貫性について

山田進（ニセコ）

野菜の新しい育苗技術の指導と地域への普及について

佐藤与重郎（鷹栖）

谷岡寿（美幌）

## 【工業】

第4回（昭和42年）

教育の体質改造とプログラム学習

矢口新（教育研究所長）

第5回（昭和43年）

工業教育教材のプログラミングについて

西之園晴夫（京都大教員養成所）

第6回（昭和44年）

山本績（京都洛陽工業高教論）

第7回（昭和45年）

ヨーロッパ教育界の趨勢

寺岡二郎（札琴工高長）

歴史的にみた工業教育の推移

土井正志智（文部省教科調査官）

第8回（昭和46年）

末武国弘（東工大教授）

第9回（昭和47年）

情報社会の工業教育

片方善治（システム研究センター理事長）

## 【研究発表】

第4回（昭和42年）

プログラム学習について

高木久男（札琴工）

「シート学習によるシンクロスコープの操作実習」についての報告

成沢忠一（函工）

「工業物理化学」のプログラム学習

中谷常夫（樽千秋）

電気科におけるプログラム学習

小田正男（芦別工）

第5回（昭和43年）

アンサーチェッカーによる授業の展開

大村正道（札琴工）

土質実験学習とプログラム学習

三城雄典（帯工）

「品質管理」のプログラムの試作、試用、改訂、

その他

小山国太郎（函工）

第6回（昭和44年）

実習における学習の近代化の一方法

品川三雄（旭工）

三城雄典（帯工）

学理的教科内容を実用実務的に取り扱うための一考察

舛田勇起（室工）

第7回（昭和45年）

工業科入学者の質の多様化とその対策について

本多忠夫（芦工）

最近の卒業生の進路からみた専門教科の取り上げ方について

松田利夫（室工）

児玉清（釧工）

第8回（昭和46年）

工業高校教育における教育課程とくに専門教科の構造と学習内容の精選について

長井円（稚内商工）

滝沢克明（苫工）

井畠定哲（滝工）

第9回（昭和47年）

教育機器を利用した建築実習への一考察

豊山孝雄（名寄）

教育工学を導入した学習指導法をいかにして広く組織的に推進したらよいか。

宮崎輝一（留萌工）

教育工学、システム化をどう組織的に導入するか  
辻 村 時 男（美工）

## 【商業】

第4回（昭和42年）

流通組織の変化と商業の運営

岡 本 理 一（小樽商大教授）

第5回（昭和43年）

電子計算機の将来と経営組織

古 瀬 大 六（小樽商大教授）

第6回（昭和44年）

経営学の新展開

伊 藤 森右衛門（小樽商大教授）

第7回（昭和45年）

最近の消費者問題

斎 藤 要（小樽商大教授）

## 【講演】

昭和42年度、全国商業教育研究大会の報告と所見  
小 森 文 夫（丸瀬布）

第6回（昭和44年）

本校の貿易科について

樋 口 克 巳（函商）

本校商業科における女子教育についての一考察

若 山 敏 夫（様似）

本校の女子教育について

吉 田 鑑（室蘭商）

本校における女子商業教育

五十嵐 正 義（芦別商）

商業高校の教育課程はいかにあるべきか

佐 藤 晃 一（小樽商）

第7回（昭和45年）

商業高校における情報処理教育

川 原 浩 司（旭川商）

本校の教育課程編成上の諸問題について

国 本 成 雄（芦別商）

第8回（昭和46年）

新指導要領における商事関係科目の指導調整について

畠 清（旭北都）

商業法規における新指導要領案の問題について

渡 辺 修 司（富良野）

「経営」の指導と改訂學習指導要領

五十嵐 昌 行（小樽商）

新教育課程編成および実施上の問題点について

佐々木 儀兵衛（岩内）

税務会計の新設に伴う諸問題について

板 垣 輝 治（芦別商）

高校教育におけるコンピューター教育と高等学校  
学習指導要領

政 田 誠（奈井江）

商業実践科の評価

阿 部 純 一（函館商）

小規模校における電算機の學習方法について

阿 部 宣 昭（利尻）

第9回（昭和47年）

教育課程における商業経済科目群の位置と役割

福 井 俊 夫（札東商）

新指導要領に基く教育課程編成上特に商業経済科  
目を中心としての問題点と教育工学導入への考察  
について

三 浦 豊 紀（福島商）

改訂學習指導要領に基く商業法規の指導上の留意  
点

中 山 宗 義（夕張南）

本校経理科の経営関係科目

菅 生 鑑（室蘭商）

新指導要領に基く教育課程の編成について  
伊藤 喬（仁木商）  
小規模商業高校における教育課程  
時田 弘根（由仁）  
女子向教育課程について  
熊谷 全弘（旭川商）  
事務関係科目群の系統的学習についての本校のとりくみ  
加藤 和男（虹田商）  
商業教育改訂の推移と新学習指導要領にもとづく類型別による商事関係科目群「商事」の取り扱いについて  
渡辺輝雄（士別商）  
商事学習の一試み  
鎌田 隆（深川東）  
新教育課程の基調において  
(創造的営業能力の育成に「広告」と「商業美術」の科目はどうあるべきか)  
木幡 豊（千歳）  
教育課程編成上の諸問題について  
安宅 弘高（小樽商）

## 【水産】

### 【講演】

第4回（昭和42年）  
西山 作蔵（北大講師）  
第5回（昭和43年）  
水産教育の当面する諸問題  
高木 敬一（文部省教科調査官）  
第6回（昭和44年）  
北海道の沿岸・養殖漁業と水産教育について  
田村 正（北大教授）  
第7回（昭和45年）  
高等学校教育課程改訂と水産教育  
高木 敬一（文部省教科調査官）  
第8回（昭和46年）  
日本水産業の将来について  
添田 潤助（前道中央水産試験場長）  
第9回（昭和47年）  
間山 邦三（文部省中等教育局）

### 【研究発表】

第5回（昭和43年）  
水産教育において能力差の大きいクラスの指導方法はいかにすればよいか。  
滝川 茂登（小樽水）  
後期中等教育の拡充整備に伴う水産教育の多様化について  
小樽水産高校

電気通信術の指導と将来のあり方について  
若林 一男（小樽水）  
本道における水産増殖事業の一例について  
小林 照則（小樽水）  
第6回（昭和44年）  
今後の水産増殖科の在り方について  
小林 照則（小樽水）  
産業教育実技研修実施報告  
石子 博敏（小樽水）  
水産製造学科における「化学」学習の指導について  
工藤 豊（厚岸水）  
土田 映二（函館水）  
第7回（昭和45年）  
本校における視聴覚教育の実態  
大地 巍（小樽水）  
視聴覚教材を利用した化学の指導について  
工藤 豊（厚岸水）  
効果的学习指導法の実践的研究  
石橋 政雄（函館水）  
第8回（昭和46年）  
水産製造における品質管理の指導  
工藤 豊（厚岸水）  
新指導要領による教育課程の考察  
柴田 一郎（函館水）  
本校におけるホーム、プロジェクト指導について  
阿部 準三（恵山）  
池内 順一（恵山）  
第9回（昭和47年）  
厚岸湾における浅海増殖  
緒形 忠熙（厚岸水）  
水産におけるホーム、プロジェクト指導の推進  
小酒 幸一郎（恵山）  
池内 順一（恵山）  
水産製造科における教育のあり方と今後の動向について  
谷内 武（函館水）  
必修クラブ活動実施に関する考え方  
石子 博敏（小樽水）

## 【講 演】

## 【研究発表】

## 国 語

現代国語の技術研究

外 山 滋比古（お茶水女子教授）

## 社 会（地理）

東南アジアの地誌について

沢 田 清（日本大学教授）

## (日本史)

昭和の歴史と文学

小笠原 克（藤女子大教授）

## (世界史)

19世紀のナショナリズムの問題

失 田 俊 隆（北海道大学教授）

## (倫 社)

高校生の道徳性育成について

三 上 十喜子（札幌聖心女学院高校長）

## (政 経)

南北問題と日本の経済協力

西 川 潤（早稲田大学助教授）

## 理 科

静電気現象と災害

橋 高 重 義（東京理科大学教授）

## 保健体育

運動と人間

岸 野 雄 三（前東京大学教授）

## 芸 術

芸術教育に於ける創造性について」

沢 田 誠 二（作家）

## 英 語

言語、言語学、語学教育

福 村 虎治郎（北海道大学教授）

## 家 庭

人間形成の立場がらみた保育

宇 山 銀 子（藤幼稚園園長）

## 農 業

農業教育近代化と新しい教育課程の編成について

松 下 魏 三（文部省職業教育課教科調査官）

## 工 業

工業の教科内容の精選 構造化について

関 口 修（文部省教科調査官）

## 商 業

今後の商業教育のあり方について

二階堂 文 雄（北海川旭川商業高校長）

## 水 産

水産教育の現代化について

真 野 修（北海道大学教授）

## 国語部会

現代国語におけるデス学習・コミュニケーション

授業の提案

小笠原 治 嘉（室啓明）

詩の教材研究—実業高校における実践

佐 藤 健 蔵（函工業）

指導要領と教科書の間隙を埋める一試案

新 開 成 敬（樽桜陽）

現代国語の教科研究—近代俳句を中心に—

川 治 静 信（札啓成）

## 社会部会

## (地 球)

北海道の漁村における過疎問題

前 田 茂（岩内高）

未定 未

佐々木 隆 之（夕南高）

未定

大 西 達 也（浦幌高）

## (日本史)

昭和史をどう指導するか

—戦時体制取り扱いの一例—

武 山 桂 子（旭藤女）

昭和政治史に対する考察

久保田 攻（釧湖陵）

## (世界史)

19世紀近代の世界史像を求めて—グローバルト捉えるための一つの工夫—

古 木 博（稚商工）

19世紀前半のアジア史の展開

板 垣 隆 昭（雄武高）

## (倫 社)

人類愛指導の視点についての一考察—国際理解教育の立場から—

前 田 博 富（室清水）

生徒の道徳性を涵養するにはどうしたらよいか

渡 部 満（三笠高美）

生徒の道徳性を涵養するにはどうしたらよいか

佐 藤 昌（遠軽高）

よく生きることと所謂『道徳』との関連

桜 井 芳 德（瀬棚高）

## (政 経)

国際経済をどう指導するか

田 丸 武 彦（長万部）

- 国際経済をどう指導するか  
三田村 静夫（深川西）
- 数学部会**
- アルゴリズムの取り扱いについて  
今西 義紀（弟子屈）
  - 数学の学習と記号論理  
船場 幸彦（室蘭栄）
  - 季節定時制における数学の学習指導について  
井上上 輝信（中札内）
- 理科部会（化学）**
- 化学のプログラム学習における一考察  
根岸 敏夫（沼田高）
  - 定時制における化学指導について—最低どれだけの内容を指導しなければならないのかー  
沢田 八郎（札幌北代表）
  - 薄層クロマトグラフィによる生徒実験について  
増谷 竜三（樽潮陵）
  - 有機化合物の構造推定について  
高木 幸雄（留辺蘂）
  - 新教育課程の分析と今後のあり方  
藤森 忠雄（札幌東）  
井田 実（札啓成）
- （物理）**
- 気柱共鳴実験における諸考察  
山野 拓二（樽潮陵）
  - 物理II教科書の内容研究  
伊川 広義（寿都高）
  - 慣性モーメントの一展開例  
石塚義郎・須藤喜久男（樽潮陵）
- 保健体育部会（第一分科会）**
- 体操の指導について  
吉田 繁実（網南丘）
  - ライフ・スポーツをめざした選抜種目の授業（女子生徒を対象）—生涯教育の一環としてー  
皆川 澄夫（深川西）  
（第二分科会）
  - 冬期体育授業の取り扱いについて一本校スキー授業の実態からー  
佐藤 尚正（北見北斗）
- 新學習指導要領に基く保健學習内容の一考察  
川上 幸三（札幌南）  
(衛生看護分科会)
- 現場実習における生徒の意識  
開米 八重子（美唄聖華）
- 看護科病院実習における一考察  
田村 陽子（美唄聖華）
- 芸術部会**
- 自発的な創造性を育成するための芸術教育
- 近藤 宣治（帯三条）
- 鑑賞教育の試み**
- 伊藤 光也（伊達高）
  - 未定
  - 奈良 孝哉（滝川高）
- 英語部会**
- 音声教材を中心とした選択英語の実践例  
田畠正男・石井秀夫（札啓成）
  - 新高等学校学習指導要領の実践にあたって  
武川 正明（釧路陵）
  - Some Methodological Problems
  - 英語クラブの指導と実践の一例  
外山 正（東海第四）
- 家庭科部会**
- 保育（家庭一般）における自主学習指導のこころみ  
長谷部 澄子（札啓成）
  - 報告 昭和47年度全国産業教育指導者養成講座
- 家庭部会
- 小河 恵美子（岩見沢西）
  - 星 信子（江別高）
- 農業部会**
- 自作「実験・実習の手引き」利用によって、我校では実験・実習をどのように進めてきたか  
坂野 孝（名寄農）
- H・P学習指導の改善—地域農業の変遷と多様化する生徒の能力を考え、H・P学習の効果を高めるにはどのようにしたらよいかー  
三沢 治（鷹栖農業）
- 工業部会**
- 教育内容の構造化についての考察  
宝金 克成（釧路工）
  - 精密工作実習の構造化から  
小山 国太郎（北見工）
  - 工業高校における専門教科の教育内容の現代化について  
角田 輝康（富良野工）
- 商業部会**
- 第1分科会
- 生徒の興味・関心を喚起するための教材の内容と授業のあり方はいかにあるべきか  
中村 誠二（美唄南）
- 商業一般の指導法について（定時制課程普通科における）  
松永 千里（大成高）
- 商業の機能を生徒に理解させるにはどうしたらよいか（ピート・牛乳の配給経路）  
久保 敏人（中川商）

商業一般において実務的分野をどの程度とり入れて指導するか

高 谷 嘉 浩 (北見北斗)

青 島 繁 (北見北斗)

#### 第2分科会

商業高校における大学進学者の問題点について

田 沢 貢 (札東商)

佐 藤 晃 一 (札東商)

職業高校における進学問題についての一考察

松 岡 晃 (稚商工)

本校における商業科生徒の大学進学の実態とその問題点

石 川 博 (富良野)

本校における進路指導の現状

佐 藤 純 生 (虻田商)

#### 第3分科会

本校における女子教育の実態

工 藤 哲 一 (苦前高)

本校女子生徒の商業科に入学する動機とその過程について

平 岩 重 信 (千歳高)

題目未定

和 泉 伸 明 (帶南商)

佐 渡 義 博 (帶南商)

多 田 直 治 (帶南商)

#### 第4分科会

商業科における電子計算機教育について

長 田 友 秀 (下川高)

黒瀬 明 (下川高)

矢 野 一 成 (下川高)

本校の情報処理教育について

森 下 繁 義 (室蘭商)

商業高校における情報処理教育について

阿 部 照 彦 (旭川商)

高 橋 一 雄 (旭川商)

題目未定

三 浦 秀 雄 (奈商)

#### 水産部会

戸井高校の教育目標設定まで

山 内 正 明 (戸井高)

漁業科における漁業従事者養成対策の経過について

小 西 康 隆 (樽水産)

漁業経営科における総合実習について

小 田 貞 雄 (恵山高)

荻 原 神一郎 (南茅部)

ニューファウンドランド沿岸における1972年度の帆立貝の養殖

伊 藤 一 (厚岸水)

# 研究紀要・研究調査一覧

## 第1号

卷頭言	会長	梶浦 善次
祝辞	道教育長	二本木 実
高校教育の近代化	副会長	大滝与三郎
万葉語〈ねもころ〉の論	札幌旭丘高校	大野 雅然
国文法指導についての一提案	赤平高校	川辺 炳三
芭蕉の指導法	札幌星園高校	野村 一三
「倫理・社会」指導の構想(序論)	名寄高校	宮武 公平
教材としての集合を用いた命題計算		
	歌志内高校	由利 一之
確率、統計の指導に関する小論		
	小樽朝陵高校	豊島 一三
生物教科に於ける定量的実験		
	小樽水産高校	高田 春夫
本校生物科におけるスライド及び8mm使用の現況		
	札幌北高校	橋爪 一夫
光の粒子性と波動性を示す実験		
	俱知安農業高校	斎藤 孝
CHEMS研究(その1)	札幌北高校	越野 清
学校文法はこれでよいのか	札幌北高校	小林 謙一
英語の授業におけるテープレコーダーの利用		
	札幌西高校	佐藤 行敏
保育科の学習指導について	千歳高校	高橋 秋男
	札幌北高校	篠田 ツネ
学庭一般の教科書について	江別高校	支部 黎子
	札幌東高校	細間 しづ
スイスの農業教育	置戸高校	森本 宮幸
簡易床土に関する研究	俱知安農業高校	鈴木 勝司
多数羽養鶏についての一考察	南幌高校	鈴木 幹雄
乳牛多頭飼育について	名寄農業高校	菅沼 修三
商業科に於ける学習指導の近代化		
	小樽緑陵高校	渡辺 羊三
計算機械学習指導に関する一試案		
	小樽緑陵高校	中村 正治
漁村の変容	日高高校	伊藤 久雄

## 第2号

まえがき	会長	梶浦 善次
地域産業との密着を期する総合制高校の運営		
	小清水高校	大滝与三郎
教育課程編成上の問題点	札幌旭丘高校	梅村 茂
国語で何を教えるか	札幌西高校	金箱才止雄
昭和十代の堀辰雄	札幌旭丘高校	杉野 要吉

無名草子作者考	美瑛高校	新井 恒夫
荀子の「中」思想	室蘭栄高校	浅間 敏夫
空中写真実体視の展開	旭川北高校	小宮得久三
バスを利用した地理指導の実践例	札幌南高校	渡辺 英郎
	札幌開成高校	奈良 英夫
数学Iにおける論証の指導について		井原 雄
		佐々木順雄
		金田 岷微
微分方程式の指導	旭川北高校	平田 恒夫
CHEMS研究(その2)	札幌北高校	越野 清
溶融銅合金に於ける酸化皮膜に関する研究	旭川北都商高校	鴨川 昌光
		エゾサンショウウオの卵について
	余市高校	河上 貢
私の研究	札幌西高校	高橋 良助
スポーツテストを中心とした本校生徒の体力・運動能力の現状について	小樽朝陵高校	大滝 文弘
Negative Connection neither……norを中心として	旭川北高校	新妻 英勝
放送利用の授業	遠軽高校	野元 哲浩
農業自営者教育における進路指導	南幌高校	小野 繁夫
		自営者教育における進路指導について
	旭川農業高校	斎藤 忠義
明日のために農業教育	深川農業高校	境 和一
	名寄農業高校	井上 裕司
経営教科における知識技術の再生成過程と態度形成に関する研究	旭川商業高校	吉田 正規
ソビエトの簿記	幕別高校	篠崎 正作
家庭一般の学習指導についての一考察		
	札幌北高校	金田 エミ

## 第3号

卷頭言	会長	梶浦 善次
漢文指導法の一考察	札幌琴似高校	浅間 敏夫
「倫理・社会」におけるリポート指導		
	小樽桜陽高校	梅沢 銘
地方都市における住民の政治意識		
	苫小牧西高校	村上 恒一
季節制定時制教育における世界史指導の実践例		
	芽室高校	阿部 岐
小縮図の学習にあたっての問題点、特にミルカルト図を		

中心として 数Ⅰにおける複素数の導入 物理教育現代化の障害について	札幌旭丘高校 田村 正郎 赤平西高校 吉田 忠 札幌西高校 小林 希謙	技術革新下における工業化学実習指導の一考察 事務機械科、事務管理科の特設と文書実務 函館商高校 宮川 衛
「B S C S 黄版の特色について」N.1 ~ N.48 地学の巡検指導の実践例 音楽の有機的な楽典指導について	函館東高校 沢田 正 札幌南高校 関田 明 札幌西高校 加藤 恒三	法人税費用税に対する批判的考察と法人税の理論的会計 処理法 小樽商業高校 柴田 重則 ソ連の水産教育情報 厚岸水産高校 赤沼 信夫 商業簿記における伝票会計の指導について 函館商高校 小林 宏
アルミニナセメント特にその早強性について タツ工業高校 笹木 敏 ファイリング・システムの一指導法 小樽緑陵高校 古室 傑行 法解釈学への反省 芦別啓南高校 小森 文夫 北洋における水産教育情報 厚岸水産高校 赤沼 信夫 水産の機関設計工作についての教科書創案 厚岸水産高校 赤沼 信夫 ホームプロジェクトと家庭クラブ活動の流れ	札幌東高校 後藤 喜美 札幌東高校 後藤 喜美 Negation (否定)について	私の数学ノート 倶知安高校 林 重一 長歌・短歌指導の一方法 札幌琴似高校 浅間 敏夫 「み吉野の清き河内」 小樽朝陵高校 佐藤 文義 堀辰雄参考文献目録 札幌旭丘高校 杉野 要吉
<b>第4号</b>		<b>第5号</b>
卷頭言 会長 長瀬 米蔵 地域産業の振興をめざす産業教育コンビナート 小清水高校 大滝与三郎 本校に於ける労力向上の基本的問題について	札幌藤女子高校 伊藤 政雄 外国语としての英語教授法 旭川西高校 佐藤 弘	卷頭言 会長 長瀬 米蔵 高等学校における評価の再考察 清里高校 大橋 実 「世界史B」における「主題學習」
札幌啓北商高校 大村 進 技術革新時代の教育と教師の問題についての若干の考察 —その1 札幌西高校 古谷 泉 「国土の開発と保全」の学習指導 白糠高校 富永 慶一 高校地理の学習指導に法則性を—その5	札幌開成高校 前田 武男 小量化学実験について 美唄南高校 青地 巧 地学における野外巡検の諸問題 三笠高校 金野富士男 本道に於ける高校の競泳（水泳）指導	稚内高校 清 弘太郎 「日本史學習における日本人意識の指導について」 喜茂別高校 工藤吉五郎 集合による論証の指導 札幌西高校 大久保明由 理科教育の変遷 札幌工業高校 定塚 定男 高校物理と基礎数学との関連性について 函館中部高校 富田 迪夫 水銀法による食塩水の電気分解
焼尻高校 増木 康郎 腕立転回とその補助方法について	焼尻高校 増木 康郎 「クリスタベル」と「老水夫」に於ける超自然論	小樽朝陵高校 釧路江南高校 植棒 光一 過渡現象について 旭川北高校 柴田 昭 昭和41、42年度入試問題についての一考察
小樽朝陵高校 萩西清一郎 英語の学習とO.H.P. 登別高校 本間 保憲 保育科設置に思う 苫小牧西高校 浅野 安恵 科目「土、肥料」の基礎的知識技術の系統的履修を計る ためにはどの様にしたら良いか	士別高校 小田島慶吾 工業教育における基礎学力としての数学指導とその応用 について 帯広工業高校 東 博通	稚内高校 高橋 哲治 学習指導についての基礎的研究 札幌旭丘高校 在間 弘 桜井 文雄 菅原 道行 竹谷 紀靖 片桐 令子
本校における体育実技の評価について		本校における体育実技の評価について 旭川北高校 遠藤 隆 雅楽の音取 利尻高校 大津山高資 書の造型原理—その構成要素の分析 帯広柏葉高校 長沼 輝夫
A REPORT ON METHODOLOGY		A REPORT ON METHODOLOGY
		札幌西高校 福原 俊明 定時制課程に於ける英語カリキュラム 札幌石山高校 坂本 昭一

家庭経営における住居指導についての一考察 岩見沢西高校 沢井 泰子  
 北海道地方における建設業経営の諸問題 小樽千秋高校 成田 三千穂  
 工業高等学校における卒業論文指導 北海道工業高校 設楽 和夫  
 ブドウ酒ブランダーの試験製造について 芦別工業高校 梅田 茂  
 俄虫、意義鉱床とその鉱石について 夕張工業高校 笹木 敏  
 商業高校の教育課程はいかにあるべきか（第一報） 小樽商業高校 古室 俊夫  
 コンピュータ プログラミング 小樽商業高校 土谷 浩  
 経理科の基礎的学習指導上の諸問題 厚岸潮見高校 原 敬人  
 商業教育の改善とE D P 札幌啓北商高校 中川 健蔵  
 後期中等教育の拡充整備に伴う水産教育（水産製造科） の多様化について 小樽水産高校 水産製造科  
 農業用語と現代表記 名寄農業高校 船尾 疊  
 「西鶴小記」 札幌開成高校 河村袈裟夫  
 古俳句の誤解について 旭川工業高校 藤田 国道  
 教育課程に見る北海道の国語教育の現状 札幌琴似高校 浅間 敏夫

## 第6号

卷頭言 会長 長瀬 米蔵  
 昭和43年度本校生徒の学力の背景 寿都高校 里田 治  
 釧路地方の特性（その1）—釧路地方の馬産について— 釧路江南高校 斉田 武  
 釧路地方の特性（その2）—漁村人口の移動に関する一考察— 釧路江南高校 中村 晨一  
 第1部 世界の農牧業地域学習上の問題点 白糠高校 富水 延一  
 原始宗教について 中札内高校 介谷 泰賢  
 インターナショナリズムとコスモポリタニズムの思想について 苦小牧西校 村上 恒一  
 「世界史B」における「主題學習」—その理論と実践— 稚内高校 清 弘太郎  
 代謝と酵素 北大教授 下村 得治  
 ナフィールド物理セミナーに参加して 啓成高校 陳内 信

格子力学と群論—格子振動の群論による取扱いについて 札幌工業高校 池田 燐修  
 光スイッチの製作と電子計数装置を利用した瞬間速度の測定実験 釧路江南高校 櫻棒 光一  
 中学校における化学的知識の定着度 札幌工業高校 木下 久則

新入生の化学式および化学反応式についての知識診断 札幌工業高校 萩原信一郎  
 高校化学実験書についての一考察 栗山高校 高橋 哲治  
 走り跳指導についての一考察（その2） 函館東高校 小川 智博  
 文献によるペリー箱館遠征研究（函館英学史序） 函館北高校 長谷川誠一  
 学校文法の問題点（その1） 小樽朝陵高校 萩西清一郎  
 James Baldwin論—アメリカ黒人解放運動に於ける彼の社会意識と「もう1つの国」について— 釧路江南高校 桜田 頸  
 LINGUISTIC SCIENCE PLUS FOR THE PRACTICAL FOREIGN-LANGUAGE TEACHER 札幌旭丘高校 岩城 礼三  
 【研究調査】英語学習に於ける語学実験室の利用 札幌旭丘高校 寺島善五郎  
 山崎 滋樹  
 野元 哲浩  
 高等学校古典和歌教材における修辞指導上の問題—懸詞をめぐって— 当別高校 小山 忠弘  
 枇草子類聚段の構造 滝川高校 川上 徳明  
 続解説について—反省と摸索— 札幌開成高校 池田 敬

## 第2部

商業高校における「家庭一般」の指導について 札幌東商業高校 射場二三子  
 高等学校における家庭経済の指導 釧路江南高校 西村 春栄  
 北海道における現行工業高校機械科の教育内容の評価 滝川工業高校 寺谷 広安  
 工業教育における視聴覚的手法の導入ースライド「金山水力発電所の概要」の自作とその活用— 富良野工業高校 角田 輝康  
 本校商業科に於ける女子教育について～今後の女子教育についての一考察～ 様似高校 若山 敏夫  
 加算機の学習指導 芦別商業高校 政田 誠  
 高等学校における税務会計の取扱い 芦別商業高校 板垣 輝治  
 本校における今後の商業教育のあり方について 室蘭商業高校 高橋 豊  
 吉田 肇  
 鈴木健二郎  
 【研究調査】商業高校の教育課程はいかにあるべきか（第二報）—理想案より現実案への移行— 小樽商業高校 古室 俊行  
 胡瓜の雌性花着性に及ぼす植物ホルモン並びに蔗糖の葉面散布の影響 中札内高校 伊藤 捷夫  
 分析機器による食品中の成分の定量 小樽水産高校 石子 博敏

## 第7号

卷頭言 会長 長瀬 米藏  
放送教育（理科・化学）の実践について

函館北高校 西谷 義文  
高等学校における教育相談による学級経営—3カ月のホームルーム実践指導ノートより—

大樹高校 平井 文雄  
進路指導を中心とした客観テストの利用について（その1）客観テストの資料解釈—諸検査の中での性格・行動にクレベリン精神作業検査を用い、学力を中心とした“資料の読み”について—

奈井江高校 竹塙 寿夫  
原始仏教の一考察一併せて親鸞、道元の已証に就て—

小樽商業高校 田中 孝  
フアラデーケージによる静電気量の測定—まさつ電気量の測定— 釧路江南高校 橋本 光一  
原子構造・化学結合の指導について—実践・展開—

札幌工業高校 定塚 定男  
有機化学実験についての一考察 栗山高校 高橋 哲治  
生物の年間指導計画に密着したOHPの活用実践例

奈井江高校 高岡 清  
本校生物科におけるTV教材利用の現況について

遠軽高校 古村 雅彦  
〔研究調査〕北海道の地質構造

札幌旭丘高校 高田 祐幸  
「公衆衛生」の効果的指導についての一考察

栗山高校 狐塙 英隆  
鑑賞の原理 静内高校 足利 晃洋  
Indirect Passiveの限界について

月形高校 後藤 弘  
定時制生徒の学習意識の実態とその一考察—本校の英語学習を通して— 俱知安高校 笹原 勇雄

Two Tiny Pieces On' A Passage to India'-By E.M.Foster 札幌旭丘高校 市川美津子

「英語（B）」に於ける英詩の位置 釧路江南高校 桜田 顯

被服整理における科学的実験 俱知安高校 辰野 純子  
食品のタール色素について 江部乙高校 斎藤しげ子  
農業経営における人的条件の研究

有明高校 佐々木利安  
産業教育実技研修実施報告書

札幌工業高校 山家 理七  
アスファルト実験について—舗装設計を中心に—

室蘭工業高校 柚原 秀明  
〔研究調査〕自動車電装品について(1)（点火回路コンデンサー容量） 幕別高校 島倉 良夫

商業高校の教育課程はいかにあるべきか（第3報）  
—事務科（情報処理科）の新設科目の単元展開—

小樽商業高校 土谷 浩  
古室 俊行

商業高校における情報処理教育

旭川商業高校 川原 泰司  
水産化学学習内容改善についての一考察

小樽水産高校 石子 博敏  
「水産化学」の実践指導に関する実践研究

函館水産高校 工藤 駿一  
再生作文の指導 常呂高校 斎藤 公秀  
故郷の飛鳥はあれど—「はあれど」非反戻の説一  
滝川高校 川上 徳明

## 第8号

卷頭言 会長 磯貝 芳司  
電子計算機NEAC-1210で入学選抜の処理をして

奈井江高校 関 裕  
進路指導を中心として客観テストの利用について（その2）客観テストを活用した指導事例—中規模学校における大学区制下の3カ年間の追跡—

奈井江高校 大浜 康二  
教育相談の校内体制づくりに関する一考察—実践過程を中心にして— 滝川工業高校 寺谷 広安  
「民主主義の基本精神」をどう指導したか

陸別高校 鈴木 英吉  
映像教材を活用した地理学習 札幌南高校 塚本 謙蔵  
新學習指導要領についての一考察

北見北斗高校 中井 宏  
記号論理による論証指導の一試案

栗山高校 長尾 章  
学校柔道における指導法の改善と発展一体捌きの定形化

I— 旭川北高校 片岡 繁雄  
衛生看護科実習（校内および臨床）についての考察

美唄聖華高校 阿部 重広  
Hardy's Tess of the D'Urbervilles 試論(1)

恵庭南高校 高倉 勇雄  
“Teddy.”に見られるJ.D. サリンジャーの東洋思想について

札幌北高校 戸部 大了  
A BRIEF REPORT ON PROJECT APEX—English Education in High Schools in America.

鷹栖高校 坂田 純夫  
ソース類の製造とその検査及びトマト加工品に関する考察

紋別南高校 加藤 洋子  
大気汚染に関する調査について

旭川実業高校 小野 智正  
社会資本と経済成長 深川東高校 猪股 研吾

情報処理教育の推進 小樽商業高校長 友田 義潔  
本校に於ける漁業経営科教育について

恵山高校 阿部 淳三  
中野氏教案抜粋（札幌旭丘高等学校 故中野茂）

札幌西高校 宮下 正恪

- 効果的な生物の指導法（プログラム学習）  
妹背牛商業高校 高岡 清  
海外の高等学校レベル理科教科書について  
札幌南高校 辺見 龍夫  
龍之助と辰雄一堀辰雄の一周辺一  
函館北高校 小見 勉  
新古今小記－新古今和歌集四季部における歌の排列上の  
一問題－ 開成高校 河村袈裟夫  
技術教育に関する一考察－機械実習教育内容を中心に－  
滝川工業高校 影山 利夫  
寺谷 広安  
高等学校学習指導要領（工業管理科）解説書試案  
北海道工業高校 設楽 和夫  
生物教材としてみた函館付近の両生類  
函館西高校 白井 啓  
芦前郡産業発達史覚え書  
道開拓記念館開設準備事務所 関 秀志  
郷土地理学習の意義と教材化 白糠高校 富水 廉一  
作文学習の実態 常呂高校 斎藤 公秀  
国語科読書指導試論－新学習指導要領の実践的展開へ向  
けてのおぼえ書き 札幌啓成高校 獅子原 正  
助詞の指導について－いわゆる同格の助詞と言われる  
「の」を中心に－ 赤平西高校 大川 晴司
- (12) 最近の本校における研修体制と電子計算機の指導  
室蘭商業高校 三上 尚志  
(13) 経営における企業公害について  
深川東高校 村木 正三  
(14) 漂白料の定性と滴定による定量試験に関する研究  
(特に食品に使用される過酸化水素について)  
函館水産高校 工藤 駿一  
(15) 孟子荀子にあらわれた孔子の言行  
札幌琴似高校 浅間 敏夫
- 〔研究調査〕
- (16) 学校経営の近代化を志向して  
芦別商業高校 佐藤 枝郎  
(17) 政治・経済における課題研究学習の実践  
札幌旭丘高校 鈴木 健吉  
(18) 学校実習漁場に於けるマコンブ "Laminaria  
japonica Areschoug." 栽培に関する研究  
恵山高校 阿部 準三  
小田 貞雄  
(19) 工業高校卒業者の職場生活と意識について  
札幌琴似工業高校 清水 茂  
(20) 本校におけるスポーツテストの実態とその活用  
札幌旭丘高校 桜井 文雄  
菅原 道行  
竹谷 紀靖  
片桐 令子  
高橋 勝昭  
田中 玲子

## 第9号

- 卷頭言 会長 磯貝 芳司
- (1) 食品加工科における専門クラブ活動指針に関する考  
察 美唄南高校 牧野 作夫  
(2) 証券資本の国際化について 網走向陽高校 中村 猛  
(3) 学校剣道における指導法についての一考察 本別高校 阿部 英明  
(4) 美術に於ける創造性と鑑賞の一考察 赤平西高校 石川 幸雄  
(5) 英語教授における英語理論の応用 札幌北高校 新岡 利朗  
(6) Absolute Nominateive 研究 月形高校 後藤 弘  
(7) 家庭一般におけるテレビ放送の利用 札幌月寒高校 佐藤 瞳子  
(8) 農業鑑定競技実施上の問題点と改善方法について  
名寄農業高校 坂野 孝  
(9) 作業意志に就いて 室蘭工業高校 小木 国夫  
(10) 未燃分の連続直接測定法についての一考察 旭川実業高校 小野 智正  
(11) 亂数による在庫管理－モンテカルロシミュレーションの一例－ 小樽商業高校 土谷 浩

## 第10号

- 「太宰治小記」－新撰諸国譜と西鶴作品－  
札幌開成高 河村袈裟夫  
三好達治に於ける「水島」の評価について  
札幌開成高 田村 圭司  
思索への誘いとその根拠 鋸路北陽高 中村 清  
集合と演算一日数教実験テキストの実践－  
札幌啓成高 清家 裕雄  
古典的な場の数学的モデルについて－主として応力のテ  
ンソルによる場の分析－ 小樽朝陵高 中村新一郎  
須藤喜久男  
二液の境界線を利用した円形定常波によるボーアの原子  
模型のデモ実験 札幌北高 斎藤 孝  
化学におけるプログラム学習の一考察  
沼田高 根岸 敏夫  
選択化学（新しい化学教育の試みとして）  
札幌西高 渡辺 道夫  
宮下 正恪  
矢数 敬

学校教育全体の中で体力を高める指導

北見柏陽高 前東 昭  
森 理  
鈴木 末子  
西村征四郎  
田村子正美

初心者の水泳学習基本過程に於ける指導上の工夫について  
釧路江南高 治田 賢司

芸術科書道における視聴覚機材の利用一試案・隸書による芸術科書道への導入一 静内高 足利 光洋

APPROACH TO LANGUAGE ACTIVITIES

滝高 富田 博夫  
新指導要領の実施に当って 釧路湖陵高 武川 正明

BEST TEACHING METHOD EVER

ATTAINABLE? 札幌西高 福原 俊明

工業高校における電気実習の教育効率を高めるための一考察 釧路工業高 宮本 輝夫

本校における電子計算機に関する指導について

芦別高 柴田 秀世

50年後の“制御社会”へ向けて! 根室高 三林 尊  
引当金の一考察—商法 287条の2と企業会計原則修正案  
に於ける引当金を中心に— 岩内高 海藤 光一

新教科書、水産衛生の内容について 食

(研究調査) 函館水産高 工藤 駿一

修学旅行地の地理的研究 札幌旭丘高 沼田 武

文久年間幕府御雇米人口蝦夷調査の研究

興部南高 長谷川誠一

## 歴代役員名簿

### 昭和38年度

#### (支 部)

会長 梶浦 善次 (札幌旭丘)  
副会長 村上 正雄 (旭川北)  
" 大滝 与三郎 (札幌北)  
" 川井 信男 (札幌工業)  
監事長 井 一栄 (深川東)  
" 北条 忠 (札幌東)  
" 山崎 英哉 (苦小牧西)

#### (教科部会)

国語部会長 野村 一三 (札幌星園)  
社会 " 萩原 獅郎 (札幌西)  
数学 " 村上 正雄 (旭川北)  
理科 " 小野 謙次 (札幌南)  
保体 " 富田 友治 (札幌北)  
外国語 " 梶浦 善次 (札幌旭丘)  
芸術 " 上田 由宗 (札幌西)  
農業 " 阿部 悟郎 (名寄農業)  
工業 " 本田 茂 (札幌工業)  
商業 " 渡辺 羊三 (稚内商業)  
水産 " 橋上 宗一 (小樽水産)  
家庭 " 細間 しす (札幌東)

札幌支部長 梶浦 善次 (札幌旭丘)  
函館 " 牧野 包敏 (函館中部)

後志 " 中山 二郎 (俱知安農業)  
小樽 " 原田 信夫 (小樽潮陵)  
南空知 " 牧野 徹夫 (岩見沢東)  
北空知 " 滝沢 文武 (滝川工業)

旭川 " 山崎 吉松 (旭川東)  
名寄 " 守屋 敬一 (名寄)  
留萌 " 岩沢 国夫 (留萌)

北見 " 横山 忠義 (北見柏陽)  
釧根 " 安宅 文雄 (釧路商業)  
十勝 " 藤田 武男 (帶広柏葉)

室蘭 " 小野 武生 (室蘭栄)  
苦小牧 " 白岩 教 (苦小牧西)

(事務局)  
局長 成田 勇造 (札幌旭丘)  
総務 大野 雅熙 ( " )

" 岩城 礼三 ( " )  
" 梅村 茂 ( " )  
" 川股 光雄 ( " )

会計 川股 光雄 ( " )  
" 松田 修 ( " )

編 集 富田友治(札幌北)  
 " 河西久男(札幌西)  
 " 池田敬(札幌開成)  
 " 大野雍熙(札幌旭丘)  
 " 梅村茂( " )  
 研究 庄司喜八(札幌南)  
 " 細間しづ(札幌東)  
 " 城昭夫(札幌工業)  
 " 岩城礼三(札幌旭丘)

十勝リ 藤田武男(帯広柏葉)  
 室蘭リ 松山圭彦(室蘭東)  
 苫小牧リ 松本利一(苫小牧西)

(事務局)  
 局長 成田勇造(札幌旭丘)  
 総務 高橋克美( " )  
 " 恒川一道( " )  
 " 岩城礼三( " )  
 " 梅村茂( " )  
 " 大閑光( " )  
 会計 大田修( " )  
 " 松田宗弘(札幌西)  
 編集 富田友治(札幌北)  
 " 鳥谷敬(札幌開成)  
 " 池田茂(札幌旭丘)  
 研究 庄子喜八(札幌南)  
 " 細間しづ(札幌東)  
 " 城昭夫(札幌工業)  
 " 岩城礼三(札幌旭丘)

### 昭和39年度

会長 梶浦善次(札幌旭丘)  
 副会長 村上正雄(旭川北)  
 " 大滝与三郎(小清水)  
 " 川井信男(札幌工業)  
 監事 安達春二(深川東)  
 " 北条忠(札幌東)  
 " 山崎英哉(苫小牧西)

(教科部会)  
 國語部会長 野村一三(札幌星園)  
 社会 " 萩原獅郎(札幌西)  
 数学 " 村上正雄(旭川北)  
 理科 " 小野謙次(札幌南)  
 保体 " 富田友治(札幌北)  
 外国語 " 梶浦善次(札幌旭丘)  
 芸術 " 上田由宗(札幌西)  
 農業 " 金森繁(名寄農業)  
 工業 " 本田茂(小樽千秋)  
 商業 " 渡辺羊三(小樽綠陵)  
 水産 " 橋上宗一(小樽水産)  
 家庭 " 細間しづ(札幌東)

(支部)  
 札幌支部長 梶浦善次(札幌旭丘)  
 函館 " 牧野包敏(函館中部)  
 後志 " 棚橋晃(余市)  
 小樽 " 原田信夫(小樽潮陵)  
 南空知 " 滝田彥之丞(岩見沢西)  
 北空知 " 石金清美(滝川工業)  
 旭川 " 長瀬米蔵(旭川東)  
 名寄 " 守屋敬一(名寄)  
 留萌 " 工藤正雄(留萌)  
 北見 " 横山忠義(北見柏陽)  
 鉾根 " 横田庄八(釧路江南)

### 昭和40年度

会長 梶浦善次(札幌旭丘)  
 副会長 村上正雄(札幌月寒)  
 " 大滝与三郎(小清水)  
 " 川井信男(札幌工業)  
 監事 安達春二(深川東)  
 " 北条忠(和寒)  
 " 山崎英哉(由仁)

(教科部会長)  
 国語 松本利一(苫小牧西)  
 社会 萩原獅郎(函館中部)  
 数学 村上正雄(札幌月寒)  
 理科 山崎吉松(札幌南)  
 保育 富田友治(札幌北)  
 英語 梶浦善次(札幌旭丘)  
 芸術 上田由宗(札幌西)  
 農業 矢口猛(名寄農業)  
 工業 本田茂(小樽千秋)  
 商業 渡辺羊三(小樽綠陵)  
 水産 橋上宗一(小樽水産)

家 庭 細 間 し づ (札幌南)  
 (支 部 長)

札 帆 館	梶 浦 善 次	(札幌旭丘)
函 後 志 樽	萩 原 獅 郎	(函館中部)
小 南 空 知	平 野 貞	(余 市)
北 空 知	原 田 信 夫	(小樽潮陵)
旭 名 留	渡 迈 義 尚	(岩見沢西)
北 空 知	石 金 清 美	(滝川工業)
川 長 漸	瀬 米 蔵	(旭川東)
寄 守 屋	守 敬 一	(名 寄)
見 横 山	細 谷 猛	(羽 帽)
根 横 山	横 忠 義	(北見相陽)
十 勝 藤 田	根 井 源 七	(釧路江南)
室 蘭 松 山	勝 武 男	(帶広柏葉)
苦 小 牧 松 本	勝 利 一	(苫小牧西)

顧 問 梶 浦 善 次  
 (支 部 長)

札 帆 館	梶 浦 善 次	(札幌旭丘)
函 後 志 樽	直 広 竜 一	(函館北)
小 南 空 知	浅 沼 英 三	(岩 内)
北 空 知	牧 野 徹 夫	(小樽桜陽)
旭 留	空 知 川 渡	義 尚 (岩見沢西)
北 空 知	大 笠 岡 田	義 輝 (赤平西)
川 長 漸	細 谷 田	正 次 (旭川東)
寄 守 屋	真 大 福 井	猛 (羽 帽)
見 横 山	寄 見 井	家 (名 寄)
根 横 山	根 勝 田	与 三 郎 (小 清 水)
十 勝 藤 田	勝 田	七 (釧路江南)
室 蘭 松 山	長 尾 之	武 男 (帶広柏葉)
苦 小 牧 松 本	牧 野 兒	之 (苫小牧西)

(教科部会長)

(事務局)

局 長	成 田 勇 造	(札幌旭丘)
局 員	庄 子 喜 八	(札幌南)
"	細 間 し づ	("")
"	高 橋 克 美	(札幌旭丘)
"	恒 川 一 道	("")
"	寺 島 善 五 郎	("")
"	富 田 友 治	(札幌北)
"	鳥 谷 宗 弘	(小樽潮陵)
"	大 関 光	(札幌旭丘)
"	梅 村 茂	("")
"	倉 島 武 德	("")
"	城 昭 夫	(札幌工業)
"	池 田 敬	(札幌開成)
"	岩 城 礼 三	(札幌旭丘)
"	柴 田 雅 美	("")
"	松 田 修	("")

国 社 数 理	語 会 学 科	松 坂 井 上	本 井 一	利 一 (小樽潮陵)
社 学 科	理 保 体 術	村 上 崎 吉	正 雄	(札幌開成)
数 学 科	保 体 術	山 富 田 友	吉 松	(札幌月寒)
理 保 体 術	芸 芸 語	上 長 瀬 田 由	吉 友 治	(札幌南)
保 体 術	英 家 略	瀬 田 由 宗	松 (札幌)	(札幌西)
芸 芸 語	家 農 工 商	米 藏 田 口	藏 (札幌旭丘)	(札幌農業)
英 家 略	農 工 商	農 工 商	寺 岡 二 郎	(札幌琴似工業)
家 農 工 商	工 商	業 業	渡 边 羊 三	(札幌商業)
農 工 商	水 産	業 業	飯 田 穀	(小樽水産)

(事務局)

局 長	成 田 勇 造	(札幌旭丘)
幹 事	大 関 光	("")
"	梅 村 茂	("")
局 員	上 田 晃	(札幌東)
"	本 間 晃	(札幌西)
"	森 本 純 次	(札幌北)
"	上 野 喜 一 郎	(札幌南)
"	細 間 し づ	("")
"	柳 沢 二 郎	("")
"	城 昭 夫	(札幌工業)
"	伊 藤 元 和	("")
"	仁 多 見 嵩	(札幌琴似工業)
"	宗 石 道 夫	(札幌東商業)
"	内 田 淳 一	(札幌啓成)

昭和41年度

会 長	長 濱 米 蔵	(札幌旭丘)
副 会 長	村 上 正 雄	(札幌月寒)
"	大 滝 与 三 郎	(小 清 水)
"	川 井 信 男	(札幌工業)
監 事	安 達 春 二	(深川東)
"	北 条 忠	(和 寒)
"	山 崎 英 哉	(由 仁)

"	盛 合 力	(札幌開成)		数 学	村 上 正 雄	(札幌月寒)
"	池 田 敬	( " )		科 学	牧 野 徹	夫(札幌南)
"	堤 俊 憲	(札幌旭丘)		保 体	川 田 正 德	(札幌北)
"	神 田 昭	( " )		芸 術	上 田 由 宗	(札幌西)
"	岩 城 礼 三	( " )		英 語	長 濱 米 藏	(札幌旭丘)
"	柴 田 雅 美	( " )		家 庭	齋 藤 栄 一	(札幌南)
"	寺 島 善 五 郎	( " )		農 業	黒 沢 力 太 郎	(酪農學園)
"	田 村 正 郎	( " )		工 業	寺 岡 二 郎	(札幌琴似工業)
"	杉 野 要 吉	( " )		商 業	島 田 重 德	(小樽商業)
"	松 井 敢 二	( " )		水 産	飯 田 毅	(小樽水產)
"	綾 井 健 二	( " )				
"	倉 島 武 德	( " )				
"	山 崎 節 子	( " )		(事務局) 局 長	大 塚 正 次	(札幌旭丘)
"	伊 藤 隆 喜	( " )		次 長	堤 俊 憲	( " )
"	松 田 修	( " )		幹 事	大 関 光	( " )
				"	梅 村 茂	( " )
				局 員	上 田 晃	(札幌東)
				"	梶 谷 幸 夫	(札幌西)
				"	橋 瓜 一 夫	(札幌北)
				"	岩 佐 俊 郎	(札幌琴似工業)
				"	内 田 淳 一	(札幌啓北)
				"	川 島 正 彬	(札幌開成)
				"	神 田 昭	(札幌旭丘)
監 事	横 川 義 雄	(札幌東商業)		"	柴 田 雅 美	( " )
"	北 条 忠 (和 寒)			"	高 田 裕 幸	( " )
"	山 崎 英 哉 (由 仁)			"	尾 崎 弘 樹	( " )
顧 問	梶 浦 善 次	(北星学園大)		"	吉 田 功	( " )
(支 部 長)				"	奥 村 哲 也	(札幌西)
札 哥	上 野 秋 造	(札幌北)		"	細 間 し づ	(札幌南)
函 館	廣 濱 竜 一	(函館北)		"	森 本 純 次	(札幌北)
後 志	浅 沼 英 三 (岩 内)			"	池 田 敬	(札幌開成)
小 樽	山 本 彦 一 (小樽桜陽)			"	城 昭 夫	(札幌工業)
南 空	知 林 信 義 (岩見沢西)			"	今 西 義 紀	(札幌開成)
北 空	知 前 田 忠 雄 (赤平西)			"	関 谷 清 邦	(札幌旭丘)
旭 川	笠 岡 正 次 (旭川東)			"	寺 島 善 五 郎	( " )
留 萌	虎 谷 勇 作 (羽 哥)			"	岩 田 亨 子	( " )
名 寄	真 田 幸 家 (名 寄)			"	松 井 敢 二	( " )
北 刈	見 大 滉 与 三 郎 (小 清 水)			"	山 崎 節 子	( " )
釧 根	福 井 源 七 (釧路江南)			"	本 間 晃	(札幌西)
十 勝	中 村 初 男 (帶広南商業)			"	迈 見 竜 夫	(札幌南)
苦 小 牧	長 尾 之 児 (苦小牧西)			"	真 田 清 臣	(札幌北)
室 蘭	川 田 正 德 (室蘭清水丘)			"	石 川 哲 朗	(札幌開成)
(教科部会長)				"	泉 谷 宏	(札幌琴似工業)
国 語	松 本 利 一 (小樽潮陵)			"	水 谷 浩	(札幌開成)
社 会	坂 井 一 郎 (札幌開成)			"	岩 城 札 三	(札幌旭丘)

## 昭和42年度

会 長	長 濱 米 藏	(札幌旭丘)	"			
副 会 長	村 上 正 雄	(札幌月寒)	"			
"	小 黒 淳 達	(札幌南)	"			
"	川 井 信 男	(札幌工業)	"			
監 事	横 川 義 雄	(札幌東商業)	"			
"	北 条 忠 (和 寒)		"			
"	山 崎 英 哉 (由 仁)		"			
顧 問	梶 浦 善 次	(北星学園大)	"			
(支 部 長)			"			
札 哥	上 野 秋 造	(札幌北)	"			
函 館	廣 濱 竜 一	(函館北)	"			
後 志	浅 沼 英 三 (岩 内)		"			
小 樽	山 本 彦 一 (小樽桜陽)		"			
南 空	知 林 信 義 (岩見沢西)		"			
北 空	知 前 田 忠 雄 (赤平西)		"			
旭 川	笠 岡 正 次 (旭川東)		"			
留 萌	虎 谷 勇 作 (羽 哥)		"			
名 寄	真 田 幸 家 (名 寄)		"			
北 刈	見 大 滉 与 三 郎 (小 清 水)		"			
釧 根	福 井 源 七 (釧路江南)		"			
十 勝	中 村 初 男 (帶広南商業)		"			
苦 小 牧	長 尾 之 児 (苦小牧西)		"			
室 蘭	川 田 正 德 (室蘭清水丘)		"			
(教科部会長)			"			
国 語	松 本 利 一 (小樽潮陵)		"			
社 会	坂 井 一 郎 (札幌開成)		"			

"	田 村 正 郎 ( "	(本部事務局)
"	菅 原 道 行 ( "	局 長 大 塚 正 次 (札幌旭丘)
"	綾 井 健 二 ( "	局 次 長 島 田 善 造 ( "
"	池 田 敬 (札幌開成)	幹 事 神 田 昭 ( "
		" 事 大 岩 城 光 ( "
		" 事 寺 島 礼 三 ( "
		幹 事 関 谷 清 邦 (札幌旭丘)
		" 員 沢 田 正 己 ( "
		" 員 高 田 裕 幸 ( "
"	小 黒 淳 達 (札幌南)	" 員 野 元 哲 浩 ( "
"	川 井 信 男 (札幌工業)	" 員 綾 井 健 二 ( "
監 事	横 川 義 雄 (旭川商業)	" 員 伊 藤 隆 喜 ( "
"	北 条 忠 (釧路江南)	" 員 豊 島 一 文 雄 ( "
"	山 崎 英 哉 (由 仁)	" 員 桜 井 享 弘 ( "
顧 問	梶 浦 善 次 (北星学園大)	" 員 岩 田 崎 树 ( "
(支 部 長)		" 員 尾 吉 田 功 ( "
札 哥	上 野 秋 造 (札幌北)	" 員 松 田 修 ( "
函 館	小 島 朝 慎 (函館北)	" 員 柴 田 雅 美 ( "
後 志	内 田 諒 (俱知安)	" 員 田 村 正 郎 ( "
小 樽	山 本 彦 一 (小樽桜陽)	" 員 普 原 道 行 ( "
南 空	西 山 勝 (栗 山)	" 員 松 井 敏 二 ( "
北 空	相 沢 健 一 (芦別商業)	" 員 山 崎 節 子 ( "
旭 川	深 田 賢 正 (旭川北)	
留 名	萌 虎 谷 勇 作 (羽 哥)	
見 寄	神 枝 之 助 (名 寄)	
北 刈	牧 野 賢 良 (遠 軽)	
十 九	根 佐 藤 健 作 (釧路工業)	
小 牧	勝 山 口 賢 三 (帶広南商業)	
室 蘭	長 尾 之 児 (苫小牧西)	
(教科部会長)	川 田 正 德 (室蘭清水丘)	
国 語	松 本 利 一 (小樽潮陵)	会 長 長 濱 米 蔵 (札幌旭丘)
社 会	磯 貝 芳 司 (札幌開成)	副 会 長 村 上 正 雄 (岩見沢東)
数 学	上 野 秋 造 (札幌北)	" 員 小 黒 淳 達 (札幌南)
理 科	牧 野 徹 夫 (札幌南)	" 員 川 井 信 男 (札幌工業)
保 体	川 田 正 德 (室蘭清水丘)	監 事 横 川 義 雄 (旭川商業)
芸 術	上 田 由 宗 (札幌西)	" 員 北 条 忠 (釧路江南)
英 家	長 濱 米 蔵 (札幌旭丘)	" 員 山 崎 英 哉 (由 仁)
農 業	坂 本 勇 (美唄南)	顧 問 梶 浦 善 次 (北星学園大)
工 業	黒 沢 力 太 郎 (酪農学園機農)	(支 部 長)
商 業	寺 岡 二 郎 (札幌琴似工業)	札 哥 上 野 秋 造 (札幌北)
水 産	島 田 重 徳 (小樽商業)	函 館 小 島 朝 慎 (函館北)
	飯 田 稲 (小樽水産)	後 志 内 田 諒 (俱知安)
		小 南 空 山 本 彦 一 (小樽桜陽)
		空 知 西 山 勝 (栗 山)

### 昭和43年度

会 長	長 濱 米 蔵 (札幌旭丘)
副 会 長	村 上 正 雄 (岩見沢東)
"	小 黒 淳 達 (札幌南)
"	川 井 信 男 (札幌工業)
監 事	横 川 義 雄 (旭川商業)
"	北 条 忠 (釧路江南)
"	山 崎 英 哉 (由 仁)
顧 問	梶 浦 善 次 (北星学園大)
(支 部 長)	
札 哥	上 野 秋 造 (札幌北)
函 館	小 島 朝 慎 (函館北)
後 志	内 田 諒 (俱知安)
小 樽	山 本 彦 一 (小樽桜陽)
南 空	西 山 勝 (栗 山)
北 空	相 沢 健 一 (芦別商業)
旭 川	深 田 賢 正 (旭川北)
留 名	萌 虎 谷 勇 作 (羽 哥)
見 寄	神 枝 之 助 (名 寄)
北 刈	牧 野 賢 良 (遠 軽)
十 九	根 佐 藤 健 作 (釧路工業)
小 牧	勝 山 口 賢 三 (帶広南商業)
室 蘭	長 尾 之 児 (苫小牧西)
(教科部会長)	川 田 正 德 (室蘭清水丘)
国 語	松 本 利 一 (小樽潮陵)
社 会	磯 貝 芳 司 (札幌開成)
数 学	上 野 秋 造 (札幌北)
理 科	牧 野 徹 夫 (札幌南)
保 体	川 田 正 德 (室蘭清水丘)
芸 術	上 田 由 宗 (札幌西)
英 家	長 濱 米 蔵 (札幌旭丘)
農 業	坂 本 勇 (美唄南)
工 業	黒 沢 力 太 郎 (酪農学園機農)
商 業	寺 岡 二 郎 (札幌琴似工業)
水 産	島 田 重 徳 (小樽商業)
	飯 田 稲 (小樽水産)

### 昭和44年度

会 長	長 濱 米 蔵 (札幌旭丘)
副 会 長	村 上 正 雄 (岩見沢東)
"	小 黒 淳 達 (札幌南)
"	川 井 信 男 (札幌工業)
監 事	横 川 義 雄 (旭川商業)
"	北 条 忠 (釧路江南)
"	山 崎 英 哉 (由 仁)
顧 問	梶 浦 善 次 (北星学園大)
(支 部 長)	
札 哥	上 野 秋 造 (札幌北)
函 館	小 島 朝 慎 (函館北)
後 志	内 田 諒 (俱知安)
小 南	山 本 彦 一 (小樽桜陽)
空 知	西 山 勝 (栗 山)

北	空	知	相	沢	健	一	(芦別商業)	"	菅	原	道	行	(	"	)
旭	川	深	田	賢	正	(旭川北)	"	松	井	道	敢	二	(	"	)
留	萌	虎	谷	勇	作	(羽幌)	"	山	崎	節	子	(	"	)	
名	寄	神	柾	之助	(名寄)										
北	見	牧	野	賢	良	(遠軽)									
釧	根	佐	藤	健	作	(釧路工業)									
十	勝	山	口	賢	三	(帶広南商業)	札	幌	藤	田	保	彦	(札幌北)		
苦	小	牧	長	尾	之	(苦小牧西)	函	館	井	上	誠	也	(函館北)		
室	蘭	川	田	正	徳	(室蘭清水丘)	後	志	岡	田	貞	幸	(俱知安)		
(教科部長)							小	梅	松	浦	宏	一	(小樽桜陽)		
国	語	松	本	利	一	(小樽潮陵)	南	空	角	野	毅	(栗山)			
社	会	磯	貝	芳	司	(札幌開成)	北	空	五十嵐	正	義	(芦別)			
数	学科	上	野	秋	造	(札幌北)	旭	川	伊藤	進	(旭川北)				
理	学科	牧	野	徹	夫	(札幌南)	"		遠藤	隆	(	"	)		
保	体	川	田	正	徳	(室蘭清水丘)	"		五十嵐	正	(	"	)		
芸	術	上	田	由	宗	(札幌西)	留	萌	石	田	一雄	(羽幌)			
英	語	長	瀬	米	藏	(札幌旭丘)	"		日影	吾	(	"	)		
家	庭	坂	本	勇	美	(唄南)	名	寄	山	一憲	(名寄)				
農	業	黒	沢	力	太郎	(酪農学園機農)	"		高岡	信夫	(	"	)		
工	業	寺	岡	二	郎	(札幌琴似工業)	北	釧	見	十河	巖	(遠軽)			
商	業	島	田	重	徳	(小樽商業)	釧	根	吉	吉田	保	(釧路工業)			
水	産	飯	田	穀	(小樽水産)	"		十苦室	吉	吉田	綱	(			

(本部事務局)

局	長	塙	正	次	(札幌旭丘)
局	長	島	善	造	( )
幹	事	神	五郎	昭	( )
		大	禮	光	( )
		岩	善	三	( )
局	員	寺	清	雄	( )
		関	正	子	( )
		沢	裕	樹	( )
		高	哲	功	( )
		野	健	修	( )
		綾	隆	美	( )
		伊	一	郎	( )
		豊	文	雅	( )
		桜	享	正	( )
		岩	弘		
		尾			
		吉			
		松			
		柴			
		田			

昭和45年度

会長磯貝芳司(札幌旭丘)

副会長	村上正雄(札幌南)	"	神田昭(会員名簿)
"	平野謹三(札幌月寒)	"	伊藤喜(会計)
"	川井信雄(札幌工業)	局員	閑谷清邦(札幌旭丘)
監事	二階堂文雄(旭川商業)	"	稲田亮一(〃)
"	山崎英哉(札幌東商業)	"	高田裕幸(〃)
"	北条忠(釧路江南)	"	野元哲浩(〃)
顧問	梶浦善次(静修大)	"	綾井健二(〃)
"	長瀬米蔵(道女子短大)	"	細田弘(〃)
(地区支部長)			
札幌	長浜英作(札幌北)	"	桜井文雄(〃)
函館	長尾之児(函館西)	"	岩田享弘(〃)
後志	清水小十(俱知安農業)	"	尾崎樹功(〃)
小樽	林信義(小樽桜陽)	"	吉田英美(〃)
南北空	知町田敬治(栗山)	"	武藤雅正(〃)
南北空	知松田正幸(芦別)	"	柴田正郎(〃)
旭川	大野義輝(旭川西)	"	菅原道行(〃)
留名	崩正津富男(増毛)	"	松井敢二(〃)
北見	寄高山秀丸(名寄)	"	山崎節子(〃)
釧路	吉木昇(遠軽)	(事務担当者)	
十勝	根西山勝(芽室)	(地区支部)	
苦室	牧松下源太郎(苦小牧西)	札幌	藤田保彦(札幌北)
	蘭棚橋晃(登別)	函館	春日保保(函館西)
(教科部会長)			
国社理	語林村上正雄(札幌南)	小樽	志大新(俱知安農業)
数保芸	会科学斎藤国夫(札幌啓成)	南北空	橋尾昭夫(小樽桜陽)
家農工	體育川田正徳(室蘭清水丘)	旭川	橋深彰(栗山)
商水	體育上田由宗(札幌西)	留名	橋在弘(芦別)
	語磯貝芳司(札幌旭丘)	名寄	橋昌久(旭川西)
	庭直木通(札幌西)	釧路	橋奈季(増毛)
	農業寺岡二郎(札幌琴似工業)	十勝	橋良山勇(名寄)
	工業友田義潔(小樽商業)	苦室	橋河茂季(遠軽)
	水産飯田毅(小樽水産)	(教科部会)	橋田網(釧路工業)
		国語	橋赤一(芽室)
		社会	橋前田保(苦小牧西)
		数学	橋前田雄(登別)
(事務担当者)			
局長	大塚正次	理科	橋克男(札幌旭丘)
局次長	島田善造(庶務担当)	地理	橋前田武彦(札幌北)
"	大閑光(会計担当)	保育	橋田見竜夫(札幌南)
幹事	寺島善五郎(庶務)	体術	橋井文雄(札幌旭丘)
"	沢田正己(研究物)	英語	橋滝井光郎(〃)
"	豊島一三(研究調査)	家庭	橋島善五郎(〃)
		家庭	橋野哲浩(〃)
		家庭	橋田ツネ(札幌西)

"	藤森敏子( "	水産	斎藤一郎(小樽水産)
農業	五十嵐令七(酪農学園機農)		
工業	大村正道(札幌琴似工業)		
商業	境富男(小樽商業)	(本部事務局)	
水産	野村雅夫(小樽水産)	局長	豊島一三

### 昭和46年度

会長	磯貝芳司(札幌旭丘)
副会長	斎藤実(札幌南)
"	川井信雄(札幌工業)
"	藤田保彦(札幌北)
監事	二階堂文雄(旭川商業)
"	北条忠(釧路江南)
"	山崎英哉(札幌東商業)
顧問	梶浦善次(静修大)
"	長瀬米蔵(道女子短大)

#### (地区支部長)

札幌	大塚正次(札幌星園)
函館	石橋莊吉(函館西)
後志	清水小十(俱知安農業)
小樽	長尾之兒(小樽桜陽)
南北空知	町田敬治(栗山)
南北空知	高橋菊男(芦別)
旭川	大野義輝(旭川西)
留名	萌木新造(増毛)
寄見	高山秀丸(名寄)
北鉄	吉本昇(遠軽)
十勝	西山勝(芽室)
苦室	小牧加藤重雄(苦小牧西)
蘭	蘭棚橋晃(登別)

#### (教科部会長)

国語	笠岡正次(札幌開成)
社会	樋浦浩(江別)
数学	斎藤国夫(札幌啓成)
理科	斎藤実(札幌南)
保育芸術	木村隆一(恵庭南)
英語	千葉正信(福島商業)
家庭	直木通(札幌西)
農業	直木通(札幌西)
工業	福井敏夫(旭川農業)
商業	中神肇(札幌琴似工業)
	友田義潔(小樽商業)

#### (本部事務局)

局長	豊島一三
局次長	神田昭(地区支部担当)

"	寺島善五郎(教科部会担当)
---	---------------

"	大閑光(会計担当)
---	-----------

幹事	野元哲浩(庶務部)
----	-----------

"	田村正郎(研究部)
---	-----------

"	沢田正己(編集部)
---	-----------

"	桜井文雄(組織部)
---	-----------

局員	大閑光(会計部)
----	----------

"	高田裕幸(札幌旭丘)
---	------------

"	松井敢二( " )
---	-----------

"	岩田享子( " )
---	-----------

"	片桐令子( " )
---	-----------

"	武藤英子( " )
---	-----------

"	菅原道行( " )
---	-----------

"	酒井皓( " )
---	----------

"	閑谷清邦( " )
---	-----------

"	西田裕( " )
---	----------

"	柴田雅美( " )
---	-----------

"	細田康弘( " )
---	-----------

"	綾井健二( " )
---	-----------

"	松田五郎( " )
---	-----------

"	稻田亮一( " )
---	-----------

"	菅野彥( " )
---	----------

"	森田太郎( " )
---	-----------

"	吉田功( " )
---	----------

"	尾崎弘樹( " )
---	-----------

"	竹谷紀靖( " )
---	-----------

"	山崎節子( " )
---	-----------

"	斎藤文明( " )
---	-----------

"	山田渥子( " )
---	-----------

"	小林雄一( " )
---	-----------

#### (事務担当者)

#### (地区支部)

札幌	幌村上元治(札幌星園)
----	-------------

函館	館春日保(函館西)
----	-----------

後志	志大橋健造(俱知安農業)
----	--------------

小樽	樽上田二三生(小樽桜陽)
----	--------------

南北空知	空尾山彰(栗山)
------	----------

南北空知	南北在間弘(芦別)
------	-----------

旭	川	木	村	卓	爾 (旭川西)	釧	根	北	条	忠 (釧路江南)
留	崩	高	橋	久	志 (増毛)	十	勝	西	山	勝 (茅室)
名	寄	秋	山	茂	夫 (名寄)	胆	振	佐	藤	作 (苦小牧工業)
北	見	十	河	巖	遠 軽)	日	高	今	井	敏夫 (様似商業)
釧	根	吉	田	保	綱 (釧路工業)			(教科部会長)		
十	勝	赤	塚	一	夫 (茅室)	国	語	笠	岡	正次 (札幌開成)
苦	小	牧	三	浦	隆 儀 (苦小牧西)	社	会	細	細	猛 (札幌南)
室	蘭	高	橋	俊	雄 (登別)	数	学	斎	谷	夫 (札幌啓成)
	(教科部会)					理	科	武	藤	三 (札幌西)
国	語	上	西	和	喜雄 (札幌開成)	保	体	木	国	一 (函館北)
社	会	村	上	恒	一 (札幌東)	芸	術	千	隆	信 (福島商業)
"		池	田	俊	二 ("")	英	語	武	正	三 (札幌西)
数	学科	北	隅	嘉	長 (札幌北)	家	庭	川	省	ト卜 (札幌東)
理	保	辺	見	竜	夫 (札幌南)	農	業	清	原	小十 (俱知安農業)
芸	芸	狐	塚	英	隆 (恵庭南)	工	業	中	水	肇 (札幌琴似工業)
英	英	滝	沢	光	郎 (札幌旭丘)	商	業	友	神	潔 (小樽商業)
家	家	丹	治	幹	衛 (札幌西)	水	產	斎	田	一郎 (小樽水産)
農	農	篠	田	ツ	ネ ("")			藤	藤	
工	工	善	野	信	夫 (旭川農業)					
商	商	大	村	正	道 (札幌琴似工業)					
水	水	境	村	富	夫 (小樽商業)					
		野	村	雅	夫 (小樽水産)					

## 昭和47年度

会長	磯貝芳司	(札幌旭丘)	会長	磯貝芳司	(札幌旭丘)	副会長	細谷猛	(札幌南)	副会長	細谷猛	(札幌南)
"	川井信雄	(札幌工業)	"	川井信雄	(札幌工業)	"	内田淳一	(江別)	"	内田淳一	(江別)
監事	刀野清輝	(札幌啓北商業)	監事	刀野清輝	(札幌啓北商業)	"	成田勇造	(岩見沢東)	"	成田勇造	(岩見沢東)
"	佐藤晃一	(札幌東商業)	"	佐藤晃一	(札幌東商業)	"	柳田敬治	(栗山)	"	柳田敬治	(栗山)
顧問	梶浦善次	(道女子短大)	顧問	梶浦善次	(道女子短大)	"	長瀬米蔵	("")	"	長瀬米蔵	("")
(地区支部長)			(地区支部長)								
石道	狩本間末五郎	(札幌北陵)	石道	狩本間末五郎	(札幌北陵)	南志	横田淳一	(函館東)	南志	横田淳一	(函館東)
後	志柳川重男	(俱知安)	後	志柳川重男	(俱知安)	空知	柳川重男	(俱知安)	空知	柳川重男	(俱知安)
南北	空知町田敬治	(栗山)	南北	空知町田敬治	(栗山)	上川	二階堂文雄	(旭川商業)	上川	二階堂文雄	(旭川商業)
空	空知谷川伸	(砂川北)	空	空知谷川伸	(砂川北)	留宗	横田淳一	(函館東)	留宗	横田淳一	(函館東)
上	上川二階堂文雄	(旭川商業)	上	上川二階堂文雄	(旭川商業)	宗網	柳川重男	(俱知安)	宗網	柳川重男	(俱知安)
留	留宗柳川重男	(俱知安)	留	留宗柳川重男	(俱知安)	網	柳川重男	(俱知安)	網	柳川重男	(俱知安)
宗	宗網柳川重男	(俱知安)	宗	宗網柳川重男	(俱知安)	網	柳川重男	(俱知安)	網	柳川重男	(俱知安)
網	網柳川重男	(俱知安)	網	網柳川重男	(俱知安)						

工 業 清 水 茂 (札幌琴似工業) 水 産 野 村 雅 夫 (小樽水産)  
 商 業 小山内 養市郎 (小樽商業)

## 〈昭和47年度〉北海道高等学校教育研究会本部事務局組織



## 北海道高等学校教育研究会会則

### 第1章 総 则

第1条 (名称) 本会は北海道高等学校教育研究会とい

う。

第2条 (事務局) 本会の事務局は会長の所属校に置く。

### 第2章 目的および事業

第3条 (目的) 本会は高等学校の各教科などに関する

事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ

高等学校教育の振興を図ることを目的とする。

第17条（会計年度）この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌3月31日に終る。

付 則 本則は昭和38年5月25日より施行する。

第4条（事業）本会は前条の目的を達成するため次の事業を行なう。

1. 研究会の開催
2. 講習会、講演会の開催
3. 機関紙の発行
4. その他本会の目的達成に必要と認められる事業

### 第3章 組織および役員

第5条（会員）本会の会員は北海道高等学校職員、教育委員会職員および高等学校教育に関心を有するものをもって構成し、一人一部会とする。

第6条（教科部会）第4条の事業を遂行するために教科部会を置く。この部会の運営は別に定める。

第7条（地区支部）地区支部は北海道高等学校長協会の支部単位とする。この部会の運営は別に定める。

第8条（所員）本会に次の役員を置く。

1. 会長 1人
2. 副会長 3人
3. 監事 3人
4. 地区支部長 若干人
5. 教科部会長 若干人
6. 顧問

第9条（役員の選任）会長、副会長および監事は教科

部会長および地区支部長により選任し、顧問は推薦することがある。

1. 教科部会長は各教科の部会から1人を選任する。
2. 地区支部長は各地区ごとに1人を選任する。

第10条（会長、副会長の職務権限）会長は本会を代表し、会務を統括し、会の責任を負う。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

第11条（教科部会長の職務権限）教科部会長は各部会を代表する。

第12条（地区支部長の職務権限）地区支部長は各地区を代表する。

第13条（監事の職務権限）監事は本会の業務、会計を監査する。

第14条（役員の任期）役員の任期は2年とする。ただし重任することができる。

第15条（役員会）役員会は毎年1回定期に行ない会長が召集する。ただし必要に応じ臨機に開催することができる。役員会に付議する事項は次の通りとする。

1. 予算および決算
2. 会則の変更
3. その他重要事項

第16条（経費）この会の経費は会員の納める会費およびその他の収入をもってこれに当てる。会費の徴収細則は別に定める。

# 本部事務局のあゆみ

かつて本研究会が「旭丘教研」と俗称で呼ばれた時代があつて、それを忘れてしまった人も多いが、現在文字通り北海道高等学校教育研究会として立派に成長した。しかし、本部事務局に関しては「旭丘」と密接な関係があつたことをはつきり物語っている。昭和38年桃浦校長が会長に選任され、事務局が旭丘高校におかれて成田教頭を中心として事務を執行して以来、2代目会長長瀬、3代目会長磯貝両先生を補佐して、2代目局長大塚、3代目局長豊島両先生の指揮の下、殆んど全校あげて10年間この研究会の運営に全力を尽して来たと言える。設立当時会長局長を助けて中心となっていた事務局員は、大野、岩城、梅村、川股、松田（以上旭丘）、富田（札北）河西（札西）、池田（札開成）、庄司（札南）、細間（札東）、城（札工）の諸先生であるが、その後、高橋、恒川（旭丘）、鳥谷（札西）、寺島、柴田（旭丘）と組織と会員の増大に伴って多少の入れ変りがあるが、事務局次長に堤、島田、神田（旭丘）と次長制をとるようになると、本部事務局は旭丘だけで構成し、教科部会、地区支部に部長の他に事務担当者をおくように組織を改革し、次第に大きくなる研究会の運営に備えた。更にかけて旭丘には札幌地区支部の事務局をもちその他教科部会でも国語、数学、芸術、家庭、英語の事務局があつたが、次第に本部事務局の業務と両立が難しくなると市内の各高等学校に教科の事務局を分担して戴き、現在では芸術部会のみを残すだけで、旭丘高校では本部事務局が中心となつてゐる。

昭和44年度より事務局の組織がはつきり庶務、研究、

研究調査、会員名簿、会計と業務を分担し、更に昭和46年度より機構も部制にし、庶務部、研究部、編集部、組織部、会計部とし、昭和47年度には10周年にそなえて記念事業部を臨設した。この間、文字通り3代の会長に仕え、3代の事務局長を補佐し、乏しい予算で高校研の台所のきりもりしていた大閑光先生（札旭丘事務長）の手腕と献身的な奉仕に対しては深く敬意を表さなければならぬ。特に昭和44年7月会計監査院による監査が行なわれた際、目的に応じた予算の正しい使い方と、諸帳簿の管理の正確さに担当係官が賞讃する程であった。その他、本部事務局、庶務部野元、研究部閑谷、田村、柴田、編集部沢田、組織部桜井の諸兄は、多忙な校務の中で実際の業務を処理する力が高く評価されている。このように充分活動出来たのは、旭丘高校全体の「挙校体制」にあったればこそで、この10年間事務職員、公務補、事務生の方々に至るまで殆んど全員の協力によって研究大会の準備が進められていたのである。

事務局交替も、会長交替の度に大きい話題になりながらも実現されなかつたが、一部の人々にぎせい的な奉仕に依存している前近代的な研究会の体質改善が真剣に望まれている現在、この10周年を期に事務局の交替を含めて考えなければならないことが多々ある。

1. 事務局をこのままにして良いのか。交替するとしたら、どんな方法がよいのか。
2. 事務局の構成はこれで良いのか。
3. 専従職員を置く余地はないのか。或いは事務局費を大幅に増して抜本的な省力化を出来ないのか。

（寺島善五郎 記）

## 【庶務部】

### 事務局歳時記

新しい1年生が入ってきて、学舎に清新なざわめきが満つところ、事務局も新年度の仕事が始まる。

スタートは役員改選依頼である。今年は校長協会の地区支部の組織・名称に変更があつてなかなか返事がもどつて来なかつた。

会員の加入登録依頼は例年5月初旬の全道高校長会にあわせて準備をしなければならない。必要書類を作成

袋詰めして校長会の事務局校まで運び、配布方を依頼する。2、3日後欠席した学校をリストアップして、関係教委、研究所分と併せて郵送する。

5月下旬になると事務局会議をもつて第1回役員会の案内、議案書作成の仕事が続く。この役員会で新しい役員、事務局が承認されるわけであるが、事務局はすでにその仕事を始めていなければならないことになるのである。それはともかく、年間行事予定、予算等を審議してもらい、各種書類、資料の提出をお願いするのであるが、

これが集まらない。

この会議の決定と諸資料にもとづいて会報の編集が始まられ、7月上旬には発送されるこの頃には全体講師を内定すべく会長、事務局長は東奔西走である。

夏休みがあけると学校祭の準備で忙しい空気の中で第2回員会、事務担当者会議の準備をすすめていく。研究大会全体集会・教科別集会の日程・会場・講師・運営方法を検討してもらい、会員登録数の集約もしなければならない。会員登録の流れが、各学校→地区支部→本部事務局→教科部会と多少なりともスムーズになったのはようやくこの頃である。

10月に入るといよいよ仕事の波が押し寄せてくる。諸係、役員委嘱状・同派遣依頼状・大会後援依頼状・講師委嘱状・同派遣依頼状大会案内の編集印刷・参加申込書・参加証等枚挙にいとまがない。しかもこれらを大会案内は別として他はすべてタイプ・印刷を全部事務でやっていたのである。

この袋詰めがまた大変である。全定の区別、札幌周辺かその他の地区か、会員登録数の概数、地区支部教科部会の事務局校、各研究所、教育委員会等の角度から内容物の種類と部数を決めなければならない。その組合せが単純でないからである。大規模校に数を合わせるといくら印刷しても間に合わないし、郵送料・印刷代がどんどんないものになる。かと言つて平均1校何部という訳にもいかない。しかし、下手にけちったりすると全道のあちこちから電話がかかってきて、かえつて時間・手間・お金の無駄になる。そのために、地区支部に若干の予備をお送りしてあるのだが、高教研というと旭丘というイメージが先に働くらしい。

11月になると紀要論文の督促、道教委公報、道教委だよりの掲載依頼、それに広告集め。広告は現在では大口だけにしほっているが数年前までは事務局長が先頭に立って局員が手分けして集めたものであった。我々教員にとって寄附金や広告集めは苦手である。頭をさげてもらった広告が印刷代等を差し引くとその額面からは想像できない金額になってしまつてがっかりしたものであった。

さて、つづいて研究大会の運営会議の案内をしてその大綱をにつめ、議案書及び大会運営要項を決定しなければならない。今年は10周年記念大会なので特別行事がふえてますます大変であった。記念誌の刊行は学校の記念誌の編集よりはるかに困難な仕事である。祝賀会等の案内状の発送にしても先輩校長先生の消息を調べるだけでも大仕事であった。

この頃には大会の参加申込みが始まっている。これは地区支部経由ではないので全道300余校から続々と集まつてくる。これが大変な仕事である。参加料の同封されていないもの、同封してありますと書いてあって入っていないもの、人数と金額のあわないもの、追加会員登録の名簿や会費がまじっているもの等々。会計係がてんや

わんやで整理したあとこれを地区別・職員掲載順に整理して参加者名簿作成の原稿にするわけだが、記載内容や参加料の点で疑問がある分はコピーを取つておくのだが、このような学校に限つてコピーしたものや、指定外の用紙で申込まれて泣かされることが多い。

また、締切日といつものどんなんの場合でもなかなか守られないものだが、どの時点でほんとうに切るかが難しい。この頃には全道各地から追加・削除・変更・個人申込等の電話がかかり続ける。かける人は一件だが受ける方は全道からのを一手引き受けだから、仕事の合間に授業に出かけるということになりかねない。それにどういうものか人間は自分の申込みが遅れたことは忘れて、参加者名簿に自分の名前がのっていないと気嫌の悪いものらしい。

参加者名簿と言えば3・4年前までは手分けして事務局員が印刷していたが、前記のような事情であまり仕事を早く始めるわけにもいかないし、御用納めや正月3カ日を返上してやらなければ出来ない仕事であったし、学校には事務生もいないし、3,000人からの名簿を3,000部以上印刷製本するの莫大な仕事の量であった。

話は前にもどるが、運営会議終了後直ちに大会資料の編集にかかる。学期末の仕事、答案の採点を抱え、未着原稿の督促を続けながらの編集は大変である。先にものべたように電話1つにしても、こちらも授業があり、相手も仕事のあることだから5・6本の電話が1日で用が足せないこともある。研究紀要の編集も大変な仕事であるが、大会資料は使う日時が決っているのだからどうにものばせない期限がある。不充分な原稿を渡すと業者も迷惑するし結局は仕事が遅れたり、校正が充分なものになかったりする。このジレンマに苦しんでようやく原稿渡しにこぎつける。

この頃には会場関係の準備をすすめておかなければならない。厚生年金会館になってから会場設営の手間がぐっと楽になったが、市民会館の時は大変であった年々参加者数が増えて大ホールだけではどうにもさばききれずロビーや会議室にテレビモニターをつけたりして全体講演が実は名をなさなくなってしまった。テレビの借用にとどまらず、補助椅子の確保のために車をチャーターしアルバイトの生徒と一緒に旭丘高校や南高校から椅子を運んだり、返却したりするのも大きな仕事であった。参加者の食事も斡旋しなければ不親切だと言われ、弁当を用意したらさっぱり買ってもらえずひどい目にあったこともある。

会場といえば教科の会場は各教科部会に委せてあるのだが、だんだん良い会場を欲しくなるのは無理もないことながら4・5万もする会場を借りられてあわてたこともある。

諸表示、講演題等の作成は事務局の書道の先生にお願いしているのであるが、物が大きいだけに大変である。

生徒のいなくなった学校の廊下で書いてもらうのだが、乾いたと思って巻いたら墨の中にかわく糊になって破らざるを得ないという失敗もあった。

新しい会場が良いとばかり言えない。モダンなかわりに仲々室の配置が呑みこめないことや会議室が少なく打ち合せの場所を見つけるのに苦労したりする。始めての年、前述の講演題の尺寸が打ち合せの時と話がちがい、前日の夜書き直したことや、幕を開けた途端ステージと会場の温度差の関係で強い空気が流れ出し演題が5月の鯉のぼりのようにゆれ出して汗をかいことなどは忘れられない思い出である。紙の下端におもり用の丸い棒をつけることを覚えたのも研究会の知恵であったのだがここでは通用しなかったのだ。

さて、話はもどって年末ぎりぎりに校正を終って新年を迎える。2・3年前までは正月3カ日もそこそくに資料の袋詰めをしたものである。その当時は教科部会の研發資料も全部事務局に送られ、それを全部仕分けして袋詰めし、ゲンポールに詰めて会場まで運んだものであった。その後これらのものは教科部会に責任をもってもらうことになり年々仕事の量は減って来た。

ところが今年は大会資料だけなら印刷所から直接運ばせてもいいのではないかということになり、事前に必要な分だけを事務局に届けてもらって大会当日早めに会場で受け取ることにした。現品の一部がこちらに事前に届けられているので安心して当日待っていたのであるが思いがけないハプニングになってしまった。早めに会場に到着、設営をすすめながらいくら待っても資料がつかないのである。電話をするとすでに出ており、車の特徴はこれこれであるという。冬の交通事情を計算に入れても話があわない。そのうちに開場しなければならない時間になる。仲間や幹部からはどうしたといわれ、会員からは責められる理由がわかれば弁解のしようもあるのだが、あの時のせつなさも忘れられないものの1つである。後で解ったことだがオープンして間もない頃だったのでホールとホテルを間違えて別なところに運びこまれていたのであった。しかも、遅ればせながら到着した資料は、これまで責任上苦しい立場にあった教科の担当責任者にあつという間に分捕られ、こちらで計画していた配分計画はおじやん、あちこちから足りない足りないという報告が来るのだがなす術もなかった。

話は再び前にもどって大会前日、最終点検。室には講師との打合せも終って第1日目を待つ。前日に会場作りをすることは許されないので当日の朝の仕事になるのだが、あまり早く行ってもあけてもらえない。眠さと寒さでいらっしゃしながら待つのも楽でない。

会場作りには30分しかない、早くも受付を待つ先生達の顔が見える。（私達に反対する人達の不参加呼びかけが入口のそばで行なわれたのも何年か経験した思い出である。）やがて人波が厚くなりだしてドアを開ける、たち

まちのうちにロビーは新年交礼会の雰囲気に満ちる。なつかしい顔はたくさん見えるがじっくりと挨拶している暇がない。遂に開会のベル。先生方はホールに消えて行く。開会式が終っていよいよ講演が始まる。この瞬間が一番ホットする時である。とにかく矢は放たれたのである。しかし、身体がそんなに暇になった訳ではない。事務局のメンバーで毎年の講演をじっくり聞いた経験のある人は記録係になった人達くらいではないだろうか。

講演の間中やっかいなのは呼び出し電話である。時季が時季だけに、出張のついでに寄っていけという親せき、友人の電話も多いようであるが、こういう電話に限って何回電話しても通じないのはどういう訳か詰問される始末、ひどいのは明らかにニセ電話の緊急呼び出しもあった。またこのような呼び出しの相手は案内申込みだけして出席していないケースが多い。

しかしながら、時間の方はなんとか無事に過ぎていってどうやら大会第1日目が終る。次の日に教科別集会を控えているとは言え思いきって酒でも呑みたい気持である。

しかし、2年前までは教科部会の事務局の大半を旭丘高校が引き受けていたので、他の先生方が「〇〇会」と称する旧勤務校グループの酒宴に散って行くのをうらやましく見ているのである。

大会が終れば3学期の始まりである。3年生の担任ともなれば進学相談やら調査書がきに追われる。

2月中旬に第3回役員会を開いて1年間のお開きである。この役員会では例年事務局ご苦労さんの声が多いが、これはねぎらいの言葉であると同時に新年度もよろしくという意味もありそうである。お開きとはいえ研究紀要係は原稿が遅れた弱身もあって業者追及の鉄先もとかくにぶりながら3月10日の発刊にやきもきするのである。

3月10日といえば近年は高校の卒業式ときまとっているが、これにからんで新年度の入試選抜。採点をしながら来年の事務局はどこに行くかな、しかし封筒の残りが少なくなってきたか印刷発注はどうしようかな、などと思案しつつ春の一時は過ぎていくのである。

（野元哲浩記）

## 【研究部】

従来、本会の事業としては、教育研究大会の開催、研究紀要の発行、会報の発行との三つの事業であったものが、42年度より研究調査が新事業として加えられました。この目的は既に平素から各先生方が、多方面にわたって研究なされていることを、会として、いくらかでもバッカアップし、助成することによって、その分野の発展促進に寄与したいとの願いから生れた訳です。

具体的な内容は、教科関係のものは教科部会、教職関係のものは各地区支部で希望申込みを受けて、とりまとめ本部事務局に連絡をする。研究調査の期間は1年又は2年継続で、いずれの場合も1万円の調査費が助成される。なお、研究調査の結果は、研究紀要に掲載発表し多くの先生方の研究の参考資料にもして頂くことになっております。

発足当初は、各先生方の御遠慮もあってか、申込み数も少なく、当方よりお誘い?…の連絡を申し上げたりした裏面もあった訳ですが、近年は積極的に各分野にわたっての幅広い角度からの研究調査の申し出を頂き係としましても嬉しく思っている次第です。

今後も引き続き御遠慮なさることなく、どしどし申し出を頂き、微細ながらも諸先生の研究の助力になり得たならば、会としましてもその意義が達せられますので、よろしく御願い申し上げます。

これまでの研究調査のテーマを年次を追って記載します。

42・43年度「英語学習における語学実験室の利用について」 札幌旭丘高校 寺島善五郎  
山崎 滋樹  
野元 哲浩

43 年 度「商業教育の多様化について」

小樽商業高校 古室 俊夫

43・44年度「苫前郡の産業発達歴史」

羽幌高校 関 秀志

43・44年度「北海道の地盤構造について」

札幌旭丘高校 高田 裕幸

43・44年度「世界各国の理科関係教科書の比較研究」

札幌南高校 辺見 竜夫

43・44年度「自動電気品の改良について」

幕別高校 島倉 良夫

44 年 度「3ヶ年のホームルーム指導綴」

大樹高校 平井 文雄

44・45年度「郷土地理の機械化についての研究」

白糠高校 富永 廉一

44・45年度「現代国語指導理念への考察」

室蘭清水丘高校 入江 澄夫

45 年 度「中卒者の進路別における機械実習の内容とその実態の比較調査」

滝川工業高校 寺谷 広安

影山 利夫

45 年 度「学習指導要領工業管理科の解説書作成に関する調査研究」

北海道工業高校 設楽 和夫

45 年 度「生物教材としてみた函館附近の両生類」

函館西高校 白井 啓

45・46年度「学校実習漁場におけるマコンブ栽培に関する研究」

恵山高校 阿部 準三

小田 貞雄

46 年 度「学校経営の近代化を志向して」

芦別商業高校 佐藤 枝郎

46 年 度「政治経済における課題研究学習の実践」

札幌旭丘高校 鈴木 健吉

46 年 度「工業高校卒業者の職場生活の意識について」

札幌琴似工業高校 清水 茂

46 年 度「本校におけるスポーツテストの実態とその活用」

札幌旭丘高校体育科

47 年 度「修学旅行地の地理的考察」

札幌旭丘高校 沼田 武

47 年 度「北海道高校国語科における教育工学研究実践の現状と課題」 啓成高校 獅子原 正

47 年 度「箱館英学史の研究」

興部高校 長谷川誠一

47 年 度「工業実習教育を中心とした技術教育に関する研究」 夕張工業高校 村井 猛

(柴田 雅美記)

# 〔編集部〕

## 研究紀要の流れと現状の 問題点に就いて

### (1) 紀要刊行推移の概説に就いて

研究紀要も会員の皆様の絶大の御支援のもと御蔭様をもって第10号を迎えることと相成り、編集責任者としてその実務に携わってきた者の1人として感無量の念に堪えない。さぞかし創設期の苦難の中に第1号、第2号と編集し、出版の労を重ねられてきた先輩諸先生方におかれても、なおさら万感の思い胸に迫るのかんひとしおと推察されるのである。

現在の研究紀要是、第1号と比べるとよく判るように300頁を超えるような堂々たる大論文集に成長し、全道各種あるこの種研究紀要の中でも最も権威あるものとして確固たる地位を占めてきていることは全会員を始め大方の識者の認めるところであろう。

その上、国立国会図書館を始め各種研究団体並びに本州各県の高等学校教育研究会との交流も年ごとに広がり、今や全国的にも本紀要の名声は浸透しつつあると言える。

さてこのような大論文集も、その初めにおいては頁数もたかだか160頁程度予定で、しかも短期間内で発行を余儀無くされての出発であったことを考えると、全く隔世の感ありと言えよう。今参考資料として「研究紀要発刊形式の推移表」を作成してみたので、これによって10年の歩みを眺めて頂けるならば幸甚である。

尚、歴代会長が「紀要」並びに「会報」に載せられた巻頭言の言葉「本道の学校教育を前進させるもの」「貴重な献集としての評価あるものに」「研究者の後世に成果を残しうるチャンスの場」「全ての人びとの協力の場、相互交流の場」「本道高校教育の『研究の広場』としての役割を果たすもの」「本紀要是、明日への教育の糧」などを綴り合わせて眺めてみると、「研究紀要」の目標、在り方、精神の何たるかがその歴史的過程の中に

### 研究紀要発刊形式の推移

項目	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号
規格	B5版 160頁程度	B5版 180頁程度	B5版 180頁程度	B5版 180頁程度	B5版 180頁程度	B5版 200頁程度	B5版 250頁程度	B5版 250頁～ 300頁程度	B5版 250頁～ 300頁程度	B5版 250頁～ 300頁程度
締切日	39年? 1月20日	40年 12月10日	40年 12月10日	41年 12月10日	42年 12月10日	43年 11月10日	44年 11月10日	45年 11月8日	46年 11月8日	47年 11月6日
原稿内訳	文科系 (理科系)	(A系統) (B系統)	(A系統) 50枚程度 (B系統) 35枚程度	(A系統) 60枚程度 (B系統) 40枚程度	60枚以内	60枚以内	70枚以内	70枚以内	70枚以内	70枚以内
教科										
教職一般				30枚以内	30枚以内	30枚以内	30枚以内	30枚以内	30枚以内	30枚以内
備考	文科系 (理科系)	(A系統) 国語・社会 英語・芸術 保育 (B系統) 数学・理科 商業・工業 農業・水産 家庭	(A系統) 国語・社会 英語・芸術 保育 (B系統) 数学・理科 商業・工業 農業・水産 家庭	(A系統) 国語・社会 英語 (B系統) 保育・芸術 商業・工業 農業・水産 家庭	(注)部長 (注)審査は 提出する こと。	合本形式 と2分冊 形式とす る。 分冊は 普通科系 職業科系 (注)部長 (注)審査は 提出する こと。	・紀要是全 1冊とす る。 (注)部長 (注)審査は 提出する こと。	同左 (注)同左 (注)同左 (注)同左	同左 (注)同左 (注)同左 (注)同左	同左 (注)同左 (注)同左 (注)同左
	(注)当初は 2分冊予定	(注)2分冊 予定								

はっきり述べられていることが十分過ぎる程推察されるのである。

## (2) 紀要応募原稿の推移に就いて

第1号（昭和39年発刊）から第10号（昭和48年発刊）までの間に、全部で220余編の立派な紀要原稿を頂いたが、それを10周年の流れの上で見るため、「部会ごと原稿提出一覧（A表）」と「地区支部ごと原稿提出一覧（B表）」というように応募内訳数の分類を試みてみた。今までに原稿を提出された方のみならず、これから論文提出をと心掛けておられる方々の参考にもなると考える。

先ず、A表から見た上では、理科、商業、国語、英語部会の原稿の応募数が多いのが判る。尚、この表の下方を御覧頂くと、第1号～第10号までの教職一般原稿応募状況及び各紀要ごとの原稿登載数の変遷も判り御参考に供するものと考える。第5号・第6号では、応募数多く編集者は頁数を気にしながら嬉しい悲鳴をあげた事などが伺えようし、第9号では、社会・数学・理科などの教科に応募者なく、がっかりさせられたことを御覧頂けよう。

さて、B表は地区支部ごとの方で、これによって支部別論文提出状況が一目瞭然となろう。歴史的に眺めて本研究会が札幌の地に「呱呱の声」をあげ、しかも本部事務局が札幌市内の学校に固定化したためもあって、石狩支部内からの研究者が他支部より格段に多く、それに次

いで距離的に近い面もあってか、後志、上川と続いている。一方、留萌、宗谷、日高支部では反対に応募者少なく、遠距離とか他機関への発表とかの事情はあるにせよ一面本部編集部のPR不足も一因ではなかったかと反省させられている。

所で、この稿の最後に、上記の2表を勘案して言いたいことは、この10周年を契機として今までのようにならぬ、A・B両表のそれぞれに見られる論文提出の片寄りがなくなり、全道どの地区支部、教科部会からも万遍無く紀要原稿の提出がなされれば、恐らく、本研究紀要創刊当初の先輩諸先生方の夢であった文・理2系統刊行方式も可能となるであろうし、延いては最終目的とも考えられる各教科部会ごとの独立した研究紀要への発刊という理想へと進み得るのではないだろうか。

## (3) 将来の前進のための現状の問題点に就いて

この稿では、現状の編集部の直面している問題点を中心に2、3の事柄に就いて旨とさせて頂こう。

先ず最初に言いたい事は、毎度原稿締切日厳守に就いて大変な苦労をさせられているという点であろう。第1号から第4号あたりまではまあまあであったが、それ以降になると紀要論文応募者数が増加の一途を辿るようになり、編集部としては嬉しい悲鳴などと喜んではばかりいられなくなつた。勿論、頁の増加だけについてなら予算の許す範囲の措置で解決の目安はつくものの、締

部会ごと原稿提出一覧（A表）

部会 号 (年)	第1号 (39年)	第2号 (40年)	第3号 (41年)	第4号 (42年)	第5号 (43年)	第6号 (44年)	第7号 (45年)	第8号 (46年)	第9号 (47年)	第10号 (48年)
国語	3	4	1	3	3	3	2	2	1	2
社会	1	2	4	2	2	4	1	2		1
数学	2	2	1	1	1			2		1
理科	4	3	3	2	6	7	5	3		4
体育	1	1		2	2	1	1	2	1	2
芸術			1		2		1		1	1
英語	2	2	2	2	2	4	4	3	2	3
家庭	1	1	1	1	1	2	2	1	1	
農業	4	3		1	1	1	1		1	
工業			1	2	4	2	2	1	2	1
商業	2	2	1	3	4	4	2	2	3	3
水産	1		2	1	1	1	2	1	1	1
(計)	(21)	(20)	(17)	(20)	(29)	(29)	(23)	(19)	(13)	19
教職一般	1	3	1	3	2	3	3	3	2	2

（注）1号～3号は厳密な教職一般の区分がなかったので、その色合いの強いと思われるものを総数として出して見た。

地区支部ごと原稿提出一覧 (日表)

地区 号 (年)	第1号 (39年)	第2号 (40年)	第3号 (41年)	第4号 (42年)	第5号 (43年)	第6号 (44年)	第7号 (45年)	第8号 (46年)	第9号 (47年)	第10号 (48年)
石狩	8	8	7	5	9	9	4	6	3	6
道南			1	2	1	2	2	2	1	1
後志	6	2	2	5	6	3	5	1	1	2
南空知	1	1	1	2	2	1	3	2	2	
北空知	2	1	2		1	4	4	5	2	3
上川	2	7	1	1	5	1	1	3	2	
留萌				2						
宗谷					3	1				
網走	2	2		1	1		2	2	1	1
釧根			2	2	2	4	2			5
十勝		1	1	1	1	4	1	1	1	
胆振		1	1	2		2	1		2	
日高	1					1	1			1

切日厳守という人為的なものは相互間の約束ごとであり道義的なものもあるし、研究者それぞれが多忙な公務の合間にを利用しての真摯な研究業績のまとめとなれば、一概に締切日々ばかりも言ってはおれない訳だが、発行期日の事もあり編集部としては心を鬼にして毎回お願いしている訳である。今後共原稿提出者にはくれぐれも御留意頂きたい編集部最大のお願いである。

尚、この事に就いては早く第2代会長瀬米蔵先生が会報11号(昭和44年6月刊)の中で「原稿の締切りについては充分守って下さい。例年係りとしては苦しんでおりますので締切日は厳守を」と書いておられる。それ以来紀要原稿の件に就いて言及される時には会長より必ず付言される事柄となっている。

ここに蛇足ながら具体的な参考例として、最近の2カ年(昭和45・46年にわたっての「原稿集約表」をあげてみたので、御覧頂ければ幸いと思う。これによって締切日から最終原稿到着までの差の大きさに気がつかれることであろう。

次に、原稿枚数の関係もありいっぱいとからげとなる、ここ数年来編集部として経験した問題点を列記し今後の論文提出者への参考に供すると同時に、それら問題点の是正に編集部としてはより一層の努力を重ね、更に立派な紀要発刊へと邁進したいと考えている。

〈問題点〉

- ① 本部所定の原稿用紙未使用が依然として多い件。
- ② 論文書き方形式の不徹底の件。
- ③ 論文内容の印刷寸前変更の件。

④ 紀要原稿第1次校正(執筆者自身に依るもの)原稿の印刷所への返還遅延の件。

⑤ 論文原稿直送の件(必ず事務担当者経由)

以上、10周年記念原稿としてはいろいろな制約上から断片的な羅列に終わり、十分意に満たないものとなってしまったが、係り一同の今後より一層立派な「紀要」を、という将来にかける情熱を御了承頂けるならば幸いと存するのである。

(沢田正己記)

## 原 稿 集 約 表 (その1)

(45年度)

## 原 稿 集 約 表 (その 2)

(46年度)

(注) □ のみ期日以内到着

## 【組織部】

### 会員の推移

どの様な研究団体であれ、発足当時はその性格や目的は広く一般には理解され難い、本研究会もご多聞にもれず同様な経過をたどる。

初年度においては図に示すように全道高等学校教員の約21%の加入にすぎず、研究大会への参加者も335名とささやかに行なわれたといえよう。

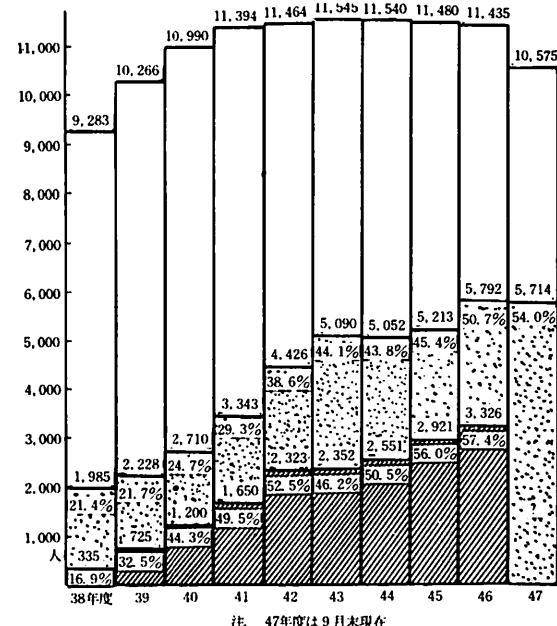
その後、関係者の熱意と努力によりその意図するところも理解されはじめ、昭和42年度には会員数4,000名、研究大会への参加率も52%と半数を超え、会場の確保に奔走するという嬉しい悲鳴が聞かれるようになる。

近年は当初から校長教研、旭丘教研などとこの会の性格などに疑問をもっていた教職員組合との摩擦も少くなり、加えて教育課程改定という教育界の動きに伴って会員相互の研修の一層の盛り上りもあって、昭和43年度には会員5,000名を数え、昭和46年度には全道高等学校教員の過半数を超える5,792名の会員加入をみるにいたる。昭和47年1月の研究大会には新装なった厚生年金会館の大ホールを埋めつくした会員は3,326名と第1回の研究大会参加者の10倍の多きにも達し、発足当時に比べ隔世の感があり、会の成長振りがうかがわれる。

本年も9月末現在の会員数は5,714名と昨年同期に比

べて約300名増であり、さらに増加の傾向をみせている。

本研究会本来の趣旨からも全道高等学校教員全員の加入が理想であろうし、その様なますますの発展充実をのぞみたいものである。



注：47年度は9月末現在  
 A □ 全道高等学校教員数  
 B ■ 会員数 % = 加入率 … A × 100  
 C ■ 研究大会参加者数 % = 参加率 … C × 100

(桜井文雄記)

## 【会計部】

### 予算について

昭和38年度創立当時は、会員数も少なく、教育研究補助団体として、国、道から補助金の交付を受けるために必要な、補助金以上の会費収入を得ることが困難で、地区支部を中心とした組織づくりが大きな仕事であった。

創立当初は、予算が小規模だったので、会の運営は非常に困難で、研究大会の開催や、研究紀要の刊行等の事業も縮小しなければならなかった。

教科別集会は、2年目から開催したが、経費の予算化が出来なかつたので、講師を依頼している教科部会のみ重点教科部会と称して経費の一部を本部が負担していた。

重点教科部会は、昭和39年度国語、芸術部会、40年度国語、数学、英語、家庭部会、41年度数学、英語、工業、商業、家庭部会だった。

昭和42年度（5年目）になって、補助金の増額、会員

増などがあつてようやく全教科に教科別集会の講師謝金旅費等の必要経費を配分することができるようになった。この頃から予算面での会の運営は、や、明るい見透しになってきたが、それでもまだ不充分で、事業の充実とともに、会費の値上げ、参加料の徴収等の措置をとらなければならなかった。

創立年度と現在の会費収入を比較すると、4.8倍の伸びで、参加料を加えると実に7.3倍になっている。補助金は2.2倍に止っているのが現状である。

本会が、教育研究団体として、さらに発展躍進するためには、事業内容の精進充実は勿論であるが、過去10年にわたる本会の実績と5,800名の会員を土台として、補助金の増額を要請する等、事業に見合った財源の獲得をはからなければならない。

(大関光記)

# 年表 十年のあゆみ

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
1963 (昭38)	1 道学力向上対策協議会発足 2 3 4 5 北海道高等学校教育研究会設立 総会が札幌南高校で開かれ初代 会長として梶浦善次就任 6 7 8 9 10 11 12 昭和38年度会員登録者数 (1985名)	能力開発研究所設立  高校学力テスト結果発表 高校に新教育課程が実施  中教審に後期中等教育の拡充整 備を諮問 全国学力調査実施（小中）  能力開発研究所第1回能研テス トを実施	青函トンネル調査坑着工式       網走地方で皆既日食観測 世界聯邦大会日本で開催 松川事件全員無罪判決 日本初の原子力発電成功 ケネディー大統領暗殺さる
1964 (昭39)	1 2 第1回北海道高等学校教育研究 大会（札旭丘）参加者数 335名 講師 森戸 辰男 3 研究紀要第1号発行 会報第1号発刊 4 高校入試制度を改訂し総合選抜 制を打出す 5 道教委“教頭制”を公布 6 7 8 9 10	文部省、小中学校の「道徳の指 導資料」第1集70万部を発行  能力開発研究所・進学適正能力 テスト実施  文部省体育施設五ヵ年計画発表 文部省全国学力調査を20%抽出 に改めると発表	茅室町大火   利尻町沓形・幌加内町朱鞠内町 大火 新潟大地震起る  道島にタンチョウヅル決定  全道冷害凶作 東海道新幹線開通 東京オリンピック開催

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
11		文部省「わが国の教育水準」 (教育白書) 発表	日本近代文学館文庫発足
12	昭和39年度会員登録者数 (2228名)		
1965 (昭40)			
1	第2回北海道高等学校教育研究会(静修) 参加者数 725名 講師 高坂 正顯 同 教科別集会	中教審「期待される人間像」の中間報告を発表	
2			北炭夕張炭鉱事故
3	研究紀要第2号発行 会報第2号発刊		ソ連初の宇宙遊泳成功
4	高校授業料値上げ		
5	道教委、公立高校の小学区制を廃止し、大学区制に移行を決定 高校再編成の基本方針発表	I. L. O. 87号条約関係国内法成立	ノールウエーマンモスタンカー船・室蘭港で炎上
6		家永三郎教科書検定問題で第1次訴訟を起こす 教員養成のための教育課程の基準について	利尻・礼文・国定公園に昇格
7	会報第3号発刊		吉展ちゃん事件容疑者犯行自供
8		文部省・日教組・中央交渉再開	
9			シュバイツァー死去
10			朝永振一郎ノーベル賞授賞 国立大雪青年の家設置
11		「わが国の社会教育」—現状と課題—教育白書	
12	昭和40年度会員登録者数 (2710名)		三浦綾子「氷点」ベストセラー
1966 (昭41)			
1	第3回北海道高等学校教育研究大会(静修) 参加者数(1200名) 講師 沢田 廉輔 同 教科別集会	教育課程審議会、愛国心の育成などを内容とする教育課程改定基本方針をまとめる	北海道に集中豪雪
2		盲学校及び聾学校の高等部の学校を定める省令	全日空機羽田沖に墜落
3	研究紀要第3号発行 会報第4号発刊		英旅客機富士山上空で空中分解
4			1972年冬季オリンピック大会の札幌開催決定
5			
6			
7	会報第5号発刊	東京都高校の学校群設置と入試教科を3教科に削減	国民の祝日法改正(敬老の日・体育の日)

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
8			中共文化革命激化
9			北海道の木にエゾマツ決定
10		東京都立高等学校の通学及び学校群にする規則 中教審「期待される人間像」を含めて「後期中等教育拡充整備案」を正式に答申した	
11	道中等教育振興協議会、高校入試科目削減を諮問する		国立劇場開館
12	昭和41年度会員登録者数 (3343名)		建国記念日政令公布
1967 (昭42)			
1	第4回北海道高等学校教育研究大会(静修)参加者数(1656名) 講師 平塚益徳・中川秀三 同 教科別分集会		
2	道青少年憲章できる		道旗と道章決まる
3	研究紀要第4号発行 会報第6号発刊	文部省私大奨学金、幼稚園補助などの私学振興案を発表	国際数字テスト(シカゴ大学)で日本上位 北海道文学館を設立
4	梶浦会長退職、会長として長瀬米蔵氏就任		
5	二本木教育長勇退・岡村教育次長が昇格		
6	会報第7号発刊	家永三郎教科書検定は違憲であると第2次訴訟を提訴	
7		公立高等学校の設置適正配置および教職員定数の標準等に関する法律を一部改正	釧路湿原を国の天然記念物に指定
8		高等学校における職業教育の多様について答申	
9	中・高教員の海外研修派遣始まる		北海道立美術館開館
10		教育課程審議会、小学校教育課程改正について最終答申。高校生の意識調査	三派全学連と警察官が衝突 黒田、ケブロン、岩村、永山顕彰像の除幕
11 12	昭和42年度会員登録者数 (4426名)		北大で本道初の「原子炉」始動
1968 (昭43)			
1	第5回北海道高等学校教育研究大会(市民会館) 参加者数 (2323名) 講師 細谷俊夫・伊藤祐時 同 教科別集会		
2		日教組、超勤手当問題でマンモス訴訟	

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
3	私立高校統一入試始まる 研究紀要第5号発行 会報第8号発刊		
4	高校生の政治活動の指導徹底するよう指示 高校再編成計画を実施 副読本「北海道百年のあゆみ」発行	美濃部都知事、朝鮮大学校を各種学校として認可	小笠原返還協定調印
5		71年度実施の小学校学習指導要領案を発表（歴史学習の強化が特色）	十勝沖地震
6	会報第9号発刊	文化庁発足	富山県のイタイタ病政府は公害と認定 北海道大博覧会開幕 日本初の心臓移植手術
7			
8			
9		東大、日大をはじめ51大学で学園紛争が発生	水俣病と阿賀野川水銀中毒事件を正式に公害と認定
10		学生の暴力行動に対する処置について通達	北海道百年記念祝典 明治百年記念式典
11		わが国の教育のあゆみと今後の課題について中央教育審議会でまとめる	川端康成ノーベル文学賞受賞決定
12	昭和43年度会員登録者数 (5090名)	上智大、機動隊を導入して大学をロックアウト（上智方式の影響各大学へ） 坂田文相、東京教大、東大当局の話し合いで入試中止を内定	第九次南極地域観測隊南極点に到着 3億円強奪事件
1969 (昭44)	1 第6回北海道高等学校教育研究大会(市民会館)参加者数(2352名)講師 高坂正児・犬飼哲夫同 教科別集会	能力開発研究所事業を中止と決定 東大7大学部集会、大学当局と10項目の紛争解決の確認書を取り交わす 東大加藤学長代理と坂田文相会談、入試実施に結論を得ず	「日本の教育計画」に関するOECD派遣調査団来日 北大に世界最大の低温実験室完成
2		東大当局安田講座等の学生による封鎖の全面解除のため機動隊を導入、202日にわたる封鎖を解く。	全道にドカ雪
3	研究紀要第6号発行 会報第10号発刊	政府の方針で東大の入試中止を決定 能研テスト、69年度から休止決定	
4			
5			
6	会報第11号発刊	今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策	

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
6		について中央教育審議会が中間報告	
7		衆院本会議、96時間ぶりに「大学運営臨時措置法」を可決	日米文化教育協力合同委員会開催（ハワイ） アポロ11号人類初の月着陸に成功
8		「大学運営臨時措置法」公布	
9		各地で高校の封鎖騒動起る	
10		高校における政治的教養と政治的活動について文部省が通達	
11	教員の特別昇給実施要綱を提示する。	放送大学問題懇談会、意見書を提出	放送大学準備調査会発足 北大封鎖解除の為機動隊動員
12	昭和44年度会員登録者数（5052名）	放送大学準備調査会が発足	
1970 (昭45)			
1	第7回北海道高等学校教育研究大会(市民会館)参加者数(2551名) 講師 岸本康・益井重夫 同 教科別集会		
2		保健体育審議会、学校給食改善策を坂田文相に答申	人工衛星第1号「オオスミ」を打上げ
3	研究紀要第7号発行 会報第12号発刊 高校入試、猛吹雪のため延期 英語科、理数科の増設	日本教育者会議発足	万国博大阪で開催 「よど号」日航機が軍派学生に乗取られる
4	長瀬会長退職、磯貝芳司氏会長に就任		過疎地域対策緊急処措法公布 勤労青少年福祉法公布 著作権法公布
5		「私学振興財団法」成立 中教審、高等教育の改革基本構想の中間報告と初等中等教育の改革基本構想、試案を発表	
6	道中振協が高校入試改善で中間報告	日本教職員連盟発足	
7	会報第13号発刊	東京地裁の杉本良吉裁判官、教科書裁判で家永三郎勝訴の判決を下す。 文部省、杉本判決を不服として東京高裁に控訴	忠類村でナウマン象の化石骨完全発堀
8			北海道百年記念塔完成
9			
10		高等学校学習指導要領告示	
11			
12	昭和45年度会員登録者数(5213名)	文部省の大学入試改善会議、大学入試改革を中間発表	札幌市「百万都市」になる

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
1971 (昭46)	第8回北海道高等学校教育研究大会(市民会館)参加者数(2921名)講師 衛藤清吉・岸田純之助 同 教科別集会	文部省小・中新學習指導要領の部分改定を告示(福祉優先の公害教育方針を明確化する)	札幌国際冬季スポーツ大会(オリンピック)開催 O.E.C.D「日本の教育」で報告書まとめる。
	道立高校授業料値上方針決定 私立高校授業料値上げに踏み切る	文部省小・中学校の新しい指導要録を通知	
	研究紀要第8号発行 会報第14号発刊		
	4	小学校の教育課程、10年ぶりに改定(神話、公害など登場)	北海道開拓記念館開館
	5	国立特殊教育総合研究所設置される。	
	6	教育制度検討委員会「日本の教育はどうあるべきか」の第1次報告書を日教組委員長に提出(第3の教育改革)	沖縄返還協定調印 室蘭市で公害教育研究スタート
	7 会報第15号発刊	高見文相と横枝日教組委員長のトップ会談(第1回)文部省で行なわれる。	「ばんだい号」横津岱に激突
	8		北大「キナンボ号」津軽海峡漂流横断
	9		第1回移動芸術祭開催
	10		
	11		
	12 昭和46年度会員登録者数(5792名)	文部省の大学入試改善会議「大学入学者選抜方法の改善について」最終報告を発表	
1972 (昭47)	第9回北海道高等学校教育研究大会(厚生年金会館) 参加者数(3326名) 講師 林 健太郎・矢口 新 同 教科別集会	各国立大学で授業料値上げ反対の動きが表面化	
	2		
	3 研究紀要第9号発行 会報第16号発刊	文部省大学間の単位互換制を公布 文部省教科書検定マル秘文書の写しを教科書裁判の東京地裁に提出 新しい中学校教育課程全面実施 中教審の新委員決定、異色のメンバー構成となる。	「浅間山荘」連合赤軍が人質とともに立てこもる。 山陽新幹線(大阪~岡山)開通 高松塚古墳で壁画発見
	4		
	5		沖縄返還

年	北海道教育 高教研	日本教育	社会
6		教育制度検討委員会「日本の教育をどう改めるべきか」の第2次報告書を日教組委員長に提出 高見文相第10期中教審に「教育・学術・文化の国際交流」について諮詢	
7	会報第17号発刊		
8			
9	昭和47年度会員登録者数中間集計 (5714)		
10			
11			
12			
1	第10回北海道高等学校教育研究大会 創立10周年記念大会 参加予定(3400)(厚生年金会館)  講師 市村真一・和達清夫 同 教科別集会 研究紀要第10号発行 (予定) 会報第18号発刊 (予定)		
2			

## 編集後記

10年を記念して記念誌をまとめる話が昨46年の第2回役員会の席上であった。記念事業として常識的な記念誌の発刊は、はたから見ると大したことではなさそうに思えるが、その当時、この研究会の発足以来の全体を若しく知っていたら誰しもしおみするだろうと内々考えていた。

これまで本部事務局はこの10周年を意識して資料の整備や必要な文献の保管をしていなかったからである。事務局が怠慢であったのではない。この10年誌の「本部事務局」の中でものべている通り諸文書の作成、会議の運営、会員加入手続、会報、紀要の編集、大会の運営等殆んど息をつくひまさえなく続く年中行事に追いまくられているうちに10年がすぎてしまったということである。

今年度に入り本部事務局の組織の中に記念事業部が臨設されて10周年記念誌を編集することになったとき、教育研究会の10周年誌とはどんなものであるか、又あるべきか、など理解し、納得の上始めたのではない。資料の中に埋れながら、まず初年度から手あたり次第あれこれ読んで整理しているうちに何か方法がつかめるのではないかと浅はかな出発だった。最初の企画も後になって大幅に変更する余地を作りながら比較的ゆったりした気持ちでいたが歴代会長、局長を開む座談会が終り、夏休みが過ぎた頃、依頼した原稿がなかなか集まらず又、10年の歴史をたどる原稿がはからず焦りぎみだった。

今ここで記録を整理し、記録に残っていない面をはっ

きり浮ばりにしないとやがて忘れ去られてしまうようなことが多くあるにちがいない。それを第一にしようと考えた。これからこの種の研究会がどう発展してゆくか将来の展望を考えるためにもこの10年誌のもつ意味が大きいことを感じた。

編集をふり返ってみると不満足な点ばかりである。予定した内容の10分の1も満たされていないし歴代会長をはじめ、原稿をお寄せ戴いた多くの方々の意向を充分もりこめなかったことが一つである。又過去の研究成果や業績を掲載するにも内容面にわたることが出来ず貴重な発表を形式的に羅列してしまったくらいがある。又「歴史と運営」の中で全体講師の講演の要約をのせているが、会報の要約と手もとにあったノートをもとにして普通以上に信用のおけない記憶をたどりながら作ったものであるだけに講師の論旨と全く別のものになっているのではないかと恐縮している。

多くの人々の叱責を覚悟しながらこれらの欠点を次の20周年記念誌で補っていただけるものと念じて後記とする。 12月25日

編集委員 寺島 善五郎  
柴田 浩一  
由利 一之  
真田 達雄  
西田 裕  
増田 忠二郎

---

昭和48年1月6日 印刷

昭和48年1月9日 発行

## 10周年誌 (非売品)

発行 北海道高等学校教育研究会  
札幌市中央区伏見町1872の4(札幌旭丘高等学校内)

発行責任者 磯貝芳司 (会長)

印刷 株式会社 正文舎印刷所  
札幌市白石区菊水西町2丁目

編集 10周年記念誌編集部

---